

---

# 幻想物語 ～『夏』～

夢幻遊戯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想物語 ～『夏』～

### 【Nコード】

N1532V

### 【作者名】

夢幻遊戯

### 【あらすじ】

高校二年生の夏休み。少年は友人からの提案で旅行へと出掛けることにした。向かった先は妖怪にまつわる伝承が多いとされる田舎の町。そこで少年は、不思議な体験をする……。

## 第一章：お狐様との出会い（前書き）

友人に誘われて旅行へと出掛けることとなった。

そこは妖怪にまつわる話が多いと言われている、都会と対極の位置に立つ田舎。

そこで一人の少女と邂逅を果たす。これが、摩訶不思議な夏休みを……旅行を送ることとなる切っ掛けとは知らずに。

## 第一章：お狐様との出会い

八月中旬、季節は言うまでもなく真夏。

空を見上げれば広大な青空が広がっており、その青空に燦燦と輝きを放つ太陽が浮かんでいた。今日も今日で相変わらず暑い日差しを地上へと向けて放っている。

外に一步出れば体温は瞬く間に上昇し額から背中から大量の汗が流れ落ちていく。その汗に衣服が濡れ肌に張り付き不快感を与える。そんな中、この夏を乗り切る快適なアイテムや夏バテ予防にピッタリな料理とテレビから雑誌と紹介されている。

…… 昨年の夏はこんなにも暑くなかったと記憶している。これも全ては地球温暖化の影響が原因なのだろう。ただ、それは大小新旧様々な高層ビルが群集している都会の街並みの話であって…… 自然に囲まれた田舎はそうまでもない。

人の手が加えられていない、アスファルトで塗り固められた灰色の地面ではなく自然によって織り成された道。その左右、緑色した立派な竹が幾つも生え並び天高く伸びている。

竹林の道、そこを三人の少年は歩いていった。

「いやあ、今日はいい天気だなあ！」

眼鏡を掛けた少年が口を開く。とても上機嫌な様子で鼻歌まで歌っている。真夏の太陽が照っていると言うのにも関わらず、その顔には汗一つ掻いていない爽やかな顔をしていた。対して、その後ろを歩く二人の少年は大量の汗を流しながら息を乱れさせていた。足取りも重く、前を進む少年との距離は一步…… また一步と開いていく。

何でアイツは、あんなに元気でいられるんだ……

少年

久國ひさくには先頭を歩く少年に対し疑問を抱きながらそ

の後姿を見つめた。

事の発端は何だったか、と不意に思い出す。

そう、全ては智の一言が全ての始まりだった。学生にとって最も長い休みであり同時に面倒な休みでもある、それが夏休みだ。

そんな夏休み、男三人で何処か旅行に行かないかと言う話が友人の智の口から出た。

旅行、と言う物を一度も経験したことのない自分にとってはとても興味のある話だった。反対する事無く、智の言葉に賛成を唱える。同じく、賛成を唱えていた明典の三人で旅行に行くことが決まった。男だけの三人旅。華は一切無くむさ苦しいとしか言い様がないが、現地で可愛い女の子を見つけたらナンパをしてそのまま彼女に……と言う計画が含まれている為にあえて女友達に声を掛けることはしなかった、とは智談。

何はともあれ初めての旅行。初体験の事に期待と不安を胸に膨らませながら……その待ちに待った当日を迎えて、心底後悔した。

「全く……何でこんな場所やねんや。周りなぐんにもないやん」

隣を歩いている黒のセミロングの少年 中田 明典が不満

げに言う。

明典が愚痴を零すのも無理はない話だった。

電車に乗って約三時間弱、見慣れた都会の街並みはやがては田畑や農家と言った田舎の風景へと姿を変える。

そこから電車を降りて約一時間弱、真夏の太陽が照る中必死に歩いている。智が予約したと言う宿が見えてくる気配はなく、景色は相変わらず生い茂った竹、竹、竹だ。

聞こえてくるのは智が上機嫌そうに歌っている鼻歌と、明典と二人揃って息を切らし荒げている呼吸音。時折吹く生暖かい風に吹かれ、互いの草木を擦り合わせる音のみ……。

……初めて、と言う事にただ楽しみにしていた。そして全て任せとおけと言われるまま智に全て任せ、脳内では勝手に某Dランドなどと言った大型アミューズメントパークがある様な場所、東京と言

った都会の方へ行くと想像していた。

それが秋条<sup>あきこうじ</sup> 智<sup>ち</sup>と言う人間がどういったヤツなのか、と言う事を頭の中から忘れさせていた。

智は俺らと、その辺の学友達とは少し違った性格の持ち主だ。今の男子ならばゲームや漫画、女子ならばネイルアートなどといったお洒落を趣味としている事が殆どだろう。俺だってゲームや漫画は大好きだ。

だが、智は少し違う。コイツは昔から神社や仏閣、寺や教会と言った場所に行くのが大好きなヤツなのだ。休みで何処かに遊びに行かないか、と初めて言われてそれについて行き辿り着いたのが清水寺。何をするかと思えばカメラを片手にあらゆる角度、位置から写真を撮り出す。

神社や寺などに行ってもやることなく何も面白くない。一体これの何処が面白いのか、と本人に尋ねれば 普段目にしなければ感じない場所だからこそ神秘さがある、それをこの目で見てこの身で感じるのが面白いし楽しい、と智は返答した。

さっぱり理解出来ない。初詣やふらりと街を歩いている時見かけたりはするものの、智の言う様に神秘さなど全く感じられない。まあ人の趣味は各々違う。智には智の、自分達には分からない感性があるからこそ、このような趣味を持っているのだろう。

その趣味を全開にされた今回のこの旅行。智のチョイスした場所はドが付く程の田舎、そしてその田舎を選んだ理由は最早言うまでもない。興味深い伝承がある神社や寺に行くことがこのド田舎<sup>あまぎちやう</sup>……天儀町を選んだ理由だ。

確かに、智に全てを任せると言ったことは言った。だからと言って幾らなんでも自分の趣味をメインとし同行する面子の事も少しは配慮して欲しかったとは、最後の祭りではない。

「なあ、まだ着かへんのか？ まさか道に迷ったとかそんなネタやめてや」

明典が智に尋ねる。俺はと言うと、無駄に喋り喉をこれ以上渴かせたくないからだんまりを決め込むことにした。コンビニと自動販売機で購入したペットボトルのスポーツ飲料水も、もう残り僅かだ。途中で自動販売機や水飲み場があることは、恐らくない。だからこそ残りの貴重な水分は最後までとっておきたかった。

「後少しだよ。て言うか、どうして二人はそんなにバテバテなんだ？」

「お前頭可笑しいやろ」

明典の言葉に同感と言う意味合いで頷く。智は不思議そうに小首を傾げていた。その反応に無性に腹が立つ。

現在の時刻は午後三時過ぎ。出発してから大分経つが、まだ宿は見えてこない。

一体いつまでこの竹林の道を歩かされるのか、そう思った矢先不意にゴールは訪れる。

「見えた、あの宿だよ！」

指差しながら走っていく智。智との距離が空いている分、こっちからはまだ宿の姿が見えなかった。

後少しでゴール……、ようやく休めるとわかると最後の力を振り絞り、歩を進める足に鞭打ちゆつくりと駆け出す。それに続いて明典も非常にゆつくりとだが走り出した。

「み、見えた……」

数メートル進んだ先、待ち望んでいたゴールがそこにあった。

今日から四泊五日、宿泊する旅館。その宿はあまりにも立派な旅館だった。

事前にどのような場所か、どんな旅館に宿泊するのかは智から知らされていなかった。従ってこの田舎に着き自然の道を歩いていたら、きつと旅館もボロボロで薄汚い感じなのだろうと偏見を抱いていた。

だがそれは此方の勝手な偏見で、実際に目にしている旅館は全くの逆。良い意味で予想を裏切られた。

遅れてやってきた明典も旅館の外観を見て驚きの声を挙げていた。

「なあ久國、ホンマにここで……あつてるん、やなあ？」

「俺に聞くなよ、明典……」

明典が心配するのもわかる。この旅館、何処からどう見ても一介の高校生が宿泊出来るような安い旅館ではない。

セレブ……つまり金持ちが行く様な超が付く程の高級旅館、そんな雰囲気放っている。

そして旅館の入り口前では、早く来いと手を振りながら呼んでいる智の姿が見える。

ここまで来て後には引き返せない。久國は明典と顔を見合わせ、手を振り呼んでいる智の元へと駆け出した。

「ようやく休められるわ……」

部屋に着くなり、明典は大の字に寝転がる。それに続いて久國と智も大の字に寝転がる。

畳が張り詰められた、三人が寝泊りするには若干広過ぎる空間。

本当にこんな立派な旅館に俺らは宿泊するのかと心配を抱いたが、この旅館の女将に普通に部屋に案内されたから間違いではない。

何はともあれようやく旅館へと着いた。歩き疲れて棒になり掛けている足も休めさせられるし、残り僅かの水分を心配することなく充分に水分を補給することが出来る。有料ではあるが。何はともあれ乾いていた喉も充分に潤せた。

「あゝあ、折角ナンパとか出来るって思ってたんだけど……」  
愚痴を零す明典。コイツの頭の中はナンパのことで一杯だ。

普段からよく女子に声を掛けてナンパしているが、それが成功した例は一度としてない。相手にされないか、ウザイだのキモイだの罵声を浴びせられるか、酷い時には鋭い平手打ちを貰い良い音を奏でる。



顔は決して悪い方ではない。ただ性格の方にやや問題がある。

女を見たら構わず声を掛けることは勿論、気弱な性格でもある……悪く言えば口先だけの男。そんな男に惹<sup>ヤッ</sup>かれる女子など恐らくはいない。

この性格が改善されない限り、今後明典がナンパをしても成功はしないだろう。

「大丈夫だつて。ここから少し遠いけど住宅街とか商店街があるんだ。商店街には最近出来たって言う大型のショッピングモールもあるって話だし、そこなら可愛い女の子とかも多いと思うよ。」

それに、四日目の夜には夏祭りもあるらしいんだ。ナンパするなら丁度いいだろ？」

「よし楽しい旅行にするで智、久國」

現金な性格である。今回も多分、いや確実にナンパは成功しないだろうと思いつつ大きな欠伸を零した。その隣では智が鞆を弄りお菓子を取り出し食べ出している。

「まあアレだ、今日は記念すべき初旅行。最初はこんな感じでも別にいいだろ。あ、俺にもアメくれよ」

「そうそう。やっぱり神社とか寺に行くのは面白いからね。はいメロン味とミカン味」

「そんな事一度も言つてねーよ。つーか、神社以外に考えることないのかよお前は……あつこのアメ美味いな」

智の頭の中には神社や寺のことしかない。

智こそ明典より顔も良く成績も優秀。女子から告白されていることは多い。だが、その告白全てを智は断っている。他に好きな女が居るわけでもなく、誰かと交際している訳でもなく、全て断っている。

男子間では智は実はゲイなんかじゃないか、という何とも不吉な噂が一時流れたがそれはないと断言出来る。

断る理由は至ってシンプル。神社や寺の事で頭が一杯な為に女子に対する興味が無いのだ。そして付き合うのならば、同じ趣味を持

っている人間がいいとも思っているに違いない。

……智の趣味に付き合っている友人と言えば、自分と明典ぐらいではないだろうか？

智が他の男子生徒と遊んでいる姿を、記憶に間違いがなければ一度も見た事がない。そう思うと、俺も明典もよく文句は零すものの断らず付き合っているものだ。

「さてと」

大の字に横たわらせている身体を起こし、襖へと向かう。

「何処に行くんや？」

「ちよいと散歩、旅館の中見てくる。それと、夕食までの軽い運動もしに」

旅行用バックとは別に持ってきた長い布袋を手に取り、そう答えて部屋を後にした。

廊下を歩き、旅館内を見て回る。

外観だけでなく、中もまた立派なもの。ゴミや汚れが一つもない清潔な空間。

旅館には欠かせない卓球も勿論設けられている。

明典ではないが、ここで働いている女性従業員は皆美人ばかり。

女将も年配の女性とは思えない程の美しい顔立ちをしている。

「それにしても、本当に立派な旅館だなあココ」

感心しながら久國は呟く。

高校生である自分がこんなにも立派な旅館に宿泊出来るとは夢のよう。これは家に帰って親にも友達にも自慢出来る。

後は温泉だけだが、それは夜のお楽しみだ。

外へと出る。冷房の効いた空間から外に出た途端、再び真夏の熱気が襲い掛かってきた。

それでも太陽が雲に隠れている分、来た時よりかは幾分マシになっている。

宿から十数メートル離れた場所、そこに開けた小さな空間がある。

この旅館へと来る途中偶然見つけた場所。

ここならば“日課”を行うには充分だ。手にしていた布袋の紐を解き、中身を取り出す。

一振りの木刀。家以外で練習する時専用として、長年愛用し続けてきた相棒でもあるソレを取り出すと静かに常の構えを取る。そして

「フッ！」

目先に描いた仮想の敵に向けて構えた木刀を唐竹に振るう。打ち落とした木刀は唸りを挙げて中空を走り風を切る。

一、二、三と心の中で唐竹に振るう度にカウントし素振りを行う。遙か昔、自分が生まれるよりもずっと前の代。時は戦国時代、ある無名の剣術道場の師範代であつたが戦場でその名を馳せた。

そして華御家の長男として、華御家を継ぐ者には幼少期より師範代より剣術の英才教育を受けることが決まりとなつている。

師範代ちちは現在華御家の長である父親 華御はなみ國正くにまさ。その師範代より幼い頃から剣術の修行をさせられ続けてきた。

平日学校から帰れば父親との修行、土日はひたすら模擬戦の繰り返し。そんな毎日をごしてきた。華御家を継ぐ者としての修行、それはもう厳しいだの大変だのというレベルのものじゃない。一歩間違えれば……死に繋がる、そんな内容だからだ。

中学校に進学し、部活は剣を振るう人間として剣道部を選んだ。そこで初めて見た、剣道部の訓練光景。それはあまりにも幼稚染みていて、自分が家でしている訓練とは全く違ったものだった。

華御家では訓練に用いるのは剣道部の竹刀や木刀ではなく刃が殺されてある模造刀だ。身体に実際の刀の重さを慣れさせる為にと言う意味合いで竹刀などは一切使用しない。そして模擬戦では真剣を用いて行われる。

刃を殺していない、振るい刃が身体に触れれば本当に斬れる。事実、模擬戦中に身体を斬られ大怪我をしたことは何度もある。

幼少期よりこの身体は傷だらけだ。水泳などで肌を露出させれば、

皆から必要以上に心配される。担任の教師などは華御家の事情を知っているから何も言わなかったが、それを知らない同級生達はやれ虐待だのドメスティック・バイオレンスだの言って過剰な心配をしてくれる。

それが嬉しかったと言えば嬉しかったし、放っておいてくれとも思った。

……ただ、人間というものは実に不思議な生き物だ、とつくづく実感する。

そんな死を隣り合わせにした修行をしていると言うのに、不思議とこの生活が嫌だとは思わなかった。寧ろ楽しんで取り組んでいたと思う。

父親曰く、華御家の血を引く証拠らしい。よくわからなかったが、つまりはこの現世に生まれ落ちた時から剣を握り振るう者として、この身は作られているようだ。

そして今でもこうして木刀を手に素振りをしている。今までやり続けてきた日課をしないとどうも落ち着かない。

素振りを黙々とこなして行く。そして二百本目の唐竹を振り終えた時、背後より人の気配を感じその手を止めた。

明典か智だろうか、と振り返る。そこには一人の少女が佇んでいた。

とても幼い少女。外観からして恐らくは小学校高学年、六年生ぐらい。そしてその小さな体格に合った巫女服を身に纏っている。

ハーフなのか、髪は綺麗な金の長髪に瞳は黒ではなく赤色。そして幼いながらにして可愛らしい顔立ちをしている。成長すればきっと美人な女性になるだろう。

そんな少女は竹の後ろに隠れるようにして、ただジッと此方を見つめている。

「……何だ？」

一步、少女の方に足を伸ばす。

「ッ！」

脅えた様子で更に身を隠そうとする。細い竹に隠れてはどう頑張っても全身を隠すことは不可能だが……それでも少女は隠れようとしていた。

知らない顔の男がいるから脅えているのか。確かに相手にしてみれば俺は余所者、そしてたった今訓練を行っているここは少女にとつての遊び場なのかもしれない。だとすれば警戒するのも可笑しい話ではない。

久國は木刀を竹刀袋へと片付けるとポケットの中を弄る。

先程智より貰ったアメ、ミカン味は後で食べようとポケットに入っていた。それを取り出すと、少女に向かって放り投げる。放り投げたアメは綺麗な弧を描き、そして吸い込まれるように少女の手の中へと収まる。

「それやるよ。お前も甘いのは好きだろ？ ああ、喉に詰めないようにだけ気を付けろ」

少女がアメをジッと見つめているのを見届け、踵を返しその場から離れる。

携帯で時間を確認する。午後五時前、そろそろ旅館の方へと戻った方がよさそうだ。夕食の時間もある。

もう一度振り返る。そこにはもう少女の姿はなかった。

翌朝                      時刻は午前八時過ぎ。

本日の天候は昨日と変わらずの晴れ。雲ひとつない快晴の青空、その青空の下を優雅に泳ぐ鳥達の姿が目映る。

朝方は昼間とは違って暑くなく、過ごしやすい環境だ。吹く風も心地良く、寧ろ少し肌寒いと感じるぐらい。その風を五体で感じながら、三人肩を並べ雑談を交わしながら自然道を歩く。

昨日の夕食と続き、大変美味だった朝食を食べ終えて直ぐに旅館を後にした。少しばかり休憩したかったのが本音、智の急かしに負

けて渋々出掛けることになった。

「ったく…… お前もうちよい他人のこと考えるよな」

「時は金なりって言うだろ？ ぼんやりやってたら日が暮れる」

「俺…… まだ眠いんやけど。あふ……」

そんな話を話し合いながら田んぼ道へと出る。朝早くから農作業をしている姿が目に入る。

昔からそうだがこう言った風景を見るのは嫌いじゃない、寧ろ好きだったりする。それはやはり、自分の身体の中に田舎の血が流れているからだろうか……。

そんな光景を目にやりつつ会話を交わしながら目的地へと向かう。智曰く、絶対に行っておきたい場所があるとかないとか。その場所がどういう場所なのか、詳細がわからずとも神社か寺と言うことだけは…… まず間違いない。

旅館から出て三十分弱。智の言っていた目的地に到着する。着いた場所は案の定。

林道を歩く事数分、大きな鳥居を潜る。左右に設けられた二体の稲荷像、その先…… 小さくも立派な神社がそこにあった。

満開に咲いた桜の花弁に囲まれた境内、真っ直ぐと続く石畳の引かれた参道。その先、境内の奥には小さな社殿。『奉納』の文字が半分薄れてしまっている、長年この社殿前で参拝者を迎え奉納される賽銭を溜め続けてきた事が一目で分かる程の古びた賽銭箱。

神社に着いた途端、智の目が変わる。そして持参してきたデジタルカメラを取り出し、早速カメラを撮り始めた。

そんな様子に呆れつつ、明典は鳥居に背中を預けるようにして座り携帯を弄り始める。この後商店街に赴くことを条件に付いてくるだけ付いてきた。今の明典の頭は早く商店街へ行つてナンパをしたい、ということ一杯の筈だ。

「…… おい明典。あそこに可愛い巫女さんがいるぞ」

「ちよつと行つてくるわ」

……本当に女好きなやつだ、と境内を掃き掃除している巫女にナンパをしに向かう明典の背中を見て久國は小さく溜息を吐く。

「さてと、俺は何しよかな……」

久國は辺りを見回す。

三日後に夏祭りがある為か、境内には提灯が幾つも飾られておりまた屋台の組み立て一式が置かれてもいる。

どちらから言えば三日後の夏祭が一番の楽しみだ。夏祭こそ普段にない雰囲気が一番楽しめるイベントであると個人的には思う。

それに祭というものは祭当日を楽しみだけが祭ではない。こうやって祭の準備が行われているのを見るのも、祭を楽しむ一つの方法だ。普段見飽きた景色に変化が現れるのを見ると、不思議と楽しい気分となる。それは恐らく他の人間にも当て嵌まることだろう。

以前この事について考えたことがある。別に深い理由はない、ただなんとなく、でだ。人間として生まれた性、祭という行事があるからだろうか。遙か昔、人類という存在が誕生したと同時に、神という存在によって遺伝子にプログラムされたものなのか。

……結論として、こんなものは深く考える必要はない。楽しめればそれでいいのだから。

どんな出店が立ち並ぶのか、そんな事を考えながら境内を歩いて回る。

ふと、智の方へ目を向ける。写真を撮っている筈の智、それが一人の老婆と話していた。

何を話しているのか、気になり智の元へと歩み寄る。

「そうなんですか、いいお話が聞けました」

「何の話してるんだ？ 智」

「あつ、久國。今ね、ここの神社にまつわる話を聞かせてもらってたんだ」

智から老婆へと視線を向ける。

この地元の住民だろう。齢七十過ぎの老婆はニコニコと優しい笑みを浮かべている。

「ふん。どんな話だ？」

「この天儀町には妖怪にまつわる話が多いんじゃないよ。例えば、この清光神社じゃったら」

智に代わり、老婆が答える。

その昔、今の天儀町には恐ろしい妖怪が住み着いていた。夜な夜な現れては美しい年頃の少女を攫い、そして喰らう人食いの妖怪。町の住民達は妖怪を退治しようと武器で身を固め、妖怪退治へと赴いた。

だが、所詮は人間。相手は強大な力を持った恐ろしい妖怪。勝てるはずもなく、妖怪退治へと赴いた者は全員喰われてしまった。

町の人間は絶望し途方に暮れていた。そんなある日、一人の侍がやってくる。妖怪の噂を聞きつけ腕試しのつもりで退治しにやって来たのだ。

時同じくして、町の刀鍛冶師の元に一匹の狐が訪れる。その狐は白く美しい毛並みを持ち九本の尾を宿していた。更には人語を話し、天狐であると刀鍛冶師に告げる。

狐が言うには妖怪退治に赴いた者の中に、かつて怪我を負い倒れていた所を助けてもらったことがある、その恩を返しに再びここを訪れたが妖怪に喰われてしまったと聞き、どうか仇を討つ為に協力して欲しいと狐は伝える。

そして狐は人間の姿に変わると刀鍛冶師と共に刀の製作に取り掛かる。そして僅か一日にして出来上がった太刀はそれはもう見事な太刀として出来上がった。

その太刀を狐は手に取り刀鍛冶師の元を飛び出すと、今度は侍の元へと向かった。

狐は手にしていた太刀を侍に渡すと、恩人の仇を討ってほしいと伝える。そのあまりの美しさに見惚れながらも、侍は狐より受け取った太刀を手に妖怪退治へと向かう。

妖怪が現れるのは夜、侍は町の入り口で静かに待つことにした。



日が暮れ、夜が訪れる。うとうとと眠気が襲い掛かってきた頃、どしんと地を強く踏みつける音が侍の意識を覚醒させた。近付いてくる足音、それが誰の物なのかは既に理解していた侍は腰に差していた太刀を鞘より払う。

月明かりによって照らされる妖怪の正体。それは侍の身の丈の三倍はある巨体を持ち双角を生やす怪物だった。侍はすぐさま怪物を刀で斬りつける。

狐火を以ってして打たれた刀には神通力が込められており、怪物の身体を容易く切り裂いた。無事怪物は侍の手によって討ち取られ、町に再び平和が戻った

「そして侍は再び武者修行へと旅立ち、狐は仇が取れたとわかると姿を消したのじゃ。その時用いられた太刀は“小狐丸”こぎつねまると名付けられ、ここ清光神社に奉納されておる」

「ふゝん。そんな重要文化財があるんだなあココ……。まあいいや、なかなか面白かったです、ばあさん。それじゃあ、そろそろ行くぞ智」

「そうだな。おばあさん、面白い話を有難う御座いました」  
智が丁寧に頭を下げて礼を述べた後、久國は明典の元へと向かう。未だにナンパをしている明典、されている巫女は戸惑いながらもそれに受け答えしていた。ただ、その表情は明らかに迷惑そうなのが手に取る様にわかる。

「いつまでやってんだ、次行くぞ」

「ちよつ、何すんねん久國！」

「すいません、俺達これで失礼します。それじゃあ」

首根っこを掴み明典を引き摺る。ジタバタと暴れるが気にしない、そのまま境内を引き摺って出口まで向かう。智は心底申し訳無さそうに巫女に対して頭を下げると、パタパタと追いかけてきた。

「ちよつとは自重しろこのバカ。あの子めっちゃ迷惑そうな顔してただろうが」

「そうそう。明典はもう少し相手の表情を読むことを学んだ方がいいよ」

清光神社を後にし、林道を歩いている際智と揃って明典にダメだしをする。

「う、うっさいわ！ お前等に言われんでも、それぐらい俺だつてわかつてるわ！」

どこがだよ……、と呆れた口調で言う久國。

智の計画にあつた清光神社の参拝は終わった。この後は商店街の方へと足を運ぶ予定で居る。そこで昼食も取る予定だ、ついでにオヤツやジュースの補充も。

鳥居を潜り、もう一度神社の方へと顔を向ける。小さな狐が視界を横切った……気がした。

午後四時過ぎ。

日の暑さも徐々に収まりつつあり、心地の良い風が吹き始める。夕食前今日もいつもの日課を行う。素振り五百本を目標に木刀を黙々と振るい続ける。

「……………」

五十本目の素振りを終えて、振り返る。

背後から感じる気配と向けられる視線。昨日と全く同じ物。今日もあの巫女服の少女が竹に隠れて此方を見つめていた。

今日は何の用か、お菓子が欲しくなったのか。そうこう考えていると、少女が竹から身を現しオズオズと此方へと近寄ってくる。

そしてそつと、両手を差し出した。白く綺麗な小さな両手には、狐の尻尾と小さな鈴が付いたストラップがあつた。

昨日のアメの礼、と言うことなのだろうか。

少女を見る。何処か不安げな表情を浮かべて此方の顔をジッと見つめていた。

「ありがとうな。このストラップ、有難く貰つとくぜ」

少女の手からストラップを手取る。不安の色を浮かべていた表

情は一変、嬉しそうにとても可愛らしい笑みを浮かべた。

「な、なんだ？」

此方に対する警戒心が解けたのか、グルグルと周囲を回り始める。ただ回るだけではなく、動物の様に身体の匂いを嗅いでいた。

突然の少女の行動に久國は焦りを見せる。

暫くして少女は匂いを嗅ぐのを止めた

かと思うと、今度

は服の裾を握り上目遣いを向けてきた。その顔は何かをせがんでいる様にも受け取れる。

「なんだ前、もしかしてまたお菓子が欲しいのか？」

少女に尋ねる。その問いに少女はコクコクと頷いた。

……これが大人ならば例えバレバレだとしても違うと否定したり遠慮をする素振りを見せるのだが、子供と言うのは本当に素直で正直である。そんな少女に自然と口元が緩んだ。

「ちよつと待ってる。すぐ戻ってくる」

少女に言い、旅館へと戻る。

数分後、商店街で買ったお菓子を手に再びあの場所へと戻る。少女は言われた通り、その場でちよこんと正座し待っていた。此方の姿が見えるや否や、素早く立ち上がり駆け寄ってくる。

「慌てるな。ホラ、一杯持ってきてやったぞ」

スーパールの袋の中からお菓子を取り出す。アメだけでなくスナック菓子やチョコレートと沢山の種類を持ってきた。勿論飲み物付きで。子供に炭酸飲料水は少し口に合わないだろうと、オレンジジュースにした。

……見知らぬ子供にお菓子やジュースをご馳走する。自分自身で言うのもアレだが、なんて心の優しい人間なんだろうと思う。普通の人間なら知らない子供が<sup>ガキ</sup>お菓子が欲しいとよってきても絶対に奢らないだろう。

一方沢山のお菓子を見ている少女の目はとても輝いていた。早く食べたいと、そんな心の声が伝わってくる程にお菓子を凝視している。

久國は苦笑いを浮かべつつ、手ごろな岩に腰を下ろすと隣に座るように少女を促す。ぱたぱたと駆け寄り隣へちょこんと座る。

二人揃ってお菓子を食べる。この後食べなくてはいけない夕食のことも考えて俺はイチゴ味のアメを。少女は次々とお菓子を食べていく。この後晩飯があるから控えろと声を掛けても少女の耳には届かず。ただただ夢中になってお菓子を口の中へと運んでいった。

普段お菓子と言う物を食べていない環境の中で育ったのか。いやそれは流石にないだろう、幾ら巫女であつたとしてもお菓子ぐらいは許される筈だ。知り合いの中に巫女をしている女子がいるが、普通に神社でも食べていた記憶がある。アレの場合が特殊なのかもしれないが……。

少女に尋ねてみようか、と考えたが止めた。家庭の事情をわざわざ聞く必要もないし何より相手に対し失礼な行為だ。夢中になってお菓子を食べているのなら、それでいいではないか。時折此方に顔を向けては嬉しそうに笑みを浮かべる。

お菓子で可愛い笑顔を向けてくれるのならそれでいい。

「それにしても……」

時間が掛かるアメを除き、その他持ってきたお菓子が僅か十数分で無くなってしまった。数人分はあつたであろうお菓子は今は少女の小さな身体の中へ。いったいこの小さな身体の何処にあれだけの量のお菓子が入るのか。

更に少女はもうなくなってしまったのか、と落胆している。

「お前さ、マジでよく食うな……」

「？」

お菓子の食べかすで口元を汚している少女は小首を傾げる。自分が大食いであるという自覚はあまりないらしい。将来ひょつとすると大食い女王としてテレビで活躍している姿を目にする日が来るのかもしれない。

全てを食べ終えた後、少女は最後のお菓子となったアメが沢山入った袋に手を伸ばす。

一袋三十個入り。オレンジ、メロン、イチゴの三種類の味が入っている。それを全部食べるつもりなのか。だとすればそろそろ止めに入った方がいい。

ただでさえ過剰な程摂取しているのだ。これ以上糖分の摂り過ぎは身体によくない。

「そろそろその辺でストップしておかないと、お前……太るぞ？」  
テラ

「ッ！」

この一言が少女の手を止めた。幾ら子供と言っても女性、体格のことを言われるとやはり気になるのだろう。

袋を今正に破ろうとしていた小さな手がワナワナと震えている。食べたい、けれどこれ以上食べたら太ってしまう……そんな葛藤を抱いている風に見えた。

「それやるから。家に持って帰って食べる。一日一〜二個ぐらいのペースにしておかないと、マジでおデブちゃんに  
イタッ  
！」

少女が頭をポカポカと叩いてくる。それ以上言っな、ということらしい。

久國は少女に謝ると腰を上げる。

そろそろ夕食の時間だ。早く戻らないと智と明典に自分の分まで食われてしまう。

もう一度少女の方へと顔を向ける。またな、と言いその場を後にする。

しようとした  
事によってその場で立ち止まる。  
が全く想像していなかった、予想外の出来

どしん、と何か重たい物を地面に落としたかのような音が遠くから聞こえてくる。何かの工事でもしているのか。しかしその音は同じ位置からの物ではなく、徐々に大きくなっていく。

こっちに近付いてきてる？

咄嗟に竹刀袋に入っていた木刀を取り出し構える。不安げな少女

をそつと自身に抱き寄せて、護るように。

大きくなつていく重い音。目の前の竹が圧し折れる音を鳴らしながら倒れていくのが目に映る。やがて謎の音と竹を圧し折る原因が目の前に姿を現した。

「な、何だ……コイツは!？」

久國は驚愕の表情を浮かべて声を挙げた。

身長は此方の身長を軽く超えている。自分の身長で約百七十四センチ前後、目の前の“ソレ”はその二倍以上はあろう。そして鍛え抜かれた筋肉によって固められた肉体。

身長がとも高くてガタイのいい筋肉マッチョマン、なんてものじゃない。相手は“人”ではない、目にしたことがない異形の者なのだ。

本来あるべき筈の人間としての頭部はない。代わりにあるのは牛の頭。

牛頭半人……ギリシャ神話ならばミノタウロス、日本で言えば牛頭。そのどちらかなんて俺にはわからない。ただ、相手が化け物であると言う事には変わらない。

化け物が猛獣の様な咆哮を挙げる。そして手にしていた身の丈と同等の大きさはあろう巨大な金棒を振り翳す。

咄嗟に少女を抱きかかえたまま左に飛び退く。僅かに遅れて先程まで立っていた場所に鉄の塊が叩きつけられた。轟音を上げ、地面にめり込む金棒。引き上げられた時、地面が数十センチも陥没していた。

まずい。最初<sup>はな</sup>からわかりきっていることだが一撃でも喰らえば即死は免れない。

久國は舌打ちを零し、怪物の姿を見据える。

ふと、清川神社であの老婆から聞いた話が脳裏に過ぎる。

町の住人を次々と襲い、狐の打った太刀を以って退治した侍の話。もしかしたら、この怪物はあの老婆が話していた伝承に出てくる怪物ではないだろうか。

その怪物がどのような容姿をしているのか、巨体で角を生やしていると言う以外具体的なものはなかった。だがこの天儀町は妖怪にまつわる伝承が多いとされている地。だから目の前の怪物がその妖怪だとしても納得がいく。

作り話ではなく、真実。ただ真実であるのなら大昔に斃された筈の妖怪がどうして再びこの現世に蘇ったのか。封印されていた訳でもないのに。

「って、グダグダ考えてる場合じゃねえな……」

様々な疑問が頭の中で飛び交う。それを一先ず片隅に追いやり、現状をどうするかだけに思考を働かせる。

相手は人間ではなく妖怪。手には身の丈程の金棒。対し此方は木刀一振り。明らかに身体面においても戦力面においても差があり過ぎる。木刀一振りでなんとかなる相手でもない。

贅沢を言えば真剣が、せめて模造刀の一振りでもあればまだ何とかなったかもしれない。斬れなくとしても、切先で突けば本当に突き刺さるからだ。

それに加えて、此方には少女おにもつがいる。少女は完全に脅えきった様子で震えていた。まあ無理もないだろう。

どうする、と自身に問い掛ける。この完全に不利な状態、どう乗り切ればいいか。

勝てぬ相手にわざわざ戦いを挑むようなことはしなくてもいい。こう言った場合は逃げてしまえばいいのだ。ただ……逃げると言っても何処に逃げればいい？

警察に助けて下さいとこうか？

いやダメだ。警察に行った所で解決できるような問題じゃない。警察官なら一応拳銃を携帯しているから何とか斃せるかも、と思っただが直ぐに無理だと理解する。相手は本物の妖怪、小狐丸と言う狐の力が宿った太刀であったからこそ斃せたと言われている。

昔とは違って強力な兵器があるからとしても、妖怪相手に効果があるとはあまり期待出来そうに無い。だから警察には行けない、行

つても無駄に終わるだけだと自身の中で結論付けた。

それ以外で安全な場所など……

「ッ！　しつかり捕まってる、手を離すんじゃねえぞッ！！」

木刀をベルトの間に差し、返答を待たず少女を抱える　　所

謂お姫様抱っこ。

その状態でその場から飛び出した。妖怪は間髪入れず地を踏み付けながら追い掛けてくる。

木刀では勝てない。獲物を前にしてそう易々と逃がしてくれない、現に追い掛けられている。それでも気にせず、少女を抱いたまま地を駆けた。

少女を抱えたまま全力疾走。

息が上がり、額からは大量の汗が流れる。背中も汗でびっしょりと濡れ、シャツが肌に張り付き気持ち悪い。だが今はそんな事を気にしている場合ではない。一刻も早く“あの場所”へ向かう必要があった。

背後からは一定のリズムで地鳴りを立てながら追いかけてくる妖怪。金棒を振り回し、関係のない民家や自然が次々と破壊されていく。そんな無残な姿となっていた物に対し可愛そうとか酷いとか思っている余裕など今の自分にはない。

ただただ、少女を抱えて走り続ける。“あの場所”へと向かうこと、それだけを考えると、

「着いた……！」

着いた事でほんの少しだけ心の中に余裕が生まれる。間髪居れずその中へと足を踏み入れる。

「おい！　誰かいらないのか！？」

人を求めて久國は大きな声を出す。それに応える声は帰ってこず、辺りは不気味な程にしんと静まり返っていた。舌打ちをし、近くに



あつた建物へと駆け寄ると戸を叩きながらもう一度、声を出す。先程よりも大きく。

「聞こえてないのか！？ 誰かいないのかって言うてるだろ！？」  
苛立ちもあり、口調が少し荒々しくなっていたが気にしている時ではない。今は非常事態なのだ。しかし、それでも応答は帰ってこない。

「クソッ……！」

その場所を諦め、他の建物へと移動する。そして先程と同様戸を叩き誰かいないのか、と大声を挙げる。反応がなかったら次の建物へ、そこでもなかったら次へ……。建物という建物を回り、からからに乾いた喉で大声を出す。

けれどもこの呼び掛けに応じてくれる者は誰一人として現れない。完全に無人と化したこの場所、いるのは自分と少女の二人のみ。

一体何がどうなっている、と八つ当たりをする様に灯籠を足蹴りする久國。

…… 思えば、逃げている時から違和感があつた。あの妖怪が咆哮を挙げ、地を荒々しく踏み付け、建物を破壊しているというのにも関わらず、周囲からの反応が全くない。

住宅街でない分民家はあまりない。だがこれだけ大騒ぎをしていれば嫌でも気になって外の様子を伺ったりするのが普通だ。

なのに辺りはこのことと同じでしんと静まり返っていた。まるで、そう……ゴーストタウンと化してしまったかのように。

妖怪の咆哮が聞こえてくる。距離からしてもうすぐ近くまで来ている。

誰かに助けを求めることは出来ない。結局自分自身で何とかするしかない。幸いここまで無事に辿り着く事が出来た。

大丈夫だ、なんとかなる。

そう自分に言い聞かせる。

「……お前は何処かに隠れてろ」

抱きかかえていた少女を地面へと下ろす。

未だに消えない不安げな表情。それを少しでも安心させる為に、久國は不敵な笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。俺が何とかして時間を稼ぐ、そして隙を見てお前はここから逃げ出せ……いいな？」

少女は首を横に振るう。嫌だと、離れたくないとズボンにしがみ付く。

それと同時に。あの咆哮が聞こえてくる。距離からしてそう遠くない、この神社にも後少しでやってくるだろう。

「お前がいたら返って邪魔になるだけだ！ 二人とも揃って死にたくないだろうが！ だからお前は早く行け！」

「ッ！」

久國の怒鳴り声に対し、少女の顔が強張る。

小さい子供に怒鳴りつけるのは少々気が引けたが、これはお互いを考えての事。

俺に護りながら闘える余裕がある人間ならばそうしてやりたい。だが相手は妖怪、こっちは何の特殊な力もない……剣術が使えるだけの人間だ。とてもじゃないが誰かを護りながら闘うなど、俺には出来ない。

目頭に涙を浮かべる少女。しかし理解してくれたのか、ズボンから静かに離れる。

もう一度、静かに行け、と少女に逃げるように促す。

数秒して少女は首を縦に振り、この場から立ち去る。

「さてと……」

心の中で少女に謝罪した後、本殿へと向かう。

ここ 清川神社へと逃げ込んだのには訳がある。

一つは神社と言う場所は智曰く聖なる力が宿る場所、つまり聖域らしい。聖域ならば魔を寄せ付けない何か神秘的な力が働いている。ここならばあの妖怪も侵入してこれないのではと考えた。

もう一つ。万が一この神社へと妖怪が入ってきた場合の対処法があるからだ。

あの妖怪が老婆の言っていた妖怪と同じ者ならば、それを斃せる方法がこの清川神社にはある。

小狐丸……大昔この町を救った物である業物。その太刀は今でもこの清川神社に納められていると言う。それさえあればあの妖怪を何とか出来る。

一度相手を斃したことがある代物だ。コレさえ手に入れば後はどうにでもなる。

問題はそれが何処に奉納されているのか。大抵、こう言った物は本殿か祠に祭られている筈だ。ゲームや漫画でもそう言ったシーンも幾つかある。

本殿へと着く。申し訳ないと思いつつも、階段を上がり本殿の扉を歩く。

ぎい、と音を立て開かれる扉。

その奥。狐の絵が描かれた掛け軸の前、刀掛台に三尺四寸程の一振りの太刀が飾られていた。

見つけた、と久國はその太刀に手を伸ばす。むんずと鞘を掴み、そしてすらりとその太刀を払う……筈だった。

「こいつ……全然抜けねえ！」

途中までしか抜けない。鯉口を切り、はばきと僅かに刃が出たところで止まった。

更に露出した刃の部分に目を落とすと、真っ赤に染まっている。

……狐が打ったと言うぐらいだから何か神秘的な力が今でも働いていると思っただのは、こっちの勝手な思い込みで。

実際はそうはいかず。長い年月を経て、かつては白銀に煌く美しい輝きを放っていた刀身は、今ではすっかり錆び付いてしまっている。これではとてもじゃないが刀としての機能は果たせそうにない。

「くっ……この、さっさと抜けやがれこの野郎！」

怒号し、力任せに……渾身の力を込めて小狐丸を鞘から抜き放つ。やっこの思いで引き抜くことが出来た小狐丸。

刀身は真っ赤に錆び付き、敵を斬るのに肝心な刃も刃こぼれが酷

い、これではまるで鋸だ。

こんなボロボロの刀では何の役にも立たないことは、確認しなくてもわかる。だが、今の俺にはこの太刀しか頼れるものがなかった。咆哮が響き渡る。振り返れば巨体を縮ませながら鳥居を潜り、妖怪は清川神社の境内へと足を踏み入れていた。

神社と言うのは魔を寄せ付けない神聖な場所ではなかったのか、と今頃暢気に夕食を食べているであろう智にツツコミを入れつつ、本殿より外へと出る。

もう後には引けない。こうなったらヤケクソだ、このボロボロの刀で……小狐丸でやれるとこまでやるしかない。

「お前に一つ、言うことがある……」

太刀を手に、ゆっくりと前へ進んでいく。

「俺はな、この世に三つだけ怖いものがある。何だと思う……？」  
妖怪が手にした金棒を構える。

「一つはお袋の説教。普段はニコニコして温厚なのに、一度怒ったらマジで怖い」

歩を進める足を速める。妖怪との距離が縮まっていく。

不謹慎ながら、この状況を楽しんでいる自分がいる。

「二つはブラコン体質の姉貴だ。考えられるか？ 近親相姦を滅茶苦茶望んでいるんだぜ？」

ある種、あれはヤンデレだな。まあそこがゾクツつてくると言うか……」

妖怪がドスドスと荒々しく足を地を踏み付けさせながら境内を駆ける。

相手が妖怪だからだとか、実在しないと思っていた存在<sup>もの</sup>だから怖いなどと言う、そんな下らない感情は持ち合わせていない。確かに、妖怪という実在しない存在<sup>もの</sup>がいたと言うことには少しだけ

驚いている。だが、それだけだ。

「最後に……これが一番重要なことだ。最後、三つ目はな

」

柄を握る手の力を強める。

俺がこの世で最も恐怖を抱いているもの。それは……、

「俺の親父が振るう剣だっ!!」

地を一気に駆ける。

縮まっていく妖怪との間合い。

チャンスは一度、後の先。相手が攻撃を繰り出し、それを避けたこの刹那が勝機。

相手の攻撃は強力だ。その威力は一度目にしている。

一撃でも喰らえば即死。防御は不可能、受け止めたところで防ぎ切れずに吹き飛ばされるか、或いはそのまま押し潰される。

加えてこの刀だ。金棒と相撲をした時どちらが勝つかと問われれば、間違いなく金棒だ。幼い子供ですらそう口にするだろう。

最初から相手に勝てるとは思っていない。だが、逃げ出す隙を作ることぐらいは出来る筈だ。

距離が縮まっていく。妖怪の右手に携えられた金棒が振り上げられる。

ここだっ！

右に大きく跳ぶ。伴い、振り翳された金棒が鋭く打ち落とされる。地面に到達するまでコンマ一秒、久國は地を強く蹴り一気に間合いへと入る。

どんっ、と轟音を立てて境内に打ち落とされた金棒。その間、跳躍した少年の繰り出す刺突は中空を切り進んでいた。

ボロボロの赤く錆びた刀身、その切先が向かう先は獲物を捉える内の片眼。目は非常に柔らかい部位だ。ちょっとしたことで失明し

たりするぐらい、脆い部分の一つ。ここならばこの錆び付いた斬れぬ刀でも簡単に潰すことが出来る。

久國は怒号にも似た叫び声を挙げながら、妖怪の目へと向けて腕を伸ばし小狐丸の切先を突き立てる。

「ああああああッ！！！」

ばきん、と金属が圧し折れる音が耳に響き渡る。この音の正体が何か、それについて考える必要はない。答えは簡単、刀身が圧し折れた音だ。

中ぐらいから刀身がない。その先はどこにいったのか、それは目の前にある。

赤い断面図を見せながら妖怪の片眼へと突き刺さっている……筈の折れた刀身は中空を舞っていた。

久國は驚愕の表情を浮かべ、呪うような眼差しを妖怪に向ける。こんな馬鹿なことがあるのか、と。

地面へと叩きつけた金棒が戻される。そしてそれを横薙ぎに払った。

咄嗟に、腰に差していた木刀を抜く。抜くと言っても攻撃する為ではない、紙程度しか期待は出来ないが相手の攻撃を少しでも緩和させる為だ。

鋭い衝撃が身体に奔る。景色が凄まじいスピードで流れていき歪んで視界に映し出される。それを頭で理解した時には、全身に固い物を叩きつけられる感触が伝わった。

何回も身体を打ちつけながら地面を転がっていく。

何度……俺は回転しただろう。五、六回は多分したと思う。そしてこれを奇蹟として捉えるか、それとも悲惨として捉えるか。妖怪の一撃を受けたのに、俺はまだ生きている。

「ぐっ……くうっ」

何とか腕に力を入れて立ち上がる。

我ながらよく生きているものだ、と心底思った。

全身打撲で身体中鈍痛が走るものの、腕も動くし足も動く。呼吸

も出来るし、少し擦り剥いた程度で出血も大したことはない。

「……………」

久國は妖怪を見据える。

自分はまだ生きている。それについては素直に喜ぼう。まだまだ死ぬつもりなどない。生きて、やりたい事は沢山あるのだ。

だが、この先どうすればいいのか……。

小狐丸も刀身が折れてしまい元から戦力がないのに更に戦力が低下してしまった。気休め程度だがまだ武器として役立てていた木刀も先程の一撃を防いだが為に押し折れてしまっている。

万事休す、とは正にこの事を言う。

……………最後まで諦めない、それが父に教えられた最初の事だった。何事に対しても途中で投げ出したり諦めたりするようなことは絶対にするな、最後の最後まで貫き通せ……と。

その教えと共に俺は今日と言う日まで生きてきた。だから……その教えを破ることはせず従う、最後まで諦めない。

例えこの妖怪に殺されることになったとしても、だ。最後の最後まで足掻き続けてやる。

妖怪がゆつくりと向かってくる。表情は先程と変わらず仏頂面。

だが、赤く輝く眼は嗤っていた。

「くっ……………」

折れた刀身の小狐丸と木刀を構える。刃が折れた剣、果たしてどこまで闘えるのか……。

その時、小さな乱入者が間に入ってきた。隠れて隙を見て逃げ出せと行かせたあの少女だ。少女は小さな身体を精一杯大きく見せようと、両腕を伸ばしている。その姿はまるで、俺のことを護っているかのよう……。

「バ、バカッ……………何で出てきたんだ。こいつはお前がどうこう出来る相手じゃない、さっさと逃げろ…………ッ!」

久國は叫ぶ。しかしその言葉に少女は従おうとしない。

妖怪が向かってくる。一步、また一步と距離を縮めてくる。

逃げろ、と何度も少女に向かって叫ぶ。しかし少女はその場から逃げようとはしない。俺の事を護ろうと、その場に留まっている。

妖怪の手にした金棒がゆっくりと振り翳される。

させない。

久國は痛む身体に鞭を打ち少女の前へと出る。

「お前の相手はこの俺だろうが……余所見してるんじゃないよッ  
！！」

折れた得物を両手に久國は地を駆ける。振り翳された金棒が鋭く打ち落とされた。

「なっ……！？」

予期せぬ出来事に久國はその場で立ち止まる。妖怪も打ち落とすとした金棒を途中で停止させている。

……今までに見たことがない、綺麗な青い焰。それが間を割って燃え上がっている。

この焰は何か、一体何処から燃え上がった、と疑問に思考を働かせる。

ふと、後ろを見る。巫女服を纏った少女、その少女の頭より獣の耳が生えていた。更には毛並みのいい尻尾まで。

そして自分が知る外観相応の幼さが、今では全く感じられない。

威厳と華麗さを兼ね備えた大人の女性としての表情を浮かべている。<sup>かお</sup>

「ッ！」

少女の全身から青い焰が燃え上がる。その焰は狐の形へと姿を変え、左手に携えている折れた木刀へと向かって飛んできた。

「狐火……」

木刀へと燃え移る青い狐火。するとどうか、青い狐火が収まっていくにつれて今度は木刀が形を変えていく。

樫という材質が、鋼鉄という材質に変わっていく。そして狐火が完全に消え去った時、木刀は立派な一振りの太刀へと生まれ変わっていた。

いったい何が起こっているのか、次々と起こる超常現象に思考



が追いつかない。

だが、何はともあれこれであの妖怪へと対抗する為の術を手に入れた。この狐火によって生まれ変わった木刀……太刀があれば、もう不安を抱くことはない。

「さてと……待たせたな妖怪。ここからが本番だ、覚悟しろ」

右手の折れた小狐丸を地面に投げ捨てると、久國は左手にした太刀を両手で持ち、上段の構えを取る。

先程までの余裕を見せた姿勢がどこにいったのか。この太刀を見た途端急に怖氣ついた様な素振りを見せ始める妖怪。

「……最後にもう一度だけ、言っておいてやる。俺が怖いと思ってるのはこの世で三つ。

お袋の説教、姉貴のブロン、そして親父の剣だ……ッ！」

構えた太刀を一気に、渾身の力を込めて振り下ろす。  
唐竹に振った太刀は一直線に、白銀の光を煌かせながら中空を奔る。

ざん、と刃が肉を断つ音が聞こえ感触が柄を通じて手に、全身に伝わる。鉄の臭いが鼻を突き、目の前で中心から分かれて地に崩れ落ちる一体の骸の姿を静かに見つめた。

どしん、と二つの巨体が地面に倒れる。切口からは生物の生命いのちとも言える血が絶えず外へと流れ出て行く。数秒して、赤黒い水溜りをそこに作った。

勝った、と頭の中で理解した時張り詰めていた緊張の糸が切れる。そのまま力なく地面へと座り込んだ。

「は、はは……なんか、物凄く疲れたな」

乾いた笑い声を漏らす久國。

本当に疲れた。ここまで疲れたことは生まれて初めてだ。父との模擬戦でもここまで疲れない。これが命を賭けた真の殺り取り、というものだろう。そして生まれて初めて体験した、モノを斬る……殺すという感触。

不思議と何も思わない。それは斃した相手が人間ではなく妖怪だ

ったからか、それは自分でもわからない。ただ、種族の違いがあれど生物を殺したという事は同じだ。それなのに何も感じない。

初めて殺すという感触を味わったというのに、何も……。

「……そうだ、アイツはッ！」

ふと、あの少女のことを思い出す。

あの妖怪を斃す切っ掛けを作ってくれた少女。もしあの時少女が現れなかったら俺は今頃挽肉にされていた。

首を振り返らせる。

少女はそこに立っている。何処か嬉しそうな笑みを浮かべて。そして頭からは獣耳を、後ろでは尻尾がゆらゆらと動いている。

この時点で気付くことはただ一つ。この少女は人間ではない。狐火を操ったことから、恐らくこの少女は狐。

「……なあ、お前って」

何者だ、そう問おうとした時意識が遠のいていく。ぼやける視界、全身から抜けていく力。薄れいく意識の中、最後に眼に映ったのは少女の申し訳なさそうな顔だった……。

「ここ……何処だ？」

気が付けば、俺は見知らぬ場所にいた。目の前には見慣れぬ天井、身体に押し掛かる感触は温かい掛け布団。どうやら俺は眠っていたらしい。ただ、いつ俺は眠っていたのか。

上半身を起こし、辺りを見回す。見慣れぬ家具や置物によって飾られたこの和室。少なくとも自分達が宿泊している旅館でないことは確か。

ならばここは一体何処か。身体を起こして、窓の方へと向かう。

窓の外から聞こえてくる活気溢れる人の声。  
開く。

「……………は？」

思わず我が目を疑った。

開いた窓。その先に待っていたのは見知らぬ世界。

満開に咲いた桜の木で彩られた美しい街並み。下を見れば、沢山の家が建ちその中大勢の人々が行き交っている光景が広がっている。ただ、その街並みは現代離れし過ぎていた。

天儀町が田舎であることは理解している。だが、幾ら田舎だと言ってもこの光景はあり得ない。これではまるで、時代劇に出てくる城下町のようなのだ。

自分は夢でも見ているのか、と古典的ではあるが試しに自分の頬を抓ってみる。

……痛い。痛みは普通に感じる、つまりこれは夢ではなく現実の出来事。

不意に、襖が開く音が聞こえる。

「おお。起きたようだね」

部屋へと入ってくる一人の男。

いかにも温厚そうな顔に、今時では珍しい着物を纏っている。ただ、その頭にはあの少女と同じ狐の耳と後ろでは九本の尻尾が揺れ動いている。

「えっと……どちらさんですか？」

「私の名前は風雅<sup>ふうが</sup>、君が命を賭けて護ろうとした娘の父親だ」

「娘って……アンタはあの少女の親父さん？」

「そうだ。おっと、来たようだね」

襖の方に視線を向ける男　　風雅。

遠くから廊下を走る音が聞こえてくる。やがてそれは大きくなっていき、此方に近付いてくることがわかった。

襖が勢いよく開くと伴い、何かが飛び出してきた。

身体に軽い衝撃が走る。視線を落とすとあの少女がそこにいた。身体に抱きつき、胸元に頬を摺り寄せている。

「えっと……とりあえず無事だったみたいだな」

少女の頭を撫でる。気持ち良さそうに目を細め、ふきゅうと気の

抜ける声を漏らす。

「で、色々と聞きたいんですけど……ここは一体何処なんですか？」

「そうだね。でもまずは食事にしないかい？ 君も空腹なんじゃないかな？」

風雅に指摘されて確かに、と久國は腹部をそつと押さえる。

夕食前の軽い運動のつもりが、あれだけ派手に動き回ったのだ。胃はいつも以上に空腹を訴えている。

指摘されてから情けない音が何度も腹部より鳴った。

そしてタイミングを見計らったかのように、女性が入ってくる。

手にはお膳、その上には見た目で食欲をそそる料理が並べられている。

「……頂いてもよろしいですか？」

「どうぞ」

いただきます、と一声。箸を取り早々に呼ばれることにした。

食事も済み、改めて風雅と向き合う形で腰を下ろす。

少女は父親である風雅の隣に腰を下ろしている。何故だろうか、食事の時から感じていたが此方を見る時気恥ずかしそうな表情を浮かべている。

「さて。まず我々の正体だが……もう言うまでもないね」

「狐……でしょ？ 正確に言えば妖狐ようこってところか」

いかにも、と風雅は頷く。

「ここは我等一族が住まう里。そして私はその里の長を務めている」

「それでこんな立派な建物に住んでいるって訳か。ん？ 妖狐って……あの話と何か関係があるんですか」

「そうだ。我々一族は遙か昔よりこの土地に住んでいた。人間達とは違う領域に、だけだね。そして君があの時闘ったのは、遙か昔私のご先祖様と一人の侍の手によって斃された妖怪だ」

やはり、と久國は呟く。同時にある疑問が脳裏に蘇った。

「一つ、尋ねてもいいですか？ あの話が実話だったことは分かりました。けれど、その時に斃されたんですよね？ なのにあの妖怪はどうして俺達の前に……以前にどうやって復活したんですか？」

「それについても説明しよう。アレは偽者……君が体験したことは全て幻さ」

「……は？ 幻？」

風雅の言葉に言葉を失う。

幻覚……つまりあの出来事は全てやらせ。文字通り狐に化かされた、ということだ。

ただいつ、俺は狐の術中に嵌っていたのか。全く覚えがない。

……いた。あの時俺を化かせることが出来る人物がたった一人だけいる。

「お前かよ」

少女を見る。

狐とは霊力を持つ存在として恐れられる対象。つまりあれが狐の霊力によって見せた幻覚だったとするのなら、あの場でそれが出来るのはただ一人。

風雅と言う妖狐の父を持つこの少女だけだ。

少女はと言うと大変申し訳なさそうな表情を浮かべてつつ、頭を下げた。

……怒る気はない。寧ろ感心しているぐらいだった。

最初から全て仕込み。その仕込みの中あそこまで完璧に演じきれるとは驚きだ。これならばプロとしても充分に通用する。

それよりも、どうしてそんな事をしたのか。それだけは絶対に知りたい。

「うむ。それなんだが……ね」

突然歯切れが悪くなる風雅。非常に申し上げにくいと言わんばかりに、眉を寄せている。対して少女は顔を俯かせると、チラチラと此方を見ってくる。

なんなんだ、と不安を抱く久國。

会話がなくなり、静寂の時が流れる。

「君の名前は……確か華御 久國、君だったね」  
静寂を切る風雅。

どうして俺の名前を、と言う質問は後回しにして久國素直に頷く。  
「……久國君。私の娘と……鈴姫と結婚してやってくれないか？」  
思考回路が停止する。風雅が何を言ったのか理解出来ない。  
啞然とした表情を浮かべたまま、久國は固まっていた。

「久國……君？」

風雅の声で我へと返った久國。次の瞬間、慌てた様子を見せながら大声を挙げた。

「なっ……け、結婚!？」

停止していた思考回路が働き始める。そしてようやく風雅の口にした言葉の意味を理解することが出来た。だからこそ俺は大いに驚いた。

この少女 鈴姫と結婚しろ、と風雅は俺に言ったのだ。  
訳が分からない。どうして俺がコイツと結婚をしなければならいいのか。その疑問を読み取ったのか、風雅は頬を掻きながら説明する。

「簡単に言えば、娘は君に一目惚れしてしまったんだよ。あの竹林で君を見た瞬間にね。

そして鈴姫は君との結婚を許して欲しいと、私に言ってきたのだよ。勿論私は反対した」

まあ当然だろう。父親が自分の娘を何処の馬の骨とも知れない輩の元に、加えて人間の元へと嫁がせるのを許す筈がない。

もし自分が風雅の立場であったとしても、きっと同じ気持ちになっ  
っているだろう。

だが、風雅はつい先程ハッキリと口にしていた。鈴姫と結婚して  
くれないか、と……。

「そして私は一つ試練<sup>テスト</sup>を出した。果たして鈴姫の夫として相応しいか否かを。仲間として迎えられる程の存在か否かを。そして君は

見事……合格した。

心優しいだけでなく、恐れない勇氣と最後まで諦めない姿勢、窮地にいながらも敵に向かっていく勇敢さ、そして敵を打ち倒す強さ……何をともしても申し分なかった」

「そ、そうですか……はは」

「と言う訳で、だ。君も今日から私達の立派な仲間だ。どうか娘を幸せにしてやってくれ」

「す、鈴姫すずひめです……ふつつか者ですか、よろしく願います久國様」

初めて聞いた鈴姫の声。

可愛らしい声をしている。こんな子が今日から俺の嫁になる。

「風雅さん、それに鈴姫……」

……だが、この場でハッキリと言っておかなくてはならない。

「俺は結婚しませんよ？」

「……へ？」

今度は向こうが間の抜けた声を出し、呆然とした表情を浮かべる。

「ど、どうして……？」

鈴姫の方が先に思考回路が働きを取り戻したようだ。ワナワナと震えながら、今にも泣きそうな顔を浮かべる。

遅れて風雅が我へと返る。鈴姫とは違い、冷静な態度を取っていた。

「どうして、鈴姫との結婚を拒否したのか……教えてくれないかな？」

「そんなの、決まってるでしょ。ただ単に今結婚する気がないからです」

詳しく言えば理由は二つある。

一つはこの若さで結婚するつもりがないから。法律的に言えば結婚出来る年齢は齡十八歳以上から。三月生まれである俺はまだ十六歳、この時点でまだ結婚出来る年齢ではない。

それに今結婚なんてしてしまったら自由が一切なくなる。何処で

聞いた言葉か、結婚とは人生の墓場を意味する。

俺はまだまだ遊んでいたい。高校を卒業したら大学に行ってサークルに入つてと……まだまだ遊んでいきたいのだ。それを結婚という拘束の鎖によって繋がれたくない。

そしてもう一つの理由は鈴姫自身にある。

妖狐だと言う風雅と鈴姫も、人間とは違い長い年月を生きる……或いは生きている存在だ。だからこそ精神年齢だけで言えば、きつと俺なんかよりもずっと年上だろう。

だが、精神年齢は兎も角として外観年齢はそれと全く見合っていない。

外観だけを見れば鈴姫は小学生、子供だ。そんな子供と結婚し街中を歩いたら運良くて仲の良い兄弟、悪くて変質者<sup>ロリコン</sup>として間違われる。

そうなった時、兎<sup>ポ</sup>法で捕まり近所や学友達からは後ろ指を指されながら生きていくハメになってしまふだろう。それだけは絶対に避けたい。

俺はロリコンじゃない、至ってノーマルだ

「とまあ、こんな感じです」

「なるほど……君の言うことも確かに一理あるな」

結婚しない理由に、風雅は納得した素振りを見せる。

一方、鈴姫は泣いていた。ポロボロと涙を零し肩を震わせている。泣かせてしまったことは本当に申し訳ないと思う。けれども譲れない部分は譲れない。

「悪いな鈴姫……つーわけで俺はお前と結婚出来ない。諦めてく

」

「……だつたら」

諦めてくれ、と言おうとする前に鈴姫が口を開き言葉を遮る。

「ん？」

「久國様が今通われている寺小屋を卒業し、齢十八を迎えれば……私を、鈴を恋人としてくれませんか？ 結婚は無理でも、恋人な



らばよろしいですよ？

その時までに貴方の隣に立つに相応しい女性になります！　ですから……どうか私と」

鈴姫の必死さに久國は戸惑いを見せる。

どうしてそこまでして俺を伴侶として選ぶのか。一目惚れした相手にどうしてそこまでして熱を入れられるのか、俺には理解出来ない。

「まあ、この話はとりあえず保留にしよう」

風雅の提案に一先ず賛成の意を唱えた。

それにそろそろ帰らないと不味い。あの時意識を失ってからどれぐらい時間が経過しているのか分からないが、早く帰らないと智も明典も心配する。

「俺、そろそろ帰ります。友人<sup>たち</sup>もきつと心配してると思いますから」

「そうだね。時間的に言えば、君が意識を失い倒れてから今に至るまで、また一時間程度しか経っていない。今すぐ帰れば夕食には間に合うだろう。外まで案内しよう」

「はい」

風雅と鈴姫の二人に案内され屋敷の外へと出る。

それまでの間にも随分と驚かされた。

あの旅館が安っぽく見えてしまっぐらい、風雅の屋敷は立派なものだった。

客室より一歩外に出れば長い廊下が続き、幾つもの部屋が設けられている。

外へと向かう度にすれ違う美しい女性達。そしてやはり少女や風雅と同じく狐耳と狐尻尾が生えていた。風雅曰く、この建物

屋敷に住み込みで働いている女中<sup>メイド</sup>らしい。

流石は里の長を務めている者だけはある、と感心してしまった。屋敷の外へと出る。

視界一杯に広がる里の光景。多くの人間……の姿をした妖狐達が行き交い、露店商を開いて商売をしている者や、楽しそうに雑談を交わしている者、元氣の良い声で遊び駆け回っている子供達の姿まで。

都会の街並みに負けないぐらいの活気があった。

周りを関心の声を漏らしながら、先頭を歩く風雅の後について歩く。

すれ違う度に妖狐達は頭を小さく下げて挨拶を交わす。その挨拶に風雅も返し、優しい口調で世間話をしたりとしていた。

風雅は里の住人達から厚い信頼を寄せられている人物であると言うことが理解出来る。

そして娘の鈴姫にも、何故か俺にも声を掛けられる。

どうやら風雅だけでなく他の妖狐達もあの出来事を見ていたらしく、勇敢な人間の若者として認めた俺を仲間として温かく迎えてくれていた。

複雑な気分ではあったが、嬉しいことには変わりなかった。

そんな中、沢山の妖狐達と雑談を交わしながら里の出入り口……人間の住まう世界へと繋がる入り口へと辿り着く。

大きな鳥居がずらりと一列に並んだ道。この奥深くまで続く鳥居の道を潜れば、あの世界へと帰られる。

「それじゃあ、お世話になりました」

「ああ、気を付け                    ああ、すっかり忘れていたよ」

何かを思い出したかのように風雅が口を開く。

「君にこれを渡すのを忘れていた」

気配も音もなく、突如一人の男が風雅の横に現れる。

男は手にしていた布で巻かれた長い物を風雅へと渡すと一礼し、再び姿を消す。

男より受け取った代物。それを此方へと手渡してくる。

「これは？」

「布を解いてみるといい」

一体これは何だ、と思いながらも言われた通りする。  
すると巻かれた布を解いていく。

女所に姿を見せていく中身。それは

「木刀？」

布に巻かれていたのは一振りの木刀だった。

赤檜で作られた木刀。見た感じ普段振るっている物と全く同じ。  
ただ、柄を握った瞬間言い様のない感覚に襲われる。

直ぐに理解出来た、これは普通の木刀じゃない。

木刀と言う木製である筈なのに、手に伝わる感覚は刀……真剣と同じ感覚。もう一つ付け加えるのなら、普通の刀でもないということ。

かつて、父の友人が家に遊びに来た時。その友人が所持していた刀を握らせてもらったことがある。そして握った瞬間、何とも言えない感覚が五体に伝わった。

真剣ならば父との模擬戦で使用している為握ったことはある。だがその友人が持つ刀を握った途端、口では言い表せない感覚が柄を握る手から全身へと駆け巡った。

ただわかつていることは、握っている刀が普通の刀ではないということ。その友人曰く、名のある刀らしい。

その時と全く同じ感覚が今、全身に伝わっている。それも真剣ではなく、木刀にだ。

これはどういう事かと風雅に尋ねる。

「久國君。それは姿は木刀の形をしているけれども実際は違う。

真剣……一振りの立派な太刀だ。鈴姫と私で打った、君を仲間として認めた証だよ。

もしこの先、君に剣を振るい闘わなければならない時が訪れた場合“拔刀”、と口にしてみるといい」

「これは……確かに凄い刀だ」

手に入れた木刀を見つめ、嬉しそうに口元を緩める久國。

いつか模擬戦で使っているような刀ではなく。自分だけの刀を手

にしたいと思っていた。それがこんな形で手に入るとは思ってもいなかった。

……妖狐が打った刀だから小狐丸と名付けられた。

だからこれも小狐丸になる。だが、それでは被ってしまう。

「……鈴國」

「えっ？」

「いやさ、これは鈴姫と風雅さんが打ったんだろ？ あの神社に奉納されてた刀　小狐丸は狐が打ったからそう名付けられたって教えられたんだ。」

だからこれも小狐丸ってことになる。けどそれじゃあ被るだろ？」だから名前を一字ずつ取って名付けた。

鈴姫の『鈴』と自分の名前である久國の『國』の文字を。

「小狐丸鈴國、これがコイツの名前だ」  
（これひねまるすづくに）

「なるほど、お互いの名前を一字ずつ取って名付けたと言うわけか。いい名前だと私は思うよ。将来結婚もする訳だし丁度いいんじゃないかい」

「いや、だから結婚は全然考えてませんから。つーかもう結婚するの決まってるのかよ」

そんなツツコミを入れながら、新たに得た太刀　小狐丸鈴國を手には鳥居へと足を踏み入れる。

「それじゃあ、俺はこれで」

「いつでも遊びに来てくれ。君はもう私達の仲間だからね」

「久國様！　必ず相応しい女となります。そして私と添い遂げてください！」

鈴姫の言葉に苦笑いを浮かべつつ、久國は鳥居の中を駆け抜ける。光が見えてくる。暖かな光は外の世界の物だと直感した。そして光を抜けた時、意識が急速に薄れていった……。

気が付いた時、あの場所へと一人佇んでいた。

あの鍛錬場として使っていた竹林の中。熱い風が吹き、さわさわ

と草木が擦れる音が耳に入ってくる。

どうやら無事帰ってこれたようだ。すぐにポケットに入れていた携帯電話を取り出し時間を確認する。

時刻は午後五時過ぎ。風雅の言った通りあれから一時間程度しか経っていない。

「あんまり腹は減ってないけど、晩飯を食べにいくか」  
荷物を纏めて旅館へと戻る。

……決してつい一時間程前の出来事は白昼夢などではない。その証拠として手には一振りの木刀　　小狐丸鈴國がある。

天儀町は妖怪にまつわる話が多いとされる田舎の町。明日もまた、鈴姫達とは違った妖怪とあったりするのだろうか。

そんな事を考えながら久國は駆け足で戻った。

## 第二章：爆裂！ 烏天狗娘

二日目の朝を迎える。

朝早くからうるさく鳴く蝉の声に叩き起こされ、大きな欠伸を零しながら着替える。

時刻は午前六時過ぎ。昨日は身体が疲れていた為にすぐに眠れた。着替えている最中、ふと隣を見る。布団の中で鼾いびきを掻いている明典と、息が止まっているのではと心配してしまうぐらい不動の智。二人とも気持ち良さそうに眠っている。

よくこれだけ蝉がうるさく鳴いているのに眠っていられるものだ、と熟睡している二人に感心しながら部屋を静かに出る。

手には一振りの木刀。鈴姫と風雅、妖狐の手によって打たれた太刀 小狐丸鈴國。靈力を以ってして打たれたこの一振りはただの木刀にあらず。

立派な一振り、それこそその辺の名刀に劣らない代物だ。流石は妖狐の打った刀だけある。

手にした木刀かたなを手に素振りをする久國。振るう度に木製の刃が鋭く風を切る。

「久國様ーッ！」

何処からか聞こえてきた可愛らしい少女の声。

振り返れば、鈴姫が此方へと向かって走ってきていた。

今日は巫女服ではなく、山吹色した花柄模様の着物。そして狐耳と狐尻尾も生えている。

両手には布に包まれた大きな正方形の形をした何か。

「鈴姫、どうしたんだこんな朝早くに」

「そ、その……朝ご飯作ってきました。よろしければ一緒にどうかと……」

どうやら手にしている布に包まれた物は朝食らしい。

丁度空腹も訴えていた頃だ。ただ二つ、大きな問題がある。

「いや、気持ちは有難いんだけど……この後普通に朝飯あるしなあ俺」

宿泊している旅館でも朝食が出る。

鈴姫が持ってきた朝食を食べてそれも食べてしまえばいい、と一応考えはした。だが布の形からして三重箱はある。そして一つの箱もかなりの大きさだ。どんな料理が入っているか分からないが、量はかなりあると見ていい。

そしてもう一つ、鈴姫が作った料理だからという不安。

精神年齢は大人、見た目は子供の鈴姫。偏見だが子供が作ったなんちゃって料理としか思えない。果たして美味しいのか、以前に腹痛など起こさず安心して食べられるもののかなど……色んな不安が脳裏に現れてくる。

だからと言ってこれを断るのも気が引けると言うもの。

俺に一目惚れし、良妻となると宣言していた鈴姫。結婚云々は一先ず置いておくとしても、俺の為にと作ってくれた物だ。それを一口もせずにして断るのもどうかと思う。

俺はどうするべきか、と悩みながら久國は鈴姫にちらりと視線を落とす。

目頭に涙を溜めて、潤んだ瞳で見上げている鈴姫の姿が映った。

「はあ……まあいいか。有難うな鈴姫、一緒に喰うか」

腹を括ろつ。不味かろうが後の朝食に響こうが、やはり女の子を泣かせるのはよくない。

「はい！」

嬉しそうに笑みを浮かべる鈴姫。そんな鈴姫に自然と口元を緩め久國。

昨日お菓子を一緒に食べた手ごろな岩へと二人並んで腰を下ろし、鈴姫が持ってきた朝食を広げた。

「おつ、普通に美味そうだな」

久國は少し驚いた顔を浮かべて感想を述べる。

重箱の蓋が外され、晒されたその中身には何とも食欲をそそる料

理が詰められていた。

煮物から焼き魚、天ぷらと完全な和食で統一された朝食。そしてかなりのボリュームがある。

ただ、主食である米はおにぎりではない。重箱一つにギツシリと詰め込まれた稲荷寿司。どうしてここで稲荷寿司をチョイスしたのかは、やはり鈴姫が妖狐だからだろう。昔から狐は油揚げが好きだと聞くが、それはただの伝承ではなく事実らしい。

本当にコイツが作ったのか、と少し疑いを持ちながら久國は鈴姫に視線を向ける。

「花嫁修業はちゃんとしてます！ 全部私が一人で作りました、女中の者には一切手伝ってもらってませんッ！」

視線の意味に気付いた鈴姫は少し怒りながら言う。どうやら本当に一人で作っただけらしい。

「悪い悪い、そんなに怒んなよ。でもまあ、さっそく食わせてもらうぜ」

見た目は合格、後は味だけだ。見た目は良くて肝心な味が悪ければ意味がない。

稲荷寿司に手を伸ばし、それを口へと運ぶ。

数回の咀嚼後、飲み込む。

「……普通に美味しいな、コレ」

子供の外観だからと侮っていた。見た目も良ければ味も良い、文句なしの合格。

今まで食べてきた稲荷寿司が偽者と思ってしまっぐらいの美味さだった。

「当然です。お料理は得意な方なんですよ？」  
胸を張って自慢げに話す鈴姫。

……これがナイスボディの綺麗な女性だったなら、俺は間違いなく求愛を受け入れていただろう。俺だって男だ、交際するのならやはりそれなりの女性像は求める。

子供に好かれるのも決して悪くはないが……。



「美味しいですか？ 久國様」

「ああ。つーかさ、その久國様って言うの止めてくれよ。なんか落ち着かねーわ」

「えっ、でも……」

「普通に呼べばいいって普通に。呼び捨てでも別にいいし、それが無理ならせめて“さん”にしてくれ」

前々から思っていた。鈴姫は俺の名前を呼ぶ時には必ず“様”を付けて呼ぶ。

俺はそこまで偉い人間ではないし、ましてや鈴姫から見れば齡十六しか生きていない小僧だ。にんげん

堅苦しいのは一番嫌いとしていること。ある程度の礼儀さえお互いにすればそれでいいと俺は思っている。それに今の時代、名前を呼ぶのに様を付けてるヤツなどそういないだろう。

鈴姫は少し戸惑いながらも、呟く様に言った。

「ひ、久國……さん」

「それでよろしい」

鈴姫の頭を撫で、副食へと箸を伸ばす。

旅館での朝食は完全に諦めた。明典か智がよろこんで俺の分まで食べてくれるだろう。

その代わりに鈴姫お手製の朝食を堪能することに専念した。

「ところ久國さ……ん。今日ご予約はありますか？」

「んあ？ まああると言えばある……よな、うん」

稲荷寿司を頬張りながら鈴姫の質問に答える久國。

今日もまた智の計画している神社が寺とかに行く予定となっている。詳しい場所までは知らない、本人曰く当日のお楽しみらしいが此方に見れば楽しくも何ともない。逆にもったいぶっている事が無性にムカついた。

「もし……その、よろしければ今日私達の里に来て下さいませんか？」

お父様が渡したい物があるとか。それに久國さ……んに里の中を

ゆっくりと案内したいですし」

「里か……」

鈴姫達妖狐の住まう里の中は帰る時に少しだけ目にしただけで、まだ完全に見回っていない。気になる店も沢山あったことだ、ゆっくりと見てみたい気もする。

それに風雅さんが渡したいという物のことも気になる。

「まあ時間を見て暇があればな」

「本当ですか!？」

「ああ、まあ暇が出来ればの話だけだな」

そんな会話を交わしながら朝食を摂っていく。

鈴姫との朝食を終えて久國は旅館へと戻る。

部屋に戻ると二人は朝食を食べていた。そしてそこには自分の分の朝食が用意されている。

しかし食欲は全く起きない。鈴姫のボリュームある朝食を食べたことで、食物を受け入れるだけの空き容量は残されていない。

昼間も作りにくる、と張り切っていた鈴姫には申し訳ないが丁重に断った。流石に昼間のあの朝食程のボリュームで作ってこられても食べ切れる自信はない。

「なんだ久國。お前さつきから全然食ってないじゃんか」

「今日は食欲があまりないんだよ。俺の分食っていいぜ」

「そんじゃ、俺が貰うわ」

嬉しそうに箸の伸ばしてくる明典。既に自分の分の朝食は食べ終えていた。

「で、今日は何処に行くんだ？」

明典に朝食の盛られた皿を渡しながら智に尋ねる。

「今日は“風練ふうれんの山”に行こうと思うんだ」

「山？ 神社とかじゃないのかよ」

意外そんな表情を浮かべて、久國は言う。

智が山に行くとはい出したのはかなり意外なことだった。智のとだから今日もまた神社か寺を行くと思っていたのに、その予想は見事に外れてしまった。

“風練の山”とはどのような場所なのか。森が付いている以上は森なのだろうが、智に詳細を求める。

「昨日清川神社で話していたおばあさんがいただろ？ そのおばあさんに色々聞いてたんだ。で、興味が出てきたのが“風練の山”」

「あのおばあさんか……。で、どんな場所なんだ？」

“風練の山”は昔から天狗の修行場として使われていた場所らしいんだ。全く風がない時に突如強い風が吹いた時は、それは磨き上げた技を見せ合う  
天狗達が試合をしているって意味らしいんだ」

そういうことが、と久國は納得した様に小さく頷く。

智の趣味は神社や寺などに訪れて見ることに。それ以外にもう一つ、若者らしくない趣味を持っていた。

非現実、非科学的な物が大好きであるということ。現実世界には存在しない架空の存在、即ち幻想の存在に強い関心を抱いているのだ。  
ファンタジー

以前智の家に遊びに行った時、驚かされたのは本棚を見せられたこと。参考書などは兎も角として、誰もが集めるであろう単行本が一冊もなく。代わりにぎっしりと隙間なく収められていたのは怪物や魔法に関する辞典や聖書、悪魔に関する資料までズラリと並べられていた。

「昨日は狐で今日は天狗かいなあ。んなモンおるわけないやん、強い風が吹いたって偶然起きただけの話やろ？」

味噌汁を啜りながら明典が言う。

確かに、とは言えなかった。鈴姫と言う妖狐をこの目で見ていたのだから。今日もその妖狐とついさっき朝食と一緒に摂っていたばかり。

妖狐がいるぐらいだ。天狗がいたとしても何の可笑しいことでもない。そして何故か嫌な予感がする。

昨日に続いてまた妖怪絡みの事に巻き込まれそうな気がしてならない。

……今度は天狗に逢うのだろうか。逢ったとしても別に驚かない。ただ逢うのなら逢うで綺麗な女性の方が個人的としては嬉しいし、何より強い望みだ。男の天狗に逢ったとしても嬉しくも何ともない。

「そうでもないらしいよ。あのおばあさん、子供の頃に友達と一緒に天狗を見たことがあるって言ってたし。羽が生えてたって言うてたから烏天狗かな」

「どうせ見間違えか何かやる？ この時代にファンタジーなモン信じるてどないやねん。なあ久國」

「……そうだな」

「あ、言い忘れてたけど……行くのは夜だからね」

お茶を啜り美味そうに息を吐いた智が口を開いた。

「何やねんそれ……今から行くとちゃうんかい」

「いやあ、何かそこ立ち入り禁止みたいなんだよ。何でも烏天狗って種族は自分達のテリトリーの中に入られるのを異常に嫌うらしいんだ。それで今よりずっと昔にその山に入った子供が侵入者と間違つて殺されて、それで二度と立ち入らないようにって事で立ち入り禁止にしたとか何とか……」

……今さらりと、とんでもない事を智は口にした。

ただの山に入るのと思つていれば、それは全くの大違いで。

地元の住人ですら山へ入る事を禁忌としている程の立ち入り禁止区域。そんな場所に智は足を踏み入れると言ひ出した。

「だから夜まで待つて、人の目が少なくなった時にコッソリと

」

「そ、そないな場所行けるかボケッ！」

明典が声を荒げて智に反論する。

明典は大の……いや、超が付くほどの臆病者なヤツだ。

今でも忘れられない。あの高校一年生の夏休み、クラスの提案で全員で肝試しをした夜のことを。

誰よりもビビり最後の最後まで行くのを渋り、クラス全員に臆病チキンっぷりを見せ付けた明典。結果途中まで誰かと一緒に行つたが、その相方ペアとなつていた級友がコッソリと抜け出し一人置き去りにされて、泣き喚きながら戻ってきたという最高に格好悪い伝説を作つた。その伝説があるからこそ、明典のナンパが全く成功しないと言つても過言ではない。

そして明典が非科学、非現実的な物を完全否定するのは、そういうこと。兎に角幽霊や怪物と言つた類に対し免疫が全くない明典が智に反論するのは当然のことでもあつた。

「なんだよ、天狗はいないんだろ？　だつたら別に行つても問題ないだろう」

「た、立ち入り禁止区域やぞ！？　わざわざ入るなつて予め警告されてるのに無視して入るヤツがどこにおんねん！　俺は絶対に行かへんからな！」

明典が叫ぶように言う。それを智は平然とした態度で返す。

何事か、と様子を身に來た女性従業員に何でもない返し、激しい言い争いへと発展しそうな二人の間に仲裁へと入る。

「やめとけお前等。宿泊客は俺達だけじゃないんだ、周りの事も考えろ」

「久國！　お前から何とか行つてやつてくれや！」

明典が助けを求めてくる。よく見ると泣く一歩手前な顔をしている。そんな明典に小さく溜息を零しつつ、智へと顔を向ける。

「……智、今回は俺も明典の意見に対し賛成だ」

自分の意見を口にする。明典は今にも泣きそうな程嬉しそうに笑みを浮かべていた。

……幽霊の存在は俺も信じていな“かった”。だが今回は違う。明典の言う通り。地元の住人ですら立ち入る事を禁忌としている場所に、わざわざ自らの命を捨てに行くような真似をする必要はな

い。

妖狐と言う存在が実在している以上、山へ立ち入ってはならない  
と言う禁忌<sup>ルール</sup>が出来る程の元凶である天狗が風練の山にはいるのだ。  
天狗と言えば日本では有名な妖怪の一つに入る妖怪。

もしその天狗と遭遇した時、何の力もない生身の人間が勝てる訳  
がない。

故に今回智の企画した計画は、ただの肝試しとして終わらせら  
れる内容じゃない。立派な自殺行為だ。

智はと言うと明典とは対照的に不機嫌そうな顔をしている。

智の悪い所はコレと思えばそれしか頭にないこと、何も考えず行  
動すること。

協調性に欠ける男だ、智は。自分勝手に我侭な所もたまにある。  
今までなら別に我慢して、笑って付き合っていたが今回は別だ。  
命に関わるような事に関わりたくない、関わって欲しくない。何  
でもケースバイケースが大切である。

「智、俺と明典は不参加で行く」

「なんだよ……久國まで。久國もまさか天狗が出るとか思ってる  
んじゃないよな？」

「天狗云々は関係ない。ただ、智の言う様に立ち入り禁止区域と  
している場所に、それを無視して行くことに俺は反対なだけだ。

それに昔から郷に入っては郷に従え、ってこと諺があるだろ？

俺達は今この天儀町にいる、この町にいる以上はその規則<sup>ルール</sup>に従うの  
が礼儀つてもんだろ？

それをお前は踏み躪ってまで行きたいのか？」

「そ、それは……」

「智、お前が架空の存在に対する興味が俺達よりも強いのは理解  
している。だけど守るべきことを守るのは人間として当然のこと。  
お前でも、それは理解しているよな？」

そこまで言うと言智は黙り込む。

暫くして、小さく溜息を吐き両手を挙げた。諦めた、と言いたげ

な態度だ。

「わかったよ、わかりましたよ！ 行くのは諦めます！ だけど山に入らない代わりに入り口前までには絶対に行くからな、それなら問題ないだろ！？」

「ああ。入らなければ問題ないし、入り口から山を見るぐらいならセーフだろ」

舌打ちを零し、入りたかったとブチブチと愚痴を零すが智を説得出来て良かった。明典も入らなくて済むと理解し安堵の表情を浮かべている。ただ、行くと言うことに対してはやはりあまり乗り気ではなかった。

そんな二人を見つつ、久國は疲れた顔をして大きな溜息を吐いた。

旅館から出て、清川神社とは全く正反対の方角へ進む。交通手段はやはり徒歩。

今日も空は雲一つない快晴、真夏の太陽がギラギラと輝いている。しかし幸いなことに、風練の森から商店街までの距離が短い。歩いてでも二十分弱程で着ける距離だ。風練の山の入り口を見た後は商店街へと行って涼みたい。

長い長い田んぼ道を歩く。そして四十分弱、目的の場所へと辿り着く。

「こ、これは何と言うか……」

「メツチャ引くわ……」

「……………」

着いた先、そこには普通ではない空気が漂っていた。

かなりの大きさの山。その山へと入る為の入り口には鳥居と注連縄によって封鎖 と言うよりも封印され、更にその注連縄本体にも札が何枚に貼り付けられている。

あれだけ山へ入りたかったと愚痴を零していた智も、風練の山に

着いた途端黙り込んでしまっている。流石に智も本能的にこの山は危険だと察知したのだろう。

山と言うからハイキングコースで使われるような山、と頭の中で想像していた　だが、これはそんな人に利用されるような山ではない。魔の巣窟、と言い表した方が似合っている。

如何にも何か出ます、と言った雰囲気を醸し出している風練の山。これは入らない方が身の為だ、と実感しつつ踵を返し三人揃って回れ右をする。

「おいお前達」

「のわああああ出たああああッ！！　妖怪天狗ジジヤー

ーーーーッ！！！」

振り返った先、一人の老人が居たことに大声を出して騒ぎ出す明典。半泣きになりながらこの場から逃げようとする。

「バカ明典ッ！　お前何てこと言うんだ！」

「よく見ろつて。普通の人間　おじいさんだよ！」

逃走を図ろうとする明典を智の二人で押さえつけ冷静になるよう促す。離せと泣き喚き暫く興奮状態だったが、目の前にいる老人を見て少しずつ落ち着きを取り戻していく。

そしてようやく自分の勘違いだと、失礼な事を口にしたと理解した明典は直ぐに頭を下げて謝罪の言葉を述べた。

「す、すみませんじいさん！　つい妖怪やって勘違いしてしまいました！」

「構わんよ。それよりもお前達、この山へ何か用でもあるのか？」

「入るつもりはありませんよ。何だか入っちゃいけない場所だつてことは予め聞いてましたから。ただどんな場所なのか見ておきたかったんです」

正直に智が風練の山へと訪れた理由を老人に述べる。

老人は特に疑う素振りも見せることなくそうか、と一言口にした。「お前達も絶対にこの山へ入ってはいかんぞ？　一度入れば最後、二度と戻ってこれないからのお」



「今でもやつぱり、この山には烏天狗や……妖怪が住んでいるんですかね」

「いや、それはないのお」

「へっ？」

老人の言葉に、智と明典の目が点になる。

「それはワシ等が生まれてくるずっと昔の話じゃ。確かにこの山は立ち入ってはならんようにこんなモンがあるが……ワシは子供の頃に一度入ったことがある」

「ええっ！？ 本当ですか！？」

智が老人の言葉に喰らい付く。

入らない事を条件としてこの場に訪れたことに不服の声を漏らしていたぐらいだ。老人の言葉を聞いて、入れるかもしれないと分かった途端異様なまでにテンションを上げてくる。

逆に明典の顔は少しずつ蒼ざめていく。もしかしたらこの山に入るのかもしれない、と不安を抱えていることが見え見えだ。

「ワシは妖怪などと言うモンは信じておらん、今でもそうじゃがの。そして山へと入ったワシと弟は天狗を探した。家から持ってきた木刀を手に大声で何処だ何処だと叫びながらの、じゃが……天狗はおるか住んでいた形跡もなかった。あつたのは、爆撃を受けたかの様な大きな跡だけじゃった」

「修行……或いは試合の跡ってことですかね？」

「恐らくの。じゃがもうこの山に天狗がおらんことは間違いない。もし興味があるのなら入ってみるとええ、誰も止めやせんよ。中に入っても何にも面白い物はないがお」

かっかっか、と笑いながら老人は静かに立ち去って行った。

残された俺達は互いの顔を見合わせる。

智の目は行く前とは打って変わって生き生きと輝いた目をしている。明典は踵を返しこの場から離れようとしていた、それを智は首根っこを掴み引き止める。

「は、離せや智！ 俺は絶対に行かへんぞ！」

「……なあ久國」

「この山に入ろうって言うんだろ？　好きにしるよ」

「よし決定、じゃあ早速入ろう！」

明典を引き摺りながら山の中へと入る智。明典は離せと叫ぶが、その叫びも虚しく……助けの手を差し出す者はおらず。そのままズルズルと山の中へと引き摺られていった。

その様子に溜息を零し、二人の後に少し遅れて続く。

……気のせいかな、誰かが此方を見ているような気がした。

太陽の光が殆ど差し込まない鬱蒼とした森の中。まだ午前中だと言うのに夜の様に薄暗い。朝でこれだ、夜になればそれこそこの場所とは深淵の闇と化すだろう。

鼻歌を歌いながらどんどん奥へと進んでいく智。その智の腕に脅えている女子の様に明典は腕にくっ付きながら歩いている。かなり腰が引けている様子だ。

確かに、ここは怖いと感じさせる場所だ。それは天狗がいる、いるかもしれない云々の問題ではなく。ただ単に暗いからだ。

人気もないし光も殆ど届かない。こんな場所に変質者に連れ込まれたらそれこそ絶望的だろう。

ひょっとしたらこの山は天狗が住んでいた山ではなく、部落や盗賊などと言った野蛮な一味が住んでいたのかもしれない。それを子供達に山へと近付かないようにわざと妖怪　天狗がいるなどと言って大人達が言い聞かせていた、とも考えられる。

こんな薄暗く住み心地の悪そうな場所に天狗が住んでいたとも考えにくい。もし俺が天狗だとしたら、こんな陰気な場所に住みたくない。

……あくまでこれは可能性。鈴姫と言う存在がいる以上は、妖怪という線も完全に捨て切れない。

獣道を三人で歩く。

コンクリートで歩きやすいように作られていないのは勿論、木の

枝や蔦が剥き出しになっている為歩きにくい道。足元に気を付けて歩かなければ転んでしまいそうだった。

そんな智の足取りは非常に軽い。

なんなくこの獣道をどんどん進んでいく。ただ、途中から明典が腕にくっ付いているのに鬱陶しくなったのか振り払う。それに慌て駆け寄り、転びそうになりながら必死に智の後についていく。

「  
」

どくん、と鼓動が跳ね上がる。

何者かの視線を感じた。しかも現在進行形で此方を見ている。

いったい何処から、と久國は辺りを見回す。

山へと入る前に視線を感じたのがそれは気のせいと思っていた。

しかし……どうやらそれは気のせいではないらしい。

周りを見回すが不審な人間は見当たらない。ただ木々が生い茂り鬱蒼としているだけ。それでも視線は感じる。智と明典はそれに気付かないのか、気付いた素振りを見せることなく先へと進んでいく。一体誰が、何の為に。自問自答するが、答えは出てこない。そんな此方の気など気にもせず視線を向けている何者か。

風練の山へ入る前に感じた視線の数は一つ。しかし今は違つ、増えているのだ。

後ろから感じると思えば、左右からも視線を感じる。正確な数は把握出来ないが、相手は数人いると言うことだけは理解出来る。

一体誰だ、と叫びたい気持ちグツと抑える。

下手に相手を刺激しないように、自分はただの一般人だと思わせるために。あえて気付かないフリを取る。

何者かの視線を受けながらも智と明典の後に続いて先を急ぐ。

暫くして開けた場所へと出た。そこは唯一、太陽の日の光を受けている場所。

山へと入る前老人より聞いていた話では、天狗はおらず爆撃を受

けたかの様な大きなクレーターが残されていただけだと、そう言っていた。

だが、今日の前にあるのはそのクレーターではない。

民家があった。それも一軒二軒どころではない、何十軒と言う民家がそこにある。更にその民家には明かりが灯っている、窓からは米を焚く匂いまで漂ってくる。

あの老人の言っていることは全てデタラメだった。何故あの老人は俺達に嘘を教えたのか、それはわからない。わからないが、これだけはわかる。

俺達三人は罫に嵌められた獲物であるということ。

あれだけ上機嫌で鼻歌を歌っていた智もこの光景を見た瞬間、一瞬にして強張る。明典は泣く一歩手前だった。

もう一度三人で顔を見合わせる。言葉はいらない、お互いに頭の中で考えていることは一つだけ。今すぐこの場から逃げるということだけだ。

踵を返し、一気に来た道に戻る  
刹那、一陣の強い風が吹いた。

風はすぐに収まる。ふと、視界の隅に何かが映った。それは地面へと落ちる。

視線を落とす。地面の上にあったのは綺麗な漆黒の鳥の羽。

「鳥の……羽？」

「あ……ああ……」

力なく地面に座り込み、脅えきった様子で上空を指差す明典。その先を目で追う。

地上へと舞い落ちてくる黒い羽。その先、八人の人間が宙に浮かんでいた。

すう、と地面へと降りてくる人間達。逆行でよくわからなかったが、全員女性だった。

一人を除き皆山伏のような資格好をしていた。手には錫杖、腰に佩かれた一振りの太刀。そして背中には身の丈と同等の大きさはあ

るだろう漆黒の双翼。それが折り畳まれたと伴い、何もなかったように消失する。

相手は普通の人間ではない、この風練の山に住むという烏天狗。ただ一人、他の烏天狗とは違いその格好は変わっていた。

いったい何十年前のファッションだとツツコミを入れたくなるくらい。暴走族やヤンキーが纏うあの服装、特攻服だ。

白い布地、腹だしで胸はブラジャーや服ではなくサラシがグルグルと巻かれている。背中にも夜露死苦などと言った刺繍が施されているに違いない。

ただ顔は悪くない、寧ろ可愛いに入る部類だった。

そう自分と歳が変わらない少女が特攻服を着てコスプレをしている、と思えば思える。

ただ、背中にある漆黒の双翼がなければ……の話だったが。

「か、烏天狗……ッ！」

智が叫ぶ。その反応を喜ぶように、烏天狗達はにやりと口元を緩める。

明典は気付かない内に失神していた。そんな姿を見て男の癖に情けない、と烏天狗達が口になっている。正にその通りだと烏天狗達に心の中で同感した。

薄ピンク色という、非常に珍しい髪色をしたサイドテールの髪を風に靡かせながら烏天狗の少女は口を開く。

「お前ら、ここはオレ達烏天狗が住んでる山だぜ？ 勝手に入ってきたってことは……侵入者と見て間違いねえよなあ？」

言い終えて、腰に佩いていた一振りの太刀の柄に手を掛ける。

「ま、待ってください！ 俺達は別に侵入者とかじゃないですよ、山に入る前におじいさんが何も無いから入っても大丈夫だって言われて……それで！」

「やめろ智」

弁明しようとする智の言葉を遮る様に口を挟んだ久國。

理由がどうであれ、入ってはいけないというルールを犯しこの山

へと足を踏み入れたことは事実。下手に弁明しようとすればするだけ返って怪しまれる。

智も初めて目にした妖怪と言う存在に驚愕、興奮、そして殺されるかもしれないという恐怖と焦りが混じり半分パニック状態に陥っている。

そんな状態でまともな弁明が出来るとも思えないし、失敗する確立が高い。

「俺達はこの天儀町に来た旅行者だ、だからこの町のことは何一つ知らなかった。」

すぐに出て行く、それで問題はない筈だろ」

「いいや、大有りだぜ。知らなかったにせよ、お前らはこの山に足を踏み入れたんだ、その時点でお前らは立派な侵入者だ。このままお前らを拘束するのがルールなんだけどよ……オレもそこまで非情な性格はしてねえ」

「……条件は？」

「はっ？」

此方の質問に、烏天狗の少女は少し驚いた表情を浮かべる。

「だから、条件は何だつて聞いたんだ。タダで見逃すつもりなんて最初からないだろ？」

何事もタダでは通らない、何かしらの対価を要求してくる筈だ。等価交換の法則、それは人間だけでなく何処の社会においても通じる。

それに如何にも何か企んでいそうな顔を浮かべていれば、タダで見逃してもらえないと直ぐに理解出来る。

「……お前面白いな。名前は？」

「相手の名前を聞く時は、まずは自分から名乗るのが礼儀ってヤツじゃねえのか？」

「はっはっは！ お前本当に人間の癖に面白いなあ。ますます気に入ったぜ。」

オレは楓、みかぜ 美風 かえで 楓だ」

実に愉快そうに、特攻服の烏天狗の少女

美風 楓は名乗

る。そして今度はこっちも名乗り返す。

「……久國。華御 久國だ。コイツは」

「いや、弱つちい野郎なんかオレは興味はねえ。それにしても  
……お前なんか変わった名前だなあ。まるで刀みたいだぜ」

「ああ、それは間違っっちゃいない。昔からよく言われる」  
華御家には代々伝わる仕来りがある。

それは生まれてくる子供、長男の名前には必ず『國』の一文字を  
入れること、と言うのが華御家の仕来りだ。父の名前も『國』正

國と言う文字が入っている。

何故『國』と言う文字が付けられるのか、それは今でも詳しくは  
知らない。父が幼少期の頃に祖父より聞いた話によれば、天下を統  
べる程の強さを持つ者になるように、と言う意味合いで國の文字が  
付けられるらしい。

それが真実か偽りかは俺もよくわからない。祖父に尋ねようにも、  
数年前に癌でこの世から去っている。

尤も、歴史書まで漁って調べようと言う気は起きない。俺にとっ  
てはどうでもいいことだからだ。

従って、長男として生まれてきた俺の名前には『國』と言う文字  
が勝手に付けられた。

『國』と言う文字に対して別に不満を抱いている訳ではない。寧  
ろ珍しいしカッコイイとも思える字だ。だが、どうして『久』と言  
う文字が入っているのか。

それは完全に父親の趣味が影響している。

父は昔から刀を集めるのが趣味だった。

今はもう母に経済面的に止めると注意され購入はしていないが、  
趣味に没頭していた頃は本当にもう酷かった。

そんな父は俺が生まれ名前を何にするか、と母と話し合った時。  
既に決めていたらしい。

まず華御家の仕来りに従い『國』の一文字は絶対に入る。そして

もう一文字は『久』と言う文字を入れた。

久國……名前の由来は父の昔からの心友でもあり、刀鍛冶師でもある久重ひさしげの久から取ったそうだ。つまり久國の『久』は刀のメーカ―から来ていると言うこと。

これが俺                    華御   久國である。

自分の子供の名前に趣味で名付けるとは信じられない。『國』の一文字は仕方ないとしても、もっと良い名前があった筈だ。そしてどうして、母はこの時父に対し反対の言葉を掛けなかったのか理解出来ないでいる。

今後先、いずれ誰かと結婚し子供を生んだとして。自分の子供に名を付ける時は、『國』の一文字を付けるがその子の事をちゃんと考えて名前を付けよう、と誓っている。

「それで、条件は？」

「ああ、そうだったな。条件は一つ、オレと闘って勝つことだ」  
腰の太刀をすらりと鞘より払う。

……やはり、と言うべきか。予想通りの展開になった。

この烏天狗の少女、外観を見た瞬間にどんな性格の持ち主か大方想像出来ていた。

想像通りとても好戦的な性格である。

いや、命の殺り取りの様な闘いではなくただ純粋な喧嘩を楽しみたい。そんな風に見受けられる。

「ちょ、ちよつと待ってくださいよ！ そんなの無理に」

「いいから、お前は黙っている智」

智が言おうとしていた通り、この喧嘩に最初から此方に勝算などない。相手は武器を持っているし妖怪だ。基本スペックは断然あっちの方が上。

こっちは普通の人間が三人、内一人は気絶している為に戦力としてカウントされない。もう一人は文科系の人間だから同じく戦力としてカウントされない。

唯一闘える人間と言えば、俺しかない。しかしそんな俺も基本



は人間だ、それに鈴姫より貰った太刀、『小狐丸鈴國』は今手元がない。旅館に置いてきてしまっている。

無手の状態で烏天狗に勝つことなどまず不可能。

だから、まずは『体』ではなく『口』で。即ち口論で相手を負かし此方が有利となる様に布石を作る。

「……烏天狗って妖怪を、どうやら俺は高く評価し過ぎていたらしい」

「何？」

「烏天狗って妖怪は修練に励み互いの技に磨きをかける、プライドが高くて高貴な存在だと俺は思っていた。だが実際は弱い者虐めしか出来ない低級の妖怪だったらしいな」

「あんだとコラアツ！」

「人間の癖にナメンじゃねーぞ！」

他の烏天狗達が喚き出す。

リーダーがこれなら部下もまた似たような者。可愛らしい顔をしていると言うのに、その荒々しい口調だけは頂けない。

やはり女性と言うのは御淑やかな性格がいい。それこそ今ここには居ない鈴姫を見習えと言いたくなる。

「……どう意味だ？」

「言葉通りの意味、だけど？」

こっちは普通の人間、そっちは烏天狗。基本スペックですらこっちは圧倒的不利だつて言うのに武器までそっちは所持している。お前達は武器も持っていない弱い人間に対して剣を向けている、これが弱い者虐めと捉えて何かおかしいところはあるか？」

「わ、わーったよ！ 刀を持たなかったらいいんだろ！」

太刀を鞘へと収め、それを部下へと預けると両腕を開いて武器を所持していないとアピールする楓。

かかった。だがまだ相手側が有利である事には変わりない。

「……武器を持たないぐらいで、こっちが不利な状況なのは変わらないけどな。」

さつきも言ったとおり、お前達烏天狗は人間と違って身体作りが違う。

人間よりも強靱な身体能力を持ち、人間にはない超能力を持っている。幾ら武器を持っていなかったとしても勝てる見込みなんか全然ないし……」

「じ、術も使わねえ！ 空も飛ばない！ これでいいだろ！？」  
半分泣きそうな顔で美風 楓は言う。

そろそろ頃合か……。ゆつくりと、相手に殺意や敵意を感じさせないように。ただゆつくりと間合いを詰めていく。

「……そもそも、こっちは最初から闘う気なんかなかった。それなのにお前はそれを無視して俺達に勝負を挑んできた、そっちが有利と鳴る絶望的な勝負をだ。

こう言っても、お前は聞かないんだろけどな。じゃあさっさと俺を殴るなりして殺したらどうだ？ そしてお仲間に自慢すればいい、無抵抗な侵入者を問答無用でオレはやつつけましたってな」

少し、また少しと距離を詰めていく。

美風 楓は身構えるが攻めてくる様子はない。

……戦闘ではそう頭を使わなくてもいいだろうが、いざ頭を使う  
『武』ではなく『知』による戦いとなった場合、こう言った手の相手は極端に弱くなる。

美風 楓ほどわかりやすいヤツはそういない。手合わせをしなくてもどういったスタイルなのかも予想できる。

彼女の戦闘態勢は猪突猛進

バトルスタイル

ひたすら前へと突き進み敵を

斃すことだけを考えて動く、策略を練りながら闘うスタイルとは対極のスタイルだ。

「本当の強者なら、無抵抗な弱者に戦いを挑んだりはずししない。無意味に命を奪ったりするようなこともしないだろう。お前だけがそうなのか……それとも他の烏天狗も同じなのか。いずれにせよ、烏天狗は弱い者虐めが好きな妖怪だっということが今理解出来た」

もう俺一人が喋っている状態。

美風 楓が言い返してくる様子は見られない。拳を強く握り震わせて、悔しさを現すように唇を更に強く噛んでいる。目頭には涙を浮かべ、今にも泣き出してしまいそう。

……まるでこっちが弱い者虐めをしているようだ。今の美風 楓はいじめっ子にやられて言い返せずにいる子供と同じ。

その間にもゆっくりと歩く。縮まっていく間合い、俺も美風 楓も攻めない。

美風 楓はその場に佇み、俺はただただ近付いていく。

そしてお互い間合いへと入る。美風 楓は間合いに入っても攻撃してこない、ただ悔しさを孕ませた涙で潤んでいる目を向けている。そんな美風 楓の頭に静かに手刀を下ろした。こっん、と手に頭を叩く感触が伝わる。

「はい、俺の勝ちだ」

「……………へ？」

美風 楓は豆鉄砲を食らった様な表情を浮かべて、間の抜けた声を出した。

部下の烏天狗達も同様、明典も同じく啞然とした表情を浮かべていた。

「何って…… お前に勝ったら出させてくれるんだろ？」

ならお前が挑んだこの勝負、俺の勝ちだ。だから山から出させてもらっぜ」

「なっ……………なっ……………ふざけるな！！ 何だよそれ！ そんなの認めるわけねえだろッ！」

本当に予想通りに事を運んでくれる。

相手がこう言ってくるのも想定の範囲内、後一押しだ。

「随分と面白いことを言うんだなお前。いいか？ 俺は“お前達とは戦わない”とは一言も言っていない。だからお前がこの山から出る条件を提示した時既に勝負は始まっていたんだよ。

ああ、お前のことだ。合図もしてないのに勝負をする輩がいるのか何とか言いそうだから先に言っておく。まずこれはスポーツの

様な公式な試合じゃない、お互いの命を賭けた死合って言った方が正しいな。それに俺がお前の頭に落としたのが手刀じゃなくて、それこそ本当の刀とかだったらどうしていた？

お前の頭は今頃真つ二つだ、それだけじゃなくても身体をブッスリと刺されていたかもしれない。俺が間合いを詰めていく中、お前はいつだって反撃出来た。だがそれをせずにお前はジツとその場に佇んでいるだけだった。だからお前が攻撃してこない隙を狙って攻撃をしてそれを当てた。だから俺の勝ちだって言っただよ

「うつ……うつ……っ！」

「出直して来い。どう言われようが俺の勝ちで、お前の“負け”だ。美風 楓」

「う、うわああああああんっ！！」

負けの部分を強調するように言葉を放つ。

美風 楓は大声で泣きながら民家のある方へと凄いスピードで走り去っていった。

流星は妖怪、オリンピック選手も真つ青な身体能力を持っている。そして男勝りな性格をしていたが、泣きながら走り去っていくその姿は歳相応の少女の姿だった。

どんなに男の様に振舞っても根は少女だ、と……そんな事をふと思う。

その美風 楓の後姿を呆然と見つめ続けて数秒後、我へと返った部下達はリーダーと叫びながらその後を追って走り去っていく。

何だ何だ、と民家から次々と烏天狗達が顔を外へ覗かせ始めている。

「さっさと行くぞ智！」

「へっ……あ、ああ……」

障害は立ち去った、今しか山を出るチャンスがない。

まだ少し呆けている智と、気絶している明典を左右より担ぎながら急いで山を降りる。

美風 楓達が居なくなっただとしても、ここは烏天狗達が住まう山

の中。未だ危険な状況下の中にいることには変わらない。

歩きにくい獣道を再び走る。

途中で何度も転びそうになり、その度に未だに気絶してしまっている友人に罵声を浴びせていた。

商店街の方へと来る。

ドが付く程の田舎の中で唯一まだ都会染みている場所。それも出来たばかりの大型ショッピングモールがあるからだ。

三階飲食店コーナーで昼食を済ませて、これからどうしようかと話し合う。

先程の緊張が消えていないのか、智と明典の二人は食事は一切取らず。水だけを口に含んでいる。

「……まさか本当に妖怪がいるなんて」

「だから言ったやんか！？ 俺は絶対に行かへんぞって、それやのにお前は！」

「もう止めるよ明典、何事もなくてよかっただろうが。それに、一番最初に気絶していたヤツが偉そうにそう言うな。いずれにせよ三人とも五体満足で生きている、危ない場所には絶対に近付くなんてことも身を以って学ぶことが出来た。この話はもうこれでお終いいいな？」

そう言う智も明典も黙り込む。

智も智なりに反省している。今後妖怪関連の場所に行ったとしても、それ以外の場所であっても深くまで関与はしないだろう。

「……本当にゴメン、二人とも。正直久國がいなかったら、本当に俺達は生きてなかったかもしれない。本当に……ありがとうな、久國」

「ホンマ、久國さまさまやで。やっぱ家が武術家やと俺らと違って肝が据わっとるなあ」

「武術云々は関係ないだろ……。まあ済んだことを引っ張り出してもどうにもならないからな。それで、この後はどうするんだ？」

麵汁にたつぷりと浸した冷えた蕎麦を嚙りながら久國は尋ねる。

目的地である天狗が住まう場所      風練の山は行った。次に

行きたい場所があるのかと智に尋ねるも、どうやら風練の山のことで頭が一杯だったらしく、それ以外の事は何も考えていなかったそう。

明日は明日で行く場所がある。その予定を繰り下げて今日行けば、次に行く場所がなくなってしまう、と智は口にする。

ではどうするか、となった時明典が口を開く。

「……折角やしさ、海行かへんか？」

「海か……そう言えば、全然海に行くってこと計画の中に入れてなかったなあ。一応持ってきたことは持ってきてたけど」

「いやいやいや！ 夏言ったら海やん！ そんなもん常識やる普通！？」

なるほど、明典の言うことも一理ある。

夏と言えば海、海水浴を楽しむのも一つだ。明典の場合はそこでナンパをするつもりだろう。けれどこの暑い中海に入って涼むのも一興であることには違いない。

海で泳ぐことを考えていなかった為に水着は持ってきていない。だがここは大型ショッピングモールだ、水着も置いてあるし直ぐに買うことが出来る。

智も海に行くことに対し特に反対する様子はなく、暫く考えて海に行ってみようと口にした。次も目的地は決まった。

「じゃあ今から行ってみるか。一旦旅館に戻ろう」

「賛成」。よっしゃ、可愛い子がいたら即効でナンパしたる！」

「悪い、先に戻っててくれ。俺水着持ってきてないんだ」

「そうなのか。わかった、じゃあ現地集合にしよう。久國は水着買ったならそのまま来てくれればいいよ。何かあったら直ぐに携帯で連絡すること、わかった？」

「はいはい。そんじゃ、一旦解散」

智と明典が旅館へと戻っていくのを見送り、早速水着を売っているコーナーまで足を向ける。

「久國さん！」

聞きなれた声が何処からか聞こえる。

振り返れば、そこにはいつもの巫女服ではなく白のワンピースを着て麦藁帽子を被った鈴姫の姿があった。

私服姿を見るのは初めてだ。こうやって見ると本当に外観相応の若い少女にしか見えない。

「鈴姫か。どうした？」

「あ、あの……そろそろどうかなって思ってたんですけど」

……ああ、そう言えば鈴姫との約束を忘れていた。

朝方に交わした約束。鈴姫の父親である風雅が俺に渡したい物があるから来て欲しい、と言うことと鈴姫に里を案内してもらうことをすっかり忘れていた。

これから海へと行く予定だが、旅館から海に行くまで距離は結構長い。準備をしてからだと一時間ぐらいいは掛かるだろう。

「いいぜ。でもその前に、水着を買っていくから」

「はい！」

嬉しそうな笑みを浮かべて頷く鈴姫を連れて、水着コーナーへと向かう。

途中世間話をしていた中年の女性達が此方を見て、仲の良い兄弟と口にしていた。

やはりそう第三者からはそう見られていると実感する中、鈴姫は兄弟として見られたことに不満げに可愛らしく頬を膨らませていた。

「やあ、よく来てくれたね久國君」

「どうも」

ショッピングモールでの買い物を終えた後、早速里へと赴き風雅の元へと足を運ぶ。

人生初、ワンピースと言うものを体感した。ショッピングモールより清川神社まで僅か五秒、それをもってみせたのは妖狐である鈴姫。曰く、妖狐の持つ神通力による業らしい。

「それで、何の用ですか？　鈴姫の話だと渡したい物があるとか何とか……」

「ああ、実は君に渡したい物があるんだよ」

そう言っただけで控えていた女中に視線を送る風雅。頷き、大きな白い箱を手にとってくる。

すっ、とそれが目の前に置かれる。風雅に視線を向けると開けてみるがいい、と促される。

何が入っているのか、風雅のその言葉に従い蓋を開ける。

「これって……」

中身を取り出しながら久國は口を開く。

箱に収められていたのは着物だった。

朱を主体とした布地、白の陣羽織には焔を思わせる青い模様の刺繍が施されている。

「これは？」

「我が里の一員として君に送る品だよ。流石にその格好は、ここでは大きく目立つからね」

なるほど、と風雅の言葉に久國は納得したように頷いた。

ここ風雅達が住まう里の住人は皆着物を着ている。そんな中私服を、現代の服を纏っているのは俺だけだ。ジーパンに白のワイシャツ、風雅の言う通りここでは少々目立つ格好。

稽古着ならば父との訓練で何度も着ているが、着物と言う物は一度も着たことがない。しかし郷に入っては郷に従えと言う。この後鈴姫に里を案内してもらわないといけない予定もある。

ならせめてこの里にいる間だけでも着た方がよさそうだ。

「有難う御座います。この着物、有難く貰いますね」  
うむ、と頷く風雅。

鈴姫は期待に満ちた目を向けながら腕を引っ張ってくる。



「久國さん、早くそれを着て行きましょう。次は私が里の中を案内します！」

「はいはい、わかったから引つ張るなって」

「はい！ えへへ久國さんとお出掛け、これって確か“でー”って言うんですよね？」

「まあ、そうなるのか……？」

急かす鈴姫を制し、早速風雅より貰った着物を纏うことにした。

「きゅ、急に服を脱がないで下さい！」

……子供に見られたところで何とも思わない。

鈴姫両手で顔を隠すがそれは形だけ、指の隙間からしっかりと覗いている。そんな光景に風雅は愉快そうに笑っていた。

鈴姫と里のメインストリートを歩く。

昨日来た時と変わらず、今日も活気で溢れている。

……改めて訪れて、じっくりと見る事で新たなことが分かった。

里の住人は皆妖狐だ。その中に混じって、他の種族の姿も見られる。外観が人間と全く瓜二つの者もいれば、完全に人間の形をしていない者まで様々。

他の妖怪を目にしたのは、烏天狗以外初めてだ。そんな他種族の妖怪達は出店を商品をジツと手に取って見たり、物々交換を提案している者や楽しそうに世間話をしている者と、活気で里は溢れ返っていた。

「……妖狐以外にも、この里を利用している妖怪っていたんだな」

「はい。昔みたいに人を襲う妖怪は殆どいません、そんな事をしたら退魔機関に標的にされて退治されちゃいますからね。だからこうやって人間達みたいに暮らしてるんです、時代の流れてヤツだってお父様は言っていました」

「人間だけじゃなくて、妖怪も今はこう言った社会じゃないと暮らしていけないのか。なんか大変だなあ」

妖怪が人間たちと同じ様に暮らしていると言う事実には驚きだが、

これはこれでいいかもしれない。非現実、非科学的な物一切信じない人間がこの光景を見たら何と言っやら。

露店に出されている商品に、ふと目を向ける。

刀から甲冑、書物や美しい布など。色んな物が店頭に並べられている。

鈴姫曰く、それぞれ妖怪には最も得意としている分野があり、それを他の妖怪達と交換したり、人間の姿に扮し人間相手に売ったりとして生計を立てているそうだ。

鬼ならば酒を作ること得意とし、烏天狗は靈藥を作ること得意とし、そして妖狐は工芸品や衣類を作ること得意としているらしい。

妖怪達が姿を変えて人間社会の中に溶け込んでいる、と言う話には驚いた。人間と思って付き合っていた相手が実は妖怪だという可能性もある、と言う事なのだから。

「久國さん、他に何処に行きたい場所がありますか？」

「んー、そうだな。小腹が減ったし、甘いモンも喰いたい気分だから茶店的な」

不意に、ポケットから電子音が鳴り響く。

メールを受信したことを知らせる合図。メロディポケットに入れていた携帯電話を取り出す。

折り畳まれている状態から開く、ディスプレイには新着メールを受信したと表示されている。差出人は言うまでもない、智からだ。

ボタンを操作し、送信されてきたメールの本文を開く。

そこには、『助けて』と……その一言だけが書かれていた。

「……ッ……！」

いったいどういうことだ、と久國は悩む。

助けて、と俺に助けを求める内容の文章。ただの悪戯……とは考えにくい。あの智が冗談で人を心配させるような事をする奴ではないことは知っている。

ならば、このメールの文章は真実なのか。だとしたら智達はいっ

たいてうしてしまったのか……。

続けて着信メロデイが鳴る、智からだ。

「もしもし!？」

電話に出る。そこから聞こえてくる筈の智の声は聞こえない、代わりに

「デ、デンワってこう使うんだよな……」

「お前は……!」

「よお華御 久國。お前のダチのケイタイデンワってヤツをちよいと借りさせてもらってるぜ」

「美風 楓……ッ!」

電話越しに耳に入ってきたのは、風練の山で喧嘩を売ってきた特攻服の烏天狗の少女、美風 楓の声。

どうしてお前が、と尋ねるよりも早く美風 楓は言葉を先に放つ。

「お前のダチ共はオレ達が預かってる。返して欲しかったらまたあの山に來い、逃げたりするんじゃないぞ」

「お、おい待て!」

電話が切られる。もう美風 楓の声は聞こえてこない。

「クソッ……! あの野郎!」

智と明典が攫われた。理由は本人に確認するまでもない、あの試合のリベンジだろう。

わざわざ山を出て誘拐する程、美風 楓は望んでいるのだ……俺との真剣勝負を。嘘や口での騙し合いをするドロドロとした内容のものではなく、命と命を賭けてお互いの全力をぶつけ合う勝負を。あれで諦めた、烏天狗が自分達の住まいである山から出てくることはない……。完全に考えが甘かった。

「久國さん……」

「……鈴姫、悪いが今日のデートはここまでだ。ちょっと野暮用が出来た、すぐに戻らないと。この埋め合わせは必ずする、だから俺を外へと出してくれ」

「わ、わかりました! では直ぐに結界を解く準備をします……」

って、どうしてお姫様抱っこするんですか!？」

「悪いな、急ぎなんだ。我慢してくれ」

「い、いえ……その、寧ろ嬉しいです……えへへ」

久國は鈴姫を抱きかかえると、里の出口へと向かって走り出す。

智と明典が人質として捕われている以上、助けに行くのが当然だ。あんな奴等でも俺の大切な友人<sup>ダチ</sup>であることに変わりはない。だから俺が助ける、助けないといけない。

「全く、何でこんなことになるんだよ……」

智は疲れ切った表情を浮かべながら部屋の窓より外を眺めていた。午後より三人で海に行くことを提案したまではよかった。だが旅館の近くまで来た途端抵抗する間もなく拘束され、拉致された。

今いる部屋も拉致をした集団のアジトの何処か。拘束こそされないものの扉は勿論、窓にも厳重に施錠されている状態。座敷牢に監禁されるなど、生まれてこの方初めての経験だった。

隣で未だに気絶している友人に目を向ける。本当にすぐに気絶できるヤツは羨ましい、気楽でいいものだとか立ちが込み上がった来る。

智は外で見張っている、拉致をした集団に視線を向ける。

背中に身の丈程の立派な黒の双翼を生やし、山伏の様な格好をした男達。

風練の山に住まい修練に励んでいるという妖怪 烏天狗。

その烏天狗達にいきなり拘束されてこんな場所へと閉じ込められていたのだ。

「すまないな、お前達」

見張りの一人が、申し訳なさそうに智に謝ってきた。

「これも全てはお嬢様のご命令。事が済めばお前達を必ず無事に送り届ける、だから今はそこで大人しくしておいてくれ」

「……どういことですか？」

相手を刺激しないように、智は怒りを抑えつつ烏天狗に尋ねる。その問いに対し、座敷牢へとやってきた別の烏天狗が口を開く。智の表情が強張る、抑えてきた怒りが抑止力を打ち破り爆発の如く込み上がって来る。

何故なら、それは風練の山の入り口で出会い山へと入っても大丈夫だと、嘘を言ったあの老人だったからだ。

「お前達の友人が居たであろう、名は確か華御 久國じゃったかのう。お嬢様は……その華御 久國を欲しておるじゃよ」

「えっ！？ いったいどういう事なんだ、説明しろ！」

「……すぐにわかる。そして事が終わった時、華御 久國は我等烏天狗の一員となっておるじやろう。それまで暫し、そこで大人しくしておいてくれ」

そう言い残すと老人は立ち去っていく。

声を荒げ、説明を追及するも老人はそれに応える様子もなく、静かに立ち去って行った。

「クソッ……！」

握り締めた拳を地面に叩きつける。

どうしてこうなった、と智はただただ思った。

あの老人達の話によると、久國は風練の山に向かってきている。

何故？ そんなものは決まっている、自分達を助けにくる為だ。

友達と言う物を大事にする久國が決して見捨てするような真似はしないということとは、友達と言う関係を築いた時から既に智は理解していた。

華御 久國と言う少年は智の知る中でかなりの変わり者であった。家は戦国時代に名を馳せたと云う元無名の武士の家系で、家には剣術道場もあるぐらいの豪邸に住んでいる。豪邸に住んでいるからと言っても、その辺の少年と対して変わらない。

家の事を出して自慢したり威張ったりするような人間ではない。

そんな性格だからと知ったからか、気付けばよく喋るようになり友人と言う関係を築いていた。

ただ一つ変わっているのは、普通の人間よりも掛け離れた位置に立つ人間だということ。

かつて智が久國の家に遊びに行った時だ。その時は用事があるから、と午後一時より遊ぶ約束を交わしていた。自宅で昼食を済ませてから家へと向かう。

約束の時間よりも早く来すぎてしまった智は敷地内を探検することにした。広々とした敷地内。時代劇で見たことのある倉や広い庭を見ては関心の声を零していた。

そんな時、一つの建物に目が行く。体育館よりも少し小さなサイズの建物。そこから聞こえてくる金槌で金属を何度も叩くような音に智の興味心は引かれた。

ゆつくりと近付き窓からその中を覗く。そこにあったのは一人の少年と一人の男の姿。少年は友達である久國、男はその父親なのだと智は理解した。

そしてそこで目にした物は今までに見たことがない異様な光景。各々自分のサイズにあった稽古着を身に纏い、一振りの刀を手にして激しく斬り合っている光景だった。

剣道、と言うものは中学生の頃より目にしたことがある。

防具を纏い竹刀を持って敵を斃すスポーツ。だが智が目にしてるのはスポーツと言う枠内に当て嵌まる内容ではなく。それこそ正しく死合、命を賭けた殺し合いだったのだ。お互いの振るう刀が何度も何度も中空を奔り大きな金属音を道場内に響き渡らせて、激しく火花を散らす。

しかし相手は大人、人生経験も豊富であれば体力や実力もまた子供より上。

中空に奔った一閃が久國の身体を捉える。袖がパツクリと裂かれ、その下にある白い肌からは生命の源たる血が流れ出ていた。

……生まれて初めて目にした、本当の真剣勝負。勝てば生き残り、

負ければ死ぬ。斬れば相手の肉体は斬れ、斬られれば其の身は斬られる。

そんな光景に、智は、臆す所か逆に二人の真剣勝負に見入っていた。目が離せない勝負、それはある種訪れる者の目を止まらせ心を魅了する芸術作品のようにですらあった。

それから数日後、ちよつとした事件が智の身に起きる。

街を歩いているときいきなり強面の男数人に絡まれる。所謂不良と言うヤツ、そして絡んできた目的も金銭目的。何もしていないのに何かと因縁を付け、金を出さないと暴行を加えると脅してくる。

周りは誰も助けようとはしない。

当然だろう、とまるで他人事のように思っていたのを今でも忘れない。

仮に逆の立場だったとして。自らの身体を張ってまでその者を助けることが出来るだろうか？

否 無理だ。リスクが高すぎる上にメリットが一切ない。巻き込まれて痛い思いをするのは嫌だと、そう考えるのが普通であり、それが人間というものだ。だが、華御 久國という人間は違った。

男達に歩み寄ると問答無用で殴り飛ばし、たった一人で全員を返り討ちに合わせたのだ。剣術家でありながら剣を一切使わず。拳一つ、超人的な身体能力を見せ付けて、男達を黙らせてしまった。

そして去り際に放った一言は、今でも一言一句間違えることなく憶えている。

俺のダチに手を出せば、それ相応の報復があると思え

それから華御 久國とは良い友人関係として築いている。

外が騒がしくなる。見張りをしていた烏天狗達も見張りを放棄し外へと向かう。

「久國……死ぬなよ」

助けに來たであろう友人の姿を智は脳裏に思い浮かべる。

どうか無事でいてくれ、ただそれだけを座敷牢の中より祈りながら……。

不意に、ワツと烏天狗達の歓声が上がる。

窓から見える向こう側の景色。円形状に設けられた椅子に腰を下ろす、百を軽く超えた数多の烏天狗達。その視線の先にあるのは建物物の中央、これから始まるであろう試合を行う舞台。その舞台に立つ一人の烏天狗の少女と、赤衣着物と白の陣羽織を羽織った一人の少年の姿が、智の目に映った。

風練の山の奥。

数人の烏天狗に囲まれながら進む。

「これは……」

山の中心、下を見下ろせばそれはあつた。

目の前に広がる異質な光景。日本という和風の世界には似つかない建造物。

簡潔に説明せよと言われれば、ローマの円形闘技場コロッセオを思わせる。

円形に設けられた建物。その中心には剣闘士グラティエーターが剣を振るい激闘を繰り広げるリングが設けられている。

恐らく、あの円形闘技場が智が言っていた天狗達が試合をする場所なのだろう。

その中心、今回の騒動の主犯でありこの後一戦交えるであろう相手　美風　楓が仁王立ちしている姿が見えた。

烏天狗に促されるまま、コロッセオへと向かって下り道を歩く。近付くにつれて聞こえてくるけたたましい歓声。円形闘技場の観客席部を埋め尽くす程の烏天狗の姿。千人ぐらいいるだろうか、よくこれだけの人数この山一つだけで住めているものだと、何故か



感心してしまう。

試合はまだかと興奮状態にある烏天狗達の声を聞きながら、そのままリングへと向かう。

……腰に差した木刀の柄に、静かに右手を添える。

もう後戻りは出来ない、今度は朝の様に相手も口車には乗ってくれない。

もう残された選択肢は一つのみ、勝つ……これだけだ。

リングへと上がる。闘う以前より上がっていた歓声に火が点き勢いが更に増す。

鼓膜が破れんばかりの大音量。それを耳にしながら、美風を見据える。

「逃げずによく来たな」

「……いったい何の真似だ、って質問は無粋だな」

「そうだ。あんな勝負、オレは絶対に認めない。今度はちゃんと得物も持ってきたみたいだな……それに着替えてくるなんて、随分と気合が入ってるみたいじゃねえか」

「……着替える暇が惜しかったんだよ。それよりも、智と明典は無事なんだろうな？」

腰に差していた木刀を抜き、その切先を向ける。

美風は愉快そうに口元を緩めると、腰に佩いた太刀に手を伸ばしゆつくりと鞘より払う。

改めて目にしたその太刀は普通の太刀とは一風変わったデザインをしていた。

一番特徴的なのはその切先にある。通常刀とは片刃 鎗造

が主流だ。だか美風が持つその太刀の切先は両刃として作られている。

鋒両刃造 （やいばりょうへんぞう）

実際に目にするのは初めてだ。

「いいだろ？ これはオレ達烏天狗に代々伝わる刀、名前を小烏丸だ！ （こからすまる）

その辺の刀なんか目じゃねえ、この小烏丸こそ最強の刀だぜ！」

「自慢げに話すとこ悪いんだが、俺の質問にまず答える」

「何だよ、面白くねえヤツだなあ。」

「……ああ、まだ手は出してないぜ」

不満げな表情を浮かべながら美風は答える。

智も明典も無事、その言葉にとりあえず安心した。美風の言葉も、多分本当だ。

人質に手を出すような外道な行いをするタイプじゃない、それだけわかる。

「……お前の目的は、俺との決着を白黒着けることだろう。俺がここに来るようにお前はアイツ等を拉致った。なら俺がここに来た以上あの二人は関係ない、今すぐ解放しろ」

「それはお前が勝ってからにするんだな。勝者は敗者を好きにする権利を持つ、ダチを返して欲しけりやまずはオレに勝つことだ。」

まあ  
「」

太刀を持つ右腕を大きく上に伸ばし、腰を低く落とす。

「オレには勝てねえけどな」

中段、下段、上段、八相、脇構え……五行の構えに属さないそのスタイルはあまりにも独特。隙も多いし、最初の一手が何かも想像がつきやすい。

わかっていてその構えを取っているのか、それとも何の考えもなくしに取っているのか……。

「……やってみないと、わからないだろ？」

対し、此方は中段に剣を構える。

隙だらけの構えとは言え、相手は妖怪。油断は禁物、一瞬の気の緩みも許されない。

「お前が勝ったら、人質はちゃんと返してやる。だけどオレが勝ったら……お前を貰うぜ。異論はないよな？」

「……ああ」

「よし……そんじゃいくぜ、華御 久國ッ!!」

銅鑼が鳴り響く、試合開始の開始の合図が今鳴った。

間髪居れず地を蹴り間合いを詰めてくる美風。流石は妖怪、烏天狗と言ったところだろう。一回の蹴りで間合いをもう半分以上も詰めてきているのだから。

普通の人間には出来ない芸当。だが

「抜刀 小狐丸鈴國」

金属音が鳴り響く。

諸刃の太刀である小烏丸。それを受け止めたのは美しい白銀の輝きを放つ刃。

樫木である木刀は抜刀の言葉と共に木片となって散り、一瞬にして一振りの太刀へと姿を変える。

小狐丸鈴國。妖狐である鈴姫と風雅が打ち、互いの名を一文字ずつ抜いて名付けた一振りの真剣。最強の刀と自負していた小烏丸の刃を、妖狐の打ちし刀は折れる事無く刃にてしっかりと受け止めていた。

この程度ならば見切れる、父の振るう剣速の方が遥かに早い。僅かにだが勝機はある。

「随分と変わった刀じゃねえかよ……ッ！」

「特注品でな、コイツはお前の言う普通の刀じゃない……ッ！」  
押し切り、そのまま袈裟に振るう。

美風はそれを受け止めることも避けることもせず、蹴りで刀身の側面を蹴ることで軌道を逸らした。

一直線に向かってくる。それを久國は迎え撃つ。

「コイツ……ッ！」

飛んでくる攻撃を捌き、受け流し、避けながら久國はひたすら前へ前へと進んでくる美風。楓を見据える。

独特の構えを取った時点でわかっていた。そして攻めてきてそれを捌く中で尚理解することが出来た。

コイツの振るう剣は……全てがメチャクチャだ。剣の振るい方、足の運び方、あまりにも無駄な動作が多すぎる。全体を見てドが付く程の素人。

これと言つて流派はない。喧嘩殺法ならぬ喧嘩剣法。

我流の型……それが美風 楓の振るう剣だ。

だからこそ見切り辛い。決まった型がない自由奔放の剣と言うものは。

空には雲が浮かんでいる。その雲は吹く風に青空を流れていき、その形を変えていく。美風 楓の剣は正にソレだ。風雲の型、とても言うべきその戦い方は相手に出方を読ませない。

防戦一方、辛うじて斬撃を免れている状態を強いられている。

集中力と見切り、この二つの内どちらかが途切れれば……その先に待つものは『死』だ。

それに美風 楓という烏天狗は本能で剣を振っている。

どうやって剣を振るうか、次に相手はどんな出方をするのか、そう言った思考が一切なく。ただ目の前の獲物を切り伏せて仕留めることだけを考えて振るっている。

だから相手に恐れを抱くこともなく剣を振ることが出来る。

「どうしたんだよ、さつきから避けてばっかりじゃねえか。そんなんじゃ、オレは斃せないぜつと!!」

鋭い回し蹴りが飛んでくる。それを後退することで避け、間髪居れず首を狙って飛んできた横薙ぎを防ぐ。

駒のように一回転をしながらの連撃。こんな戦い方をするヤツは初めて目にした。

本当に闘い辛い、と久國は距離を取りながら心の中で呟く。

……少しだけ息が上がり、呼吸が乱れ始めている。試合開始からまだ一分弱、此方よりも遥かに動き攻め続けている美風は息一つ乱さず平然とし、対し此方は相手の攻撃を見切り防いだだけでスタミナが大幅に消耗されて疲労を感じている。

これが烏天狗と人間の差、というものだろう。

肩で小さく息をしながら、久國は手にした小狐丸鈴國を構え直す。相手は余裕の態度を崩さない。此方に向ける眼はまるで嘲笑っているかのよう。

「なんだよ、攻めてこないのか？　だったら……これならどうだ！？」

美風が叫ぶ。

それは本来の姿を露にした、ということ。白い特攻服、その後ろより大きな二つの黒き翼が顔を現す。

羽ばたき、美風は地を翔ける。

速い！

足に衝撃。痛みと足に液体が伝い衣類を濡らすあの不快感が久國の表情を歪ませた。

赤い袴の一部がぱっくりと裂けていた。その傷跡はまるで鋭利な刃物で切ったかのように。そして裂けている布地の下、久國の白い肌より横に一線、血が流れ下へと向かって足を伝っていく。

「何処見てるんだよ」

不敵な笑みを浮かべ、余裕を現す声が背後から聞こえた。

羽が露になった途端、その速度は桁違いに上昇した。

かつて、智達友人でバッティングセンターへ行ったことがある。低速が七十五キロであり、その店の最高速度は二百キロであった。七十五など、打ったところで自慢にもならないしまった男として格好悪い。

だからと皆最高速度である二百キロを挑戦した。しかし結果はその場にいる全員の予想通り惨敗、打つことは勿論振るうバットに掠ることすらなく終わっていった。

野球の経験は勿論、普段速く動く物を見ていない人間がそう簡単に打てる球ではない。

久國は辛うじて、二球だけバットにヒットさせ成功させた。

剣術の試合をする父との剣速とストレートに飛んでくる速さがほぼ似ていたこともあった故の結果。後は剣ではなくバットの振るい方さえマスターしていれば、きっと完璧にヒットさせることも可能だった筈だ。

その二百キロのストレートと比較して、今対峙している美風　楓

を言おう。

美風 楓の動きはそれ以上に速い。十数メートルも離れていたのに、その距離を一瞬にして〇へと縮めたのだ。

動いた、と認識した時には既に遅い。相手の動きを見切る為に目で追おうとする頃には、この身は小烏丸の刃にて斬られている。

所詮この程度か。

楓は不敵な笑みを浮かべたまま、棒立ちになっている久國に剣を振るう。

動いた、それを認識し動くとするまでは素直に褒めよう。ただの人間にしては出来る方だからだ。

しかし所詮相手は人間、脆弱な生き物であることには変わらない。天儀町ではこの風練の山へと近づく人間はまずいない。人間達が決して足を踏み入れはならない領域。

過去……山へと入ってきた人間を侵入者と認識し殺したことが全ての切っ掛け。以降人間達は山へと近づくことを禁忌とし、現代に渡りそれを言い伝えてきた。

誰も寄り付かなくなつた風練の山、それはある意味刺激を失つたと言つてもよかった。

毎日が退屈な日々。修練と試合と言う刺激も長年繰り返し行えば何も感じなくなる。

新しい刺激が欲しい。それならば山の外へと出ればいい、そう楓は考えていた。

しかし、父がそれを許さない。理由はいつも同じ事を口にするばかり、オレが言いと言うまで絶対に出るな、と。そう言われ続けて数百年を楓は山の中で過ごした。

楓は烏天狗の中ではもつとも実力のある烏天狗であつた。

それは美風の血を引いているのは勿論、生まれ持つての天賦の才、そして父親譲りの男気があつたからだ。

美風 楓は烏天狗の中で一番の実力を持つ者として周囲から讃え

られ、同時に畏れられた。

だがそれ故に、楓の相手をしようとする者は誰一人として現れなかった。

最強と称される者に挑んで勝てるのか  
否、それが烏天狗達の考えであつた。

幾ら修練を積んでも勝てない者には勝てない、勝てないとわかっている戦いをして意味がない。だから楓は退屈な日々を過ごしていた。

もつと強敵と戦いたい、と。それは美風の血、そして父に似たことによる衝動でもあつた。

そんなある日、一人の少年が姿を現した。

雑談を交わしながら風練の山へと近付いてくる三人の少年。

山へと近付いてきた、つまり天儀町の人間ではない。余所者であることに直ぐに楓は気付いた。

父から聞かされていた、人間と言う生き物。

人間は脆弱で弱い生き物だ、それが父から聞いた人間と言う生き物について。

本当にそうなのか、楓の興味心が擽られる。そして思い立てば直ぐに行動へと移していた。長年美風家に使え世話役でもある執事に命令し、三人の人間を山の中へと誘い込む。そして後は父の言葉が本当かどうか、それをこの目で確かめるという考えだった。

いつもは遠目より人間達の生活を眺めているだけあり、初めて言葉を交えることに若干の緊張を抱きながらも。楓は何も知らず山へと入ってきた三人の少年に声を掛けた。

精神年齢は幼くとも外観年齢を見れば同じぐらい。

三人の内、二人は正に父の言葉通りの人間であつた。

一人は気絶し、もう一人は助かりたいが為に必死の言い逃れをしようとする。

しかしたった一人だけは違つた。そう、それこそが今楓が剣を交えている華御 久國と言う人間の少年だった。

臆すこともなく、堂々とした態度を取り続けていた。  
すぐに楓は見抜く。

脆弱な二人の人間とは違ってただの人間の少年ではない、そして強い。

抑えられない衝動が楓を駆り立てる。そして勝負を強制的に挑んだ結果……相手の口車に乗せられて負けるという無様な結果を残す破目になってしまった。

どんな方法であれ、負けたということが悔しくて。楓は涙を流しながら誓いを立てた。

今度は正面から華御 久國とぶつかって……そして勝つのだと。人質を取ることに多少気は引けた。だが、それでも。華御 久國との真剣勝負を楓は望んだ。

この事は父親には話していない、内密に皆に無理を言って起こした事。

この事がバレたりでもすれば、その後にはトラウマになりかねない仕置きが待っている。だからこそ勝たなくてはならない。喧嘩を売った以上は必ず勝て、そう教えられている以上敗北は絶対に許されないのだ。

それに烏天狗のルールで勝者には敗者を自由に出来る権利さえもある。

それはこの山に足を踏み入れ、対峙している者が烏天狗ではなく人間だとしても例外ではない。そして既に勝った後久國はこくにゃをどうするかは、既に決めてある。

何が何でも絶対に勝つ。絶対にオレは負けない。

その思いを胸に、楓は小烏丸を振るい続けた。

「どうした、もう終わりか……ッ！」

楓の問いに久國は答えない。

先程までは避けようとしていたが、今ではそれすらもしない。ただ一振りの太刀を正眼に取っているのみ。

その身は赤く染まっている。着物の至る所が切り裂かれ、そして



白い肌は裂けて赤い血を流す。白の陣羽織も赤く染まっていた。誰がどう見ても満身創痍である。もはやこの状態で勝機を掴むことなど不可能。

勝った、己の勝利を確信して楓は唐竹に小烏丸を振るう。

「なにっ!？」

金属音が鳴り響く。

振り下ろした一撃は、白銀の刃にて受け止められている。

「……どうした？ 何を驚いているんだ？」

身動き一つすらしなかった久國が、ゆっくりと顔を上げる。

その表情は苦痛に歪めても、絶望に染まってもいない。まるで弱者を相手にするかのような、不敵な笑みを浮かべていた。

「コイツ……ッ!」

気に喰わない。

楓は素早く背後へと周り、横一文字に剣を振るう。

烏天狗は風を司り、操る者。そしてその速さは妖怪一とも称えられる程。

先程一撃を防がれたのは偶然、マグレだ。そうに違いない、手加減をしていたからだ。ただの人間でも受け止めることが出来たのだ。それなのにアイツは自分の実力で防げたと調子に乗っている。実力の差に気付いていないバカだ、それなのに余裕を見せるその顔が気に入らない。

楓は苛立ちを露にしながら久國の背中を見据える。

捉えた。

隙だらけで防御を取る姿勢すら見せない、直撃する。

そう、確信し逆袈裟に剣を振るう。

なのに

「また……受け止められた。それがそんなに驚きか？」

久國の太刀がまたも防ぐ。

一閃。白銀の閃光がはしる。

返しに振られた久國の太刀は、楓の右腕を容赦なく切り裂いた。

白い袖が二つに裂かれ、白い肌が露出される。その肌に鮮血が迸り闘技場の床に流れ落ちる。

「クソッ……!!」

間合いを大きく空けて手にした小烏丸を握り締める。

……先程のは偶然ではない、と楓は理解する。同時に焦りと疑問が生じる。

今まで防げなかったのに、それが急にどうやって防げられるのか。手加減をしていた、と言う様子は見られない。

防いではいるものの、その身は既に満身創痍を訴えていることが一目見ればわかる。

だからこそ、どうやって……。

「ッ！」

楓は気付いた。どうして久國が急に己の攻撃を見切り防げるようになったのかを。

生命には五つの感覚がある。

味を感じ取る『味覚』、音を聴く『聴覚』、匂いを嗅ぎ分ける『嗅覚』、痛みや温度を肌で感じる『触覚』、そして物を見る『視覚』。

この五つの感覚が備わっているからこそ、生命は成り立っている。この五つの感覚の内、一つでも欠ければ生活は勿論。闘う者としても大きな支障を来たすの言うまでもない。

だが、久國はその内の一つである『視覚』を自ら封じていた。

決してその目は見開くまいと固く、強く心に誓うように二つの瞼を閉じている。

「何とかなったな……」

久國は小さく息を吐きながらゆっくりと閉じていた瞼を開く。暗闇だった世界に光が再び差し込まれる。円形闘技場、その客席を埋め尽くす観客、そして……信じられない物を見たような、驚いた表情を浮かべている美風 楓の姿。

目で捉えきれない程の速さを相手は繰り出してくる。

それを視認し、身体に命令を下し動こうとする頃には斬られる。それでは遅い、相手の攻撃を幾らでも受けることになる。

だから、『視覚』を久國は自ら封じることにした。

動いたまでは辛うじて見える。そこから先は今の自分では到底追うことは出来ない。

ならば目で見る、と言う事に最早意味はない。目ではなく、他で視ればいい。

そこで久國は視覚を自ら封じた。視覚以外の、残りの四つの感覚に全精神を集中させたのだ。

人間というものは、五感の内一つの感覚でも失えばそれだけでかなりの支障を来たしてしまう。特に武術家にとって敵を捉える為の視覚が失われることは致命的なハンディとも言えるだろう。

だが、残された感覚の内一つの感覚が異様なまでに発達するというケースがたまに見られる。それは失った感覚を他が補おうと働くからだ。

遠く離れた物音まで聞こえるようになったり、嗅覚が獐犬同様に鋭くなったりする等も症例の一つ。

今回はそれを実現させたまでに過ぎない。

視覚以外の感覚で相手の攻撃を見切り、それに対応しただけに過ぎないのだ。

だが、それは華御 久國という人間だからこそ出来る芸当。

……こんな話がある。

遙かなる昔、一人の盲目の男がいた。生まれて直ぐに光を失い、永遠の暗闇の中で生活をしてきたその男はある日、十数人という盗賊に襲われる。

盗賊達は剣や槍と各々武装していた。男も一振りのダンビラを腰に差していた。

だが数は勿論のこと、男は目が見えない。視覚という、相手を視ると言う一番重要な器官が失われている男に勝ち目など最初からな

い。それが常識であり、現実でもある。

しかし……男はその常識を覆した。

一太刀も浴びることなく向かってくる盗賊達を次々と斬り殺し、ものの数分で全滅させたという。

男が勝利を掴んだ理由は二つ。一つは武術、剣術を極めていたということ。

そして二つ目は、“侍”として身体が造られていたことにあった。侍というものは闘う者として、剣を振るう者としての宿命付けられた存在。故に肉体も、精神こころも、それ相応に造られている。

従って目が見えなくとも超人的なまでに発達した『触覚』、『嗅覚』、『味覚』、『聴覚』の四つの感覚を以って、結果視覚以外の感覚で“見る”ことを実現させたのだ。

即ち、それは“心眼”しんがんと称される。

その心眼を、久國は見事に実現させていた。

成功するとは、最初から思っていない。一か八かの賭けでもあった。

失敗すれば即刻死が待ち受けている。自ら目を封じ、見えないという事に対する恐怖に打ち勝つことも必要とされる。

才能や技術、血は勿論。後に必要なのは……恐怖に打ち勝つ勇氣。その勇氣があつたからこそ、久國は心眼を得ることが出来たのだ。  
った。

「さあ、どうする？ もうおしまいか？」

「くっ……この」

見据え返してくる美風。反撃されたことが悔しいのか、怒りが目に籠っている。

勝機はある。美風の速さはもう見切った、もう同じ手は二度と通用しない。

だが、早く勝負を着けなくては。

幾ら見切れたとしても、血を多く失い過ぎた。

大地を踏み締める足は震え、相手を視る目は霞んでいる。もう時

間に残されていない。

一撃、次の一撃で決めなければ負ける。だが逆に言えば好都合でもあった。

動きを見切られ、一太刀を浴びせられた美風は今、自分のプライドを傷付けられたことに怒っている。恐らく、もう速さにモノを言わせるような戦法はしてこない。仕掛けるとしたら……相手を絶対に潰す、一撃の必殺。

久國は静かに小狐丸鈴國を上段に構える。そしてカツ、と目を見開いた。この目は絶対に何があっても閉じない、相手を見据え続けると固く誓いを立てて。

相手も此方の意図を理解したのか。顔付きが変わる。

未だその目には怒りが籠っている。しかしその顔は同じく一撃で敵を斃すと誓った顔つきをしていた。

「もう手加減ナシだ……お前は、オレの最高の一撃でぶっ殺す！」  
闘技場内に突如突風が吹き始める。

少しでも力を抜けば身体ごと吹き飛ばされてしまいかねない程の風力。まるで台風の中にいる気分になる。

突風の発生源は意外なところにあった。怒りの表情を浮かべ、一撃必殺を以って斃すと宣言した美風。その右手にある小烏丸より突風は吹いていた。

言葉通り、己の中にある技の中で最も最強と証する技……即ち一撃必殺を繰り出してくるのだろう。

このリング内の空気が変わる。真夏だと言うのに真冬の様な寒さ、嫌な汗が額から流れ落ちる。

これから美風が繰り出す一撃は、普通の斬撃としての一撃ではない。それぐらい俺でもわかる。

だからこそ、俺はアイツに勝てるのか。

幾ら小狐丸鈴國が妖狐の力を以ってして打たれた太刀であるとしても、人間が繰り出す通常の一撃しか俺は繰り出せない。

妖狐の打った刀と言うぐらいだ。何か此方にも特殊な力とかあれ

ば……。そんな都合の良い話がある訳がない。

“アレ”を試そうか、とも考えた。だがその考えはすぐに頭の中から振り払う。

“アレ”はまだ未完成。それだけではなく人間相手にもまだ試したことがないのに、妖怪相手に通じるとは思えない。確実に誤爆する。

「正直言つて、この技を出したらお前は確実に死ぬ。

……正直言つとな、オレはお前を殺したくないんだよ。だから……降参しろ、そうすれば命だけは助けてやる」

「冗談……お前の言うその最高の一撃、受けて立ってやるぜツ！」

久國は不敵な笑みを浮かべる。

……信じるのだ、己の腕を。信じるのだ、自分を慕ってくれる小さき妖狐の打った刀を。

相手がどんな一撃を繰り出して来ようとも、華御の剣と小狐丸に敵はない。

「だつたら……くたばりやがれ久國——————ッ！！」

怒号を上げて、美風は剣を振るう。

美風との距離は凡そ九メートル程離れている。美風は動いていない、その場で剣を振るった。小烏丸の刀身の長さは通常の刀と差ほど変わらない、二尺三寸程。とてもじゃないが十メートルも離れた相手を斃すことは出来ない。

ただ、それが普通の剣撃であつた場合。

美風が太刀を振るった。それに伴い風が更に勢いを増し、リングの地面を真つ二つに切り裂いていく。

小烏丸より発せられていた突風。それが剣に乗って斬撃と共に刃へと姿を変えて放たれたのだ。凄まじい速度で突き進んでくる、目には見えない風の刃。

言葉通り、これは直撃すれば死ぬ。

「今更引けるかッ！」

久國は柄を握る力を強くする。

華御の剣を振るう者として、絶対に守らなくてはいけないことがある。

それは……敗北。華御の剣を振るう以上負けは決して認められない。そして、敵を前にして背中を見せてオメオメと逃走することも同じく。敵前逃亡は重罪なのだ。

絶対に逃げない。正面から来ると言うのなら、俺は同じく正面からそれに応えよう。未完成とは言え、華御家に代々伝わる闘法

父、華御 國正直伝の剣を……今こそ見せよう。

精神を集中させる。そして向かってくる敵を大きく目を見開き見据えて……

「ッ!？」

不意に手に熱を感じた。更に青い輝きがチラチラと視界の端で光っている。

久國は上を見上げる。小狐丸鈴國、その刀身より青白い焰が燃え上がっているではないか。

……そうか。久國は納得する。

小狐丸鈴國は妖狐が打った刀。妖狐の持つ最大の力はその青い焰、『狐火』にある。妖怪でありながら神格化された力を持つその焰は、魔を抜い焼き尽くす焰。

この小狐丸鈴國より燃え上がっている青い焰は狐火。この太刀を打った鈴姫の狐火だ。

いける。勝機を再び掴んだ久國は口元を緩めて、上段に構えた太刀を一気に打ち落とした。

形なき風の刃と、青き焰はお互いに討つべき相手へと向かって。ただただ一直線に地を駆け抜ける。

八、七、六メートル……そして中心、半径五メートル地点で二つの力は衝突を起こした。爆撃のような轟音が闘技場内に鳴り響き、衝突したことで嵐のような風の奔流が発生する。

観客席からは悲鳴に似た叫び声上がり、地には亀裂が幾つも走

る。

「……“おれ”の、勝ちだ」

不敵な笑みを相手に向ける。

風と青い焰、ぶつかり合った二つの力は互いに相殺する  
ようなことはなく、片方の力を上回る。

地を走り向かっていく勝者の力。そして己の力が打ち破られたこと  
に驚愕と、自分は負けるのだと言う敗北を感じた絶望を顔を浮か  
べて。その身に強大な力を受けた。

勝利を掴まんと大地を駆け抜けたのは“青い焰”。

小狐丸鈴國より放たれた狐火は、烏天狗の生み出す風を打ち破り、  
そして瞬く間に青い焰へと相手を包み込んだ。

轟々と燃え上がる青い焰。

ばちん、と指を鳴らす。それに伴って美風を包み込んでいた狐火  
は瞬時に消え、美風 楓はゆっくりと地に倒れた。

どよめく観客席。

リングに伏しているのは人間ではなく、自分達の身内であること  
が。誰もが予想していた結果を覆されたことが驚きなのだろう。

……残念ながら、それには応えてやれない。

俺にはどうしても勝たないといけない理由がある。ただ喧嘩を吹  
っ掛けて相手に勝つ、という自分自身の為のものじゃない。

大切な友人を助けるという理由が俺にはある。だから負けないし、  
負けられない。

「ぐっ……くっ……ッ」

「終わりだ……美風」

狐火を受けて、傷付いた身体に鞭を打ち立ち上がろうとしている  
美風。その首筋に切先を突きつけて、久國は静かに口を開く。

「な……何だよ。オレは、まだ戦……えるッ！ それに勝ちっ  
て言うなら、何でお前はオレにトドメをささないんだよ！？」

「……お前はどうか考えてるのは知らねえが、俺はお前と殺し合  
いをしに来たわけじゃない。俺はお前に勝って、それで智と明典を



無事に連れ戻せればそれでいい」

「ふ、ふざけんなよ……“私”はまだ、お前に負けてなんか

」

「そこまでだ。この勝負、お前の負けだ楓よ……」

男の声が不意に聞こえた。

刹那、空気が一瞬にして凍りつく。本能が警鐘を激しく鳴らし、その場から飛び退いた。

呼吸を乱れさせ、全身から滝の様な冷や汗を流しながら。小狐丸鈴國の柄を手放すまいとしっかりと握り締め、久國は正面を見据える。

いつあの男は現れたのか。美風の頭元に立つ一人の男。

自分の父親と同じぐらいの中年男性。威厳に満ちた顔立ち、他者を圧倒する威圧感を放つ。その男もまた修験者のような服装を身に纏い、背中には漆黒の双翼が生えている。

気が付けば、先程まで歓声を上げ、どよめいていた烏天狗達が一斉に口を慎んでいる。

しんと静まり返った円形闘技場内。

一方で、美風はガタガタと震え恐怖を孕んだ目でその男を見ている。

「そういうことが……」

「ワシがこの風練の山、烏天狗達の長

美風 豪徳と言う」

「ボスのご登場ってやつか……」

不敵な笑みを浮かべて久國は言う。

美風 楓も充分に強かった。だがこの美風 豪徳たる烏天狗……

強い。

どうして今頃になってボスが出てきたのか。それはやはり、仲間むすめを助ける為だろう。美風のあの震えようと、同じ美風の性を持つあの男は……この美風 楓の父親だ。父が娘を助けるのは、どの社会においても同じ。

尤も、此方から喧嘩を仕掛けた訳ではないが……。

「楓……」

「な、なんだよ……親父……」

「……これはどういう事だ？」

鋭い眼光が美風を捉える。

それに更なる恐怖を感じたのか、美風は一層身体を強く震わせて、ガチガチと歯を小刻みに打ち合わせながらも、その問いに答えようとする。

だが、恐怖が勝つのかなかなか応えようとしない。

痺れを切らした美風　豪徳は娘から視線を外す

その視線

は此方へと向けられた。

「人間の童よ。お前は何故この山に足を踏み入れ、この者と剣を交えている」

「……俺はダチを連れ戻しに来た。それだけだ」

「ダチ……？」

「そうだ。俺は二人のダチとこの天儀町に旅行に来ている。そのダチをこいつ等に拉致られた、だから俺はその二人を助けに来ただけだ！」

此方に非はないのだから、堂々としていればいい。

嘘は何一つ言っていない。後は……娘が父親に対しどう答えるか。

「楓よ……この男の言った言葉、嘘偽りでない真実で間違いないな？」

視線は変わらず、射抜くような鋭い眼を此方へと見据えさせたまま美風　豪徳は尋ねる。

美風は何も答えない。眼を逸らし、答えるのを戸惑ってるように見える。

それを美風　豪徳は肯定と捉えたのか。そうか……、と呟くとリングの近くに居た一匹の烏天狗に顔を向ける。顔を向けられた烏天狗は短い悲鳴を漏らし、身震いを起こしていた。

「今すぐこの童の友を連れてくるのだ、今すぐに」

長からの命令。それは絶対であり拒否することは許されない。

烏天狗は情けのない声でハイと答えると、慌てふためきながら円形闘技場の中へと入っていった。

暫くして、智と明典の二人がリングへと姿を現す。

智は俺の姿が見えるや否や、慌てふためきながら駆け寄ってくる。その肩には明典が。

またも気絶したのか、明典は智に肩を貸されている状態でやって来る。来ると言っても自力ではない、気絶している為足は地面に引き摺られている。

しかし、美風の言った通り何処も怪我などはしていなかった。

「久國ッ!!」

「よお……助けにきたぜ。とりあえず、生きてるみたいだな」

「何言ってるんだ! お前……こんな傷だらけで。直ぐに病院に行かないと!」

怪我を案じてくれる智、気絶している明典は一先ず放っておくとして。俺は本当にいい友達を持った。心配してくれる明典に、とりあえず大丈夫とだけ伝える。

「……誰か!」

「はっ!」

美風 豪徳の呼び掛けに、数人の烏天狗が姿を現す。

「今すぐこの童の治療を。そして後に今回の件について詳しく話を聞くことにする。尚、楓は勿論この件に関与している者は自らワシの元まで来るのだ。拒否は許されぬ、これは……命令だ。よいなッ!」

美風 豪徳の声が響き渡る。

その言葉に反論するものは誰一人として現れない。

これでようやく終わった。試合は無事終了、俺が勝利を収めると言う形で幕を下ろした。

……緊張の糸が切れたせいか、急激な睡魔が襲い掛かってくる。激闘による疲労の為か、それとも出血多量による失血死の一手前なのか。それを考えることすらも放棄して、ただただ俺は襲い来

る睡魔に身を委ねて静かに両方の瞼を下ろした。

夜更け過ぎ、ふと目を覚ます。

身体を覆う掛け布団を外し、横たわらせていた身体をゆつくりと起こす。

隣で爆睡している二人を起こさないように、静かに床を歩いて窓の方へと移動する。

窓を開く。心地の良い夜風が入り、それを肌で感じながら空を見上げた。

漆黒の空に浮かぶ、白い月。それはとても神々しくて、芸術作品の様に美しい。

…… 本当に今日は色々であった。

あの後烏天狗に伝わる霊薬を服用することで一命は取り留めた。曰く、後少し処置が遅ければ失血死により死亡していた。

烏天狗は霊薬を作ることに優れていると言う妖怪だけあり、その効果も絶大。現代の医学が驚異的に進化していると言っても、たった一粒の丸薬を服用するだけで傷が一瞬にして完治してしまう薬に比べれば大したことはない。

そして折角風雅より貰った着物も、着てから僅かにしてボロボロとなってしまうた。

明日の朝も鈴姫は朝食を持って来るだろう。その時に謝罪し直してもらう様に頼むつもりだが……果たしてどんなリアクションを見せてくれるのか。

絶対に悪い方向へとしか進まないことは、今からでもわかる。

何はともあれ、本当に今日は大変だった。

今日の出来事を思い返ししながら、ぼんやりと夜空に浮かぶ月を見上げる。

「……ん？」

白い月に黒い点が急に現れた。

月のクレーター……ではない、望遠鏡もないのに肉眼で見える訳がない。

不可思議なことに、それはどんどん大きくなっていく。

徐々にハッキリと形を作っていく黒い点。

そして肉眼でもハッキリと映るようになってた時、咄嗟に枕元に寝かせておいた小狐丸鈴國を手に取る。

白い月を背に此方へと向かってくる黒い点の正体。それは身の丈程の翼を背中より生やした烏天狗

美風 楓であつた。

「よ、よお……」

美風 楓が声を掛けてくる。申し訳なさそうな顔を浮かべて、頭に目立つタンコブを作つて。久國は警戒心を解かず、相手を見据えたまま簡潔に用件を尋ねる。

「何の用だ」

「そ、その……えっと……」

「……用がないのなら、さっさと帰つてくれ。睡眠妨害として訴えるぞ」

なかなか用件を言わない楓に対し、久國は若干苛立ちを見せながら口を開く。

数秒後、大きく深呼吸をした楓は静かに、ハッキリとした口調で答える。

「こ、今回はお前の勝ちだ、悔しいけど認めてやる。だが今度はオレが勝つ、そしてその時は……お前をオレの“婿”として貰うからな！ 憶えておけよ！」

「ハア……ッ！？」

言いたい事を言つたのか、美風は再び夜空へと飛び立っていく。漆黒の羽を白い月明かりに照らされて美しく舞い落しながら、月へと向かつて飛んでいく。

「……また面倒なことになりそうだな」

月へと溶けていくように消えた楓。その月を見つめながら、俺は

その場で小さく溜息を吐いた。

### 第三章：天をも斬る剣

金色の月が浮かぶ漆黒の空。

静寂に包まれた町。鈴虫や蟋蟀達による自然の合唱が奏でられる。

「ハア……ハア……」

チクショウ。どうしてっ、こんな事に……ッ!!

男は走っていた。全力で、中年期を迎え老いた身体に鞭を打ち、必死の形相を浮かべながら砂利道を駆け抜ける。

一体、どの位の時間こうしているだろうか。男はそんなことを思う。

男は何処にでもいるサラリーマンだった。企業に勤めて、いつもの様にデスクワークをこなし、午後七時には会社を出て家に帰る。特に変わりもない、誰もが送っている極々普通の生活をしている。ただ、そのいつもと同じ生活を送っていた男が起こした一つの行動が、不運を招いた。

仕事が終わりに、会社を出る。いつもならこのまま家に真っ直ぐと帰る所だが、男は家には向かわず夜の街を楽しむことにした。夜にしか開かない店が開き、昼間に劣らない賑やかな雰囲気は街に溢れ返っている。

男は居酒屋で酒を飲み、ツマミを幾つか注文して晩酌を満喫していた。

どのくらい飲んだらう。閉店時間ギリギリまで酒を楽しんだ男は陽気な気分の家へと帰る。酔いが回りふらふらと安定しない足取りで、しんと静まり返った道路を歩く。そんな時、一人の男が目の前から歩いてきた。

男と同じぐらいの中年男性。手に何か持っているが、酒に飲まれている男の目にそれが留まることはなかった。距離が縮まってく、そしてすれ違う時男の肩に相手の肩がぶつかった。

「コラーッ！ 何処見て歩いてんじゃボケーッ!!」

この一言が、己の身に不運を齎すとは。男は思いもしなかった。酔いによつて正常な思考力を働かせなくなっていた男は、酒の勢いに身を任せて相手に暴言を大声で吐く。

暴言を言われ続けられている男は、何も喋らない。ただ顔を俯かせて、黙つて男の暴言を聞いている。ただ……その口元が三日月の様に、歪んだ笑みを浮かべていたことに、男は気付いていない。

ひゅ、と音が鳴る。続いて重量のある何かが地面に落ちる音が鳴った。

「……？」

男は自身に何が起きたのか理解出来ずにいた。

急に左手で鞆を持つ感覚が消えた。目の前の男は右手を天に掲げている、そこには月明かりによつて照らされた湾曲した白銀に煌くもの。男は口元を緩め、歪んだ笑みを浮かべている。

ゆつくりと、視線を左腕へと向ける。

ない。先程まであつた筈の左腕が何処にも。視界に映るのは左腕があつた場所から赤い液体がボトボトと地面に流れ落ちている光景。更にその下、鞆を握り締めている左腕が地面に無造作に転がっていた。

左腕を覆っている白のスーツ。それが誰の腕なのか、男は瞬時に理解する。

「ひつ……ぎゃああああああつ！！」

断末魔にも似た悲鳴。

惨劇の夜が幕を明ける。

「ハア……ハア……」

薄暗い路地裏に男は身を潜める。

呼吸を荒げ、周囲をこれでもかと思うぐらい用心深く警戒し、安全だと確認するとボロボロと涙を流し出す。

酔いはとうに失せていた。左腕に走る焼け付くような激痛と、未だ止まらず流れ続けている血の匂いと感触によつて冷静な思考力を



取り戻すことが出来た。

傷口に当てている白のスーツは己の血によって全体が赤く染まっ  
てしまっている。

どうしてこんなことに、と男は呪うように呟く。世界に、こんな  
不運に巻き込まれてしまった己の運の無さに。

どもあれ、絶望的な状況下であることには変わりなかった。

逃げる為に必死だった故に家とは全く逆の方向へと逃げてしまっ  
たこと。警察か救急車を呼ぼうにも携帯電話がない、地面に転がっ  
ていた左腕　　その手が握り締めたままではいる鞆の中に入っ  
ている。これでは助けを呼ぶことも出来ない。

このままここで身を潜め朝が訪れるまで待つ、とも男は考えてい  
た。

しかし左腕を失い、その傷口から絶えず流れ出ていく生命の源で  
ある血。止血をしているが一向に止まる気配を見せない。このまま  
では出血多量による失血死は免れない。

かと言って今ここを飛び出せば、またあの男と遭遇するかもしれ  
ない。

男の狂気を思い出し、男はガタガタと全身を激しく震わせる。

あの男は異常だ。冷静に思考が働く今、あの男が手にしていた白  
銀に煌く湾曲したモノ……日本刀と見て間違いない。どうして日本  
刀を持ち歩いているのか、それだけでも充分異常だが、真の狂気は  
男自身にあった。

……男は笑っていた。光を失い濁りきった瞳を向けて、あそこま  
で歪んだ笑みが浮かべられるものなのかと思わせるぐらい、口を三  
日月のように嗤っていた。

一言も喋らず、まるで機械のようにただ、ヒヒヒと不気味に嗤う。  
そんな狂気に満ちた男がまだこの辺りを歩いているかと思うと、  
恐怖で足が竦み立って歩くことが出来ない。

逃げることも、留まっておくことも出来ない状態。正に絶体絶命  
の状態に男は陥っていた。

じやり、と音が聞こえる。靴が地面と擦れ合う音だ。

……いる。それも近くに。

男は必死に息を殺し、耳を済ませる。

じやり、じやりと。その音は男が近くまで来ていることを意味していた。

わざとらしく音を鳴らしているのは、逃げなければという恐怖に駆られ飛び出した所を手にした刀でバツサリとするつもりなのだろう、と男は考える。

ならば、と男はその場から飛び出すようなことはせず。ただただ息を殺してその場に身を潜め続けた。

本当ならば今すぐにでも飛び出して逃げ出したい。だが今ここで飛び出せば殺されるのは明白。しかしここで身を潜め相手を撒けば……まだ生存確率がある。

早く過ぎ去ってくれ。強く念じ、いないもしない信仰もしていない神に祈る。

靴を地面へと擦り付ける足音は未だに聞こえる。

早く、早く何処かへ行ってくれ。男は身体を震わせながら強く念じた。

……暫くして、物音は何一つ聞こえなくなった。

地面に靴を擦らせる音も、いつの間にか聞こえない。

去った。そう理解した途端、男は幼い子供の様に涙を流し……泣いた。緊張の糸が切れて安堵からか、失禁もしていた。しかしそんな事は男にとつてどうでもよかった。いい大人が粗相をしようが、こうして生きていることの方が重要なからだから。

もうこれで殺されることはない。男は急いでその場から飛び出す。殺されることはなくなったとしても、このままではいずれにせよ死んでしまう。一刻も早く病院にいかなくては。

「ヒヒ」

男の足が止まる。

再び顔は恐怖の色に染まり、狂気を思い出した身体は男の意思と

は無関係に震え出す。

「ヒヒヒ」

ゆっくりと、男は後ろを振り返る。

建物の屋上。夜空に浮かぶ月を背に刀を携えている狂人の姿。

背後にある月に負けんぐらいに、口を大きく歪ませて……狂人は嗤っていた。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ！！」

「う、うわああああああつ！！！！」

狂気に満ちた嗤い声と、絶望に満ちた叫び声が深夜の町に響き渡る。

風練の山の一件より翌朝。

今日もまたいつもの様に日課を行う。

手には木刀、その傍らにはある物を入れたビニール袋。待ち人が早く訪れることを願いながら、素振りを黙々と続ける。

……昨日、烏天狗の美風 楓との激闘で俺を助けてくれたこの小狐丸鈴國。妖狐の持つ狐火があつたからこそ俺は勝てた。鈴姫のくれたこの太刀がなければ、俺は今頃敗北していただろう。この事については改めて感謝し、鈴姫に礼を言わなくてはいけない。

……華御家長男として、侍として俺はこの世に生を受けた。

侍として生まれた者は決して逃れられぬ闘いの宿命を背負う。いつそれが自分の身に訪れるのかはわからない。全ては神のみぞ知る。

その宿命は、どうやらこの天儀町に来たことで訪れたらしい。

これから先、俺はどの様な相手と闘っていくのだろうか。昨日の闘いと同等か、或いはそれ以上の闘いが待ち受けているのか……。

……一つ、気掛かりなことがある。昨日、美風の言ったあの言葉。試合前、自分が勝利した際には俺を貰うということ。これは命を

貰い受ける、と言う意味合いで言ったのだと自己解釈していた。

だが、昨晚いきなり現れたかと思えば、次に勝負して勝った時は俺を婿として迎えるという捨て台詞を吐いていった。

どうしてあんな台詞を吐いたのか、俺には未だにわからない。ただ一つ、確実に言える事は丁重にその申し出をお断りするということぐらい。俺はまだ誰とも結婚をするつもりはない。

「シッ」

「修練に励んでおったか」

聞き覚えのある声に、素振りをしていた手を止める。

昨日程の威圧感はない。首を向けると、美風 楓の父 豪

徳がそこにいた。

威厳に満ちた顔を浮かべ、鋭い眼光が俺を捉えている。今日は修験者のような格好ではなく、普通の着物を纏っている。

それに豪徳からは闘気も殺気も感じられない。この場に來たのは物騒な理由ではないと見ていいだろう。だが、用件だけは気になる。

「……おはようございます。こんな場所に何か御用でも？」

「まずは貴殿に詫びをしにきた。ワシが山を留守にしておる間、我が娘のした事……どうか許してやってほしい」

豪徳が頭を静かに下げる。その行動に久國は少し驚いた表情を浮かべて、すぐに元の表情へと戻す。

「別に気にしてませんよ。ダチ二人も怪我もなく無事、俺もこうして生きてる。」

それに、済んだことをグチャグチャと掘り返すのも嫌ですからね。この話は、もう終わりにしましょう」

この豪徳という烏天狗。妖怪である以前にしっかりとした父親だ。娘だからと言って甘やかすような事は一切していない。今回も娘を傷付けたことによる報復ではなく謝罪。子の責任は親の責任と言うが、正にそれだ。

「そうか……貴殿がそう言ってくれるのなら、ワシも助かる」

「……一つ、いいですか？」

久國は豪徳に尋ねる。

「昨日の夜……いや、試合をする前に言っていたんだが、俺に勝つたら婿に貰うと。そうアイツは言っていた。貴方は、このことを？」

「うむ。人間と言う生き物は実に脆弱だ。己を優先し、苦難から目を背け真正面から向かい合おうとしない。だが貴殿は違った。己の命も顧みず友を助けんとし、絶望的な状況であっても決して諦める姿勢を見せなかった。

数百年ぶりに見せてもらった、お前の中に宿る真の武人としての熱き魂を。だからワシは楓がお前を婿として迎え入れたいと言う申し出にワシは反論しなかった。貴殿は強い、我が美風家の、風練の山の長として相応しい。ただ、アイツは誰よりもプライドが高くてな……自分が負けて嫁ぎに行くことだけはしたくないらしい。

あくまで貴殿に挑み、勝利し、勝者として貴殿を婿として貰いたいそうだ」

「そうっすか……」

またもややこしい事になってきた。

最初は妖狐、そして昨日は烏天狗。妖怪の少女より好意を持たれるとは、俺自身でさえ思っていなかった。どうして俺は妖怪にこうも好意を寄せられるのか……。

いずれにせよ、結婚するつもりがない事には変わりはないが。

「それで、その楓は今何をしてるんですか？」

「今は山にて修練に励んでおる。昨日の試合、負けたことは勿論貴殿の妻として隣に立つに相応しい女へとなる為にな」

「ハハハ……」

最早苦笑いしか浮かべることが出来ない。

昨日の試合で負けたことが、余程悔しかったのだろう。一応美風は俺に二回負けていることになっている。二度も挑み負けた、その屈辱を晴らす為に修行に励んでいるという美風。昨日よりも強くなつて再び前に現れ試合を挑まれるとなると、流石に俺もこのままで

はいけないだろう。

これが男と男の勝負なら此方も熱が入るというもの。しかし相手は女性だ、偏見を持つことはよくないが、それでも気が引けるのは事実。

……戦いの場に立った時点で男も女も子供も関係ない、戦場に立つ者は全てにおいて等しいとは父の口癖。その通りであるとは思うものの、やはり心の片隅では完璧に賛同出来ない自分がいる。故に俺は甘い男だと、いつも言われる。

「……さて、ワシはそろそろ戻らせてもらおうとしよう。華御 久國……と言ったな、どうかワシの娘をよろしく頼む。そして次に楓と合間見えるその時まで、更なる修練を積み強くなっておけ」

「あ、はい……って俺結婚する気はないツスから！」

その言葉が豪徳の耳に入っただのか否か、特に反応を見せることなく背中を双翼を羽ばたかせて空高く飛び上がる。

飛んだ、と思った頃には既に豪徳の姿は視界より消えていた。楓よりもずつと速い。

「久國さんッ！」

入れ違つように、今度は鈴姫がやってくる。

今日も重箱にギッシリと詰め込まれた朝食が手に携えられていた。

「おはようございます、久國さん。今日も精が出てますね」

「あ、ああ……おはよう鈴姫。今日もまた、朝飯を持ってきてくれたのか？」

「はい！」

可愛らしい笑顔で返す鈴姫。

今日の朝食もまた、抜くことになりそうだ……。

そんな事を思いながらも久國は鈴姫の朝食に箸を伸ばす。昨日と変わらない、程よい甘さの稲荷寿司をしっかりと噛み締めながら。

「なあ鈴姫」

朝食を食べながら、久國は鈴姫に声を掛ける。

「はい？」

「実はお前に……謝らないといけない事があるんだよ」

そう口にした瞬間、鈴姫の右手より割り箸が滑り落ちた。

そしてこの世の終わりの様な、絶望に満ちた顔を浮かべてワナワナと肩を震わせている。

「そ、そ、それは……ど、どういう」

「いや、だから普通に謝らないといけないことが」

「嫌です！ 私は久國さん以外の殿方と結婚するつもりなどありません！

私の何処がダメなんですか？ 言って下されば直します、ですからどうか私を捨てないで下さい！」

「いやいやいや、落ち着けて！ 別にそう言う話じゃないって！」

泣きすがり付いてくる鈴姫。

大きく勘違いをしている鈴姫をとりあえず落ち着かせる為に、用意しておいたビニール袋から中身を取り出す。

昨日、貰って直ぐにズタボロにしてしまった着物。

烏天狗……美風 楓との激闘。小烏丸の鋭い刃に切り裂かれ、自身の血で白が赤く染まった陣羽織。それを見た瞬間、鈴姫は落ち着いてくれた。

そしてもう一度、信じられない物を目にした様な顔で着物を見つめている。

「こ、こ、これは一体……どういうことですか？」

「まあ驚いて当たり前だよ……昨日少し派手な喧嘩をした。それでこうなった、悪い」

「た、ただの喧嘩でどうやってたらこんなにボロボロになるんですか！？」

それにこれ……どう見ても鋭利な刃物で切り裂かれた跡です！ 久國さん、昨日一体何をしてたんですか！？」

「……喧嘩だよ。烏天狗とな」

隠しておく必要もない。

久國は昨日に起きた出来事を全て包み隠さず鈴姫に伝える。風練の山に行ったこと、友人が人質に取られ助ける為に山に赴き、烏天狗と激闘をしたこと。その中で美風に求婚されたとは、言わないでいた。これ以上余計に話をややこしくしたくなかったからだ。

話を終えて、鈴姫は終始啞然としていた。

「とまあ、こんな感じで」

「こんな感じで、じゃありませんよ！ 久國さん、もしかしたら殺されてたかもしれないですよ！？」

「む……まあ、そうとも言っな。でもこうして無事生きてる訳だからもういいだろう」

「よくありません！ もし……もし久國さんが死んじゃったら、私はどうしたらいいんですか？」

弱弱しい声で鈴姫は言う。ふと見ると鈴姫は泣いていた。

「お願いですから……危ないことはしないで下さい。久國さんは私の大切な人なんですから……」

「……鈴姫」

久國は静かに、泣いている鈴姫の頭に手を置く。

「鈴姫、俺はさ……華御家の男として 以前に侍としてこの世界に生まれてきた男だ。侍って言うのは闘う宿命を、剣を振るう者として生まれてきた人間のことを言う。そして今が、俺が闘わないといけない時期らしい。だからまあ、この先も多分俺は色んなトラブルに巻き込まれるだろう。けど、俺は絶対に負けないし死なない。お前には心配掛けるかもしれないけど、それだけは絶対に約束する」

「……本当ですか？」

「男に二言はない、って昔から言うだろ。だから、もう泣くなよ」

「……嘔吐したら跡形も無く、魂までも狐火で燃やし尽くしますからね？」

「そこは普通、針千本飲ますって言うんじゃないのか？」



お互いに笑い合う。

目頭に涙を浮かべながらも、鈴姫は笑ってくれていた。

「それにしても、昨日はマジで助かったぜ。お前がくれたこの小狐丸がなかったら、俺は今頃無様に負けていたな」

「その刀は私の狐火を以って打ちました。ですから久國さんが望めばいつでも私の狐火は力を貸してくれます。だって、私の愛する気持ちが一杯詰まっていますからね！」

「そうか」

抜刀、と口にし小狐丸鈴國を抜き身の状態にする。太陽の光を浴びて刀身がきらりと煌いた。

「けど出来れば今の台詞、ボンツ、キュツ、バーンツ、な女の子に言われた  
イテツ！　じよ、冗談だ冗談！　本気で怒るなよ！」

「今は子供体型ですけど、後二、三年したらボンツ、キュツ、バーンツ、になつて久國さんを骨抜きにしてあげます！　以前に人の身体について言うのは失礼なことですよ！」

スリーサイズがオール五十の幼児体型の鈴姫が大人のスタイルを持った姿……想像出来ない。しかし子供の姿でこれだけ整っているのだから、大人になつたら物凄く美人にはなるのはまず間違いないと言える。

それがいつになるのかはわからないが。たかが二、三年で大人のスタイルを手にいれらると思えない、恐らく後十数年先の話になるだろう……。

「まったくもう……それで、今日のご予定は？」

「さあ、まだわからないなあ」

今日もまた、何処に行くかは知らされていない。

最初は神社、次は山、となれば大体海とか湖辺りへと行きそうな気がする。兎に角、今日の予定は智が起きてからでないとわからない。

そしてこんな事を聞いてきた鈴姫の意図もわかっている。

「あの……」

「暇が出来たら、だろ。ああ、昨日はドタバタがあつたからまだ完璧に里を周り切れてなからな。その時はまた、案内頼むぜ？」

「ッ……はい！」

嬉しそつに頷く鈴姫。そんな鈴姫の笑みに口元を自然と緩めた。

「また朝飯喰わないのか、久國」

「ああ、今日もまた食欲がないんだよ。だからお前等で食べてくれ」

「そんじゃ、俺が有難く貰つとくわ」

自分の分の朝食を二人に分け与え、今日のニュースを見ようとテレビを点ける。

「これはまた随分とアレだな」

思わず呟いてしまう。

朝からとんでもないニュースが報道されていた。その内容はあまりにも猟奇的。

内容を現場 見覚えのある風景を背にして状況を語る童顔の可愛らしい女性キャスター。

公園で変死体が発見された。被害者は中年のサラリーマン、何処にでも居そうな平凡な名前。そんなサラリーマンは何者かの手によって四肢と首を鋭利な刃物か何かで切断され、更には心臓を抜き取られていたそうだ。

警察も殺人事件として見て捜査を進めているらしい。

しかしこの記事、更に目を通していくと興味深いことが書かれている。

まず、その日だけで同じ死体が見つかったということ。数は七人、年齢層も性別も全てバラバラ。最年少で十四歳、最年長で七十五歳。子供だけでなく、高齢者まで狙ったこの犯行は明らかに無

差別によるもの。

目的などもなく、ただ殺したいという欲求を満たす……それこそ、ゲーム感覚に楽しんでる。

もし、この犯人にほんの少しの良心が残されているのなら、一人をその手で殺めた時点で激しく後悔する筈だ。だがこの犯人にはそれが無い。

心臓を抜き取る、と言う時点でそいつは最早人間としての心を失ってしまっている。だからこそこれだけの人数を殺めることが出来るのだろう。

そしてもう一つ、殺害場所が全て地元であるということ。

殺されている場所は皆一緒の場所ではない。だが全て、自分が住んでいる地域を中心に起きている。サラリーマンの遺体があったと言う公園も、昔よく遊んだ公園だ。

特に目立ったこともなく、平凡な毎日が流れていると思っていたらとうとう大きな変化が訪れたようだ。それもろくでもない内容の「なんや……俺らが旅行行つとる間に、こないな事件が起きとつたんやなあ……」

味噌汁を啜りながら、感想を漏らす明典。

「鋭利な刃物って……なんだろうね。それに殺されてる場所は確かに地元だけど、みんなバラバラみたいだし」

それに続いて智が答える。

智の言う通り。発見された遺体は全てバラバラなのだ。自分の家を中心に考えると、サラリーマンの遺体が見つかった公園は徒歩十五分程度で着けるが、十四歳の中学生の少年が発見された場所はそこよりかなり遠い。最寄の駅からだと五駅程離れた場所にある。

犯行時刻は恐らく深夜、白昼堂々とこんな猟奇的な犯行を行う力はまずいないだろう。だからこそ不思議でたまらない。限られた時間内で、別の場所にいる七人を殺せるものなのか。

多分、この犯行は一人の手によるものではなく数人のグループによる犯行と見て間違いないと思う。一人で遠く離れた人間を次々と

殺すことなど出来ない。

……いや、同じ場所で殺してから遺体を別々に捨てたということも考えられる。いずれにせよ、この事件は普通ではない。

「それにしても、心臓を抜き取るって……まるで儀式だな」

不意に、智が口を開いた。

「儀式？」

「昔からよくあることだよ。雨乞いや豊作を祈る為に神への捧げ物としてだったり、悪魔なんかを召喚する為だったり、そんな理由で心臓が捧げられたってケースは結構ある。今回のこの事件は多分、そう言った目的の連中じゃないかな」

猟奇的殺人事件の報道が終わり、今度は明るい内容のニュースへと変わる。

「儀式……ね」

地元で起きている殺人事件。

家は……まず問題ないだろう。父親は言うまでもなく剣術の達人、その強さは日々手合わせをしている自分がよく知っている。いつか追い越したい、目標でもある父。子が親を追い越すことなど一生出来はしないが、それでも父は俺にとって永遠の目標だ。

母親も普通の一般家庭の生まれだがその昔は空手を習っており、学生時代では大会に毎回出場しては優勝を搔つ攫つていったという伝説を持つ。その頃に付いた異名は“拳魔”だったそうだ。由来は暴君の如く攻めまくり相手を問答無用で殴り斃した、というファイティングスタイルから来ているらしい。今では御淑やかで虫一匹殺さない聖女の様な顔をしているが、人とは本当に見かけによらない姉に至っては……まず大丈夫だ。やはり女の子として生まれてきたからか、両親から共に溺愛されている。夜遅くに出歩こうものならそれこそ必死に止めるだろう。

それにもし暴漢に襲われたりしても問題はない。剣術家の父と空手家の母の血を引くのだ。特に武道をしている訳でもないがその力は強い、中でも蹴りが一番の武器と言えるだろう。今まで姉に何度

も告白をし、その度に姉の蹴りが炸裂。それを受けて立っていられた者は未だに現れない。ただ一人、俺を除けば……。

兎に角、家は大丈夫だ。もし今回の事件の犯人があの家を踏み入れた瞬間、そいつ等に明日は訪れない。

「まあ、そのウチ捕まるやろ。死体ある所に完全犯罪はなしって、昔呼んだ漫画に書いてあつたぐらいやし」

「それ、シャーロックホームズじゃなかったっけ？」

「そやっただけかなあ。まあええわ、それよりも今日は何処に行くんや？」

昨日みたいに妖怪絡みの所はもう行かへんで」

「大丈夫。今日はちよつとしたパワースポットに行くだけだから」  
「パワースポット？」

智の言葉に明典が繰り返して尋ねる。

「天儀町は妖怪に関する逸話が多い場所。だけどその中で唯一の聖域とも言える場所がある。それは “龍門の滝”」

「龍門の滝……また随分と大層な名前の場所だな」

「でも名前に安心して行けそうな感じやな。だって龍やし」

風練の山に行くと言われた時とは大きく違い、明典の顔は非常に穏やかだ。

古来より、東洋に伝わる『龍』と言う存在は主に“水”を司る神聖な霊獣として崇められている。中でも有名なのは四聖獣の一角で東の守護神である『青龍』が挙げられる。

また龍は人語を話し、神通力を持ち、天を自由に駆け、空を自在に舞う生物の王的存在ともされている。

その龍に関するパワースポットならば、何かしらのパワーを貰ったとしても可笑しい話ではない。

「その滝には龍が住んでいて、流れる滝の水には厄を払い健康な身体で一年を過ごせるって話らしいよ。龍のパワーが溢れているからかな」

「ふん、なんや微妙やなあ。金運が上がったり女からモテモテ

になったりするような効果はないんか？」

「そんな下心全開だと、貰えるパワーも貰えなくなるぞ？  
でも面白そうだな。俺は行くことに賛成だ」

今度行く場所には妖怪ではなく霊獣である龍が現れる……等。

龍は神聖な存在。此方から出を出すような真似をしない限りは、  
妖怪の様に相手から手を出してはこない。

妖怪がいるのだから龍だって存在している。一度は是非目にして  
おきたい存在だ、出来れば記念写真も撮らせてもらいたい。

「それじゃ、朝ごはんを食べたら早速出発しよう。次行く場所は  
ちよつと遠いからね。それから、午後からは自由行動。今日一日は  
自分の好きなように行動しよう」

「おつ、それなら俺は商店街の方に行ってナンパしてこよつと。  
可愛い娘が結構おつたし、夏祭りまでに何とか一緒に周る女の子ゲ  
ツトしいひんとな！」

「久國。お前はとうするんだ？」

「俺は……まあまだ考え中だ。智こそ、何をするんだ？」

「寺や神社巡りかな。昨日の一件から流石に懲りたからね、もう  
一度プランを見直しながら立て直して、安全な場所に行こうかなっ  
て感じたよ」

智も明典も既に計画を立ててあったようだ。

俺だけ計画がない。午後からの予定は完全にフリー。

尤も、こつやつて時間が出来たのだからまた鈴姫と里の中をのん  
びりと歩いたりして過ごすことになるだろうが。それもいいだろう、  
これと言つてやることも特にない。

「よし、じゃあ食べ終えたことだし出発しようか」

「よつしゃ！ ほな行くで！」

「ちよつとつてレベルじゃねえぞ……コレは」

「ハハハ……」

「はひっ……はひっ……」

疲れた顔色を浮かべて呟く久國。乾いた笑い声を漏らし苦笑いを浮かべる智、犬の様な呼吸をし今にも倒れてしまいそうな明典。

智に騙された。ちよつと、と言うから一時間程度で行ける場所だと思っていた。だが実際はそれ以上の時間を費やす程の長距離。

旅館を出てからまず駅まで向かって歩くこと三十分。そこから電車に乗ること五十分、七つ目の駅で下車しそこからバス停よりバスに揺らされること約二十五分。

ようやく着いたかと思えばそこはまだ目的の場所へと続く入り口で。他の観光客に混じり、簡単な案内板と注意書きの札が立てられた自然道を歩くこと約一時間。

やっこの思いで目的へと辿り着くことが出来た。

二時間以上の時間を費やして向かう場所がちよつとと表現する智の感覚が可笑しい。

体力のない明典は既に限界。先程から無言でただただ乱れた呼吸を必死に整えようとしている。

智も明典と同じく体力は俺よりもないが、目的の場所へと行く想いが原動力となっているのか、頬に一筋の汗が伝うだけでそんなに疲れた様子は見られない。寧ろその顔はとても生き生きとしている。幾ら二人より体力がある方だと言っても、ここまでの道のりは流石に堪えた。

「ここが龍門の滝か……」

落差約二百メートル前後、滝幅二十メートルと言ったところか。

大きな滝が轟々と音を立てて勢い良く下へと流れ落ちている。

真夏の暑さは感じない。流れ落ちる滝によって涼しい空気がこの場を包んでいるからだ。

……ここがパワースポットと言われる理由が、何となくだがわかる気がした。

清川神社や風練の山に行ったが、ここはその二つにはない神秘的な何かを感じる。

禍々しくもなく、この場に立つだけで自然と心が安らいでいく心

地良さ。こう言うのを聖域と言っただろうか……。

「ところで……さつきから気になってたんだけど、何で久國は木刀を持ってきたんだ？ その袋に入ってるのって木刀だろ？」

「ああ、一応な。昨日の風練の山みたいな不祥事トラブルが起きても直ぐに対応出来るようにってな、護身用だ護身用」

右肩に提げている竹刀袋を指摘してくる智に久國は答える。その答えに納得したように智はなるほど、と呟く。

昨日あんな出来事があれば、流石に用心はする。幾らここが妖怪ではなく龍が住んでいる場所だとしても、やはり心の何処かで武装しておこうと言う気持ちがあった。

……祈る必要はない。だが念の為に、龍と闘うようなことがないようにと心の中で祈る。

「じゃあ俺、早速行ってくる。二人はそこで待つてくれ」

そう言うて智は鞆から大き目の水筒を取り出すと、観光客の後ろに並んだ。この龍門の滝の水をここで味わうことは勿論、家に持って帰るらしい。持って帰るのは勝手だが、賞味期限……以前に衛生上大丈夫なものなのか。他人事とは言え、心配になる。

「おい明典、お前大丈夫か？」

返答はなく、ただ手を横に力なくヒラヒラと振って答えた。どうやらまだ疲れが取れ切っていないらしい。もう少し男として体力を作るべきだと思う。

そんな様子に呆れ顔を浮かべて溜息を漏らす久國。

「全く……ッ」

不意に、視界に何かが映る。

流れ落ちる滝      その向こう、何かがいる。

ハッキリとした姿は、流水のカーテンによってわからない。だが、人の形をしていることだけは辛うじて理解出来た。そしてハッキリとわからない何かと、今こうして目と目が合っていることも。

あれがこの龍門の滝に住んでいると言う靈獣      龍なのか。

久國は己へと向けられている眼に対し視線を逸らすことなく、静か



に見据え返す。

どれだけの時間が経過したか、気が付けば流れる滝の音も観光客の賑わう声も耳に入ってこない。静寂。無音の世界の中、滝の裏側に潜む何者かと目を合わせ続ける。

「お待たせ」

不意に智の声と肩に手を置かれた感触が伝わる。それにより無音だった世界に再び音が鳴り始め、元の世界へと戻ってきた。

「どうしたんだ？　滝の方をジッと見つめて。何か居たのか？」

「いや……」

智の言葉に答えた後、もう一度滝の方へと向く。

そこにはもう何も居ない。

……気のせいかな。しかし今確かに、何者かの視線と己の視線を交えさせていた感覚はあった。やはり先程の視線は、この滝に住む龍だったのかもしれない。姿を見せなかったのは、こんなにも観光客がいるからか。

こんなに大勢の人間の前で己の姿を見せるほど、龍も愚かな生き物ではない。

それにこの事が世間に知られば、それこそテレビ局が黙っていない。随分と昔、数年ほど前に放送されていた水曜スペシャル『樋口探検隊』が再び放送される可能性だってある。そうなれば龍もこの場に落ち着いて住んでいられなくなる。

姿が見られないことは非常に惜しいが、縁があればまたこの地を訪れて今度こそはこの目に龍の姿を映したい。

「それじゃあ帰るか。おい明典、お前まだへバツているのか？」

冗談を抜いて少し体力作りをしる」

「そうそう。さあ、早く行こう」

心底嫌そうな顔を浮かべる明典。だがそれを放って智と来た道に戻る。

もう一度二時間以上もの時間を掛けて戻るのは憂鬱だが天儀町に宿へと戻る為には来た道をもう一度歩かなくてはいけない。それ以

外に帰れる方法はない、当たり前のことだ。

待ってくれ、と掠れた声を出しふらつきながら追いかけてくる明典を背に、久國は再び真夏の暑さをその身で感じながら来た道を戻った。

「きゃっ」

「っと」

一人の女性と肩がぶつかる。

「すいません。大丈夫で……」

「」

思考が停止する。

「あ、はい。私は全然大丈夫です。私こそ申し訳ありません、少し余所見をしていたので……」

肩がぶつかったことに対して女性も謝罪の言葉を述べてきた。だがそんな事はどうでもいい。

見惚れる、とは正にこのことだ。鈴姫も美風も可愛い、だがそれは子供としての可愛さ。目の前にいる女性は大人としての可愛さ、美しさを兼ね備えていた。

女性を象徴する豊満な双丘。綺麗な蒼の瞳に痛みのない綺麗な銀色の髪、セミロングスタイルなのがよく似合う。

抜群のスタイルを兼ね備えた、正に完璧な女性。

ただ気になったのはその格好。この平成の時代、特に日本では非常に珍しいとも思えるチャイナドレスを身に纏っている。翡翠を主体とした布地に龍の刺繍が入ったデザイン。そして切り込みが深く、白く綺麗な細い足が露出されている。

この服装では少し足を大きく動かしただけで下着が簡単に見れる……もとい見られてしまう。そんな羞恥心を彼女は持ち合わせていないのか……。

でも羞恥心があれば、こんな目立つ格好人前では絶対にしないか。営業ならばまだしも私服として着るなんて物凄く勇気のいることだと俺は思う。

「えっと……大丈夫ですか？」

「えっ！？ あ、はい！ 俺は全然大丈夫です！」  
慌てて答える。

そんな様子が可笑しかったのか、女性はクスクスと可愛らしい笑い声を漏らす。

「貴方もこの龍門の滝に観光ですか？」

「ええ、まあ今観光し終えたばかりでこれから帰ろうとしてたところです。貴女はこれから？」

「はい、ここは私のお気に入りの場所でもあるんですよ。」

……ここは古来より龍が住まう神聖なる場所。龍の放つ気で満ちたこの場所は聖域と化し、滝と成り流れ落ちる水は万物に恩恵を与え悪しき厄を払い落とす。

数年前に一度来た事があるんですけど、何も変わってなくてホッとしました」

「ふゝん。龍……ですか」

「……その、龍はいないと思われていますか？」

何故か落ち込んだような表情を浮かべた女性。

この女性も智のようにそう言った幻想の類を信じている人間なのか……。だとすれば、今の発言は幻想の類に対しバカにしているように捉えられてしまったかもしれない。

「いいや、信じてますよ。もう色々と超常現象に巻き込まれているんで、だから龍がいるって言われても信じるしかないんですよ。まあ、この世には『絶対』と言う事はありませんからね。今でこそ幻想として認識されてますが、何らかの出来事があってそれを人間が見たからその存在を形として残して現代まで伝えられてきた、と俺は思ってます。だから信じますよ、龍がこの滝に住んでいるってことに」

嘘は言っていない。現に龍と思わしき存在を滝の裏側に居たのをこの目で見たばかりなのだから。形は人の形をしていたが、それでもあれは間違いなく龍だと断言出来る自信がある。

「そうですか」

その答えが嬉しかったのか。女性は嬉しそうに笑みを浮かべた。  
この程度のことと喜んでくれるのなら、俺もそう答えた甲斐があったというもの。

「これも何かのご縁。もしよろしければ、貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

私は彩華<sup>あやか</sup>、と申します」

「名乗られたら名乗り返す、常識だな。俺は久國、華御 久國です。呼ぶ時は出来れば苗字じゃなくて名前の方でお願いします」

「久國……さん。とても良いお名前ですね。それになんだか、刀みたいなお名前」

「よく言われます、ええ」

彩華も他の連中同様の感想を述べてくれる。

そんな彩華と暫く世間話を交わした後、ふと智と明典のことを思い出す。

視線を向ければ二人との距離が大きく空いていた。

「彩華さん、俺そろそろ行きます」

「ええ。またすぐにお逢いするでしょうけど、道中お気を付けて

……」

久國は彩華に軽く頭を下げた後、どんどん先に行く智とゲームや映画に出てくるゾンビの様な緩慢な動きで追いかけていく明典の後を追いかけた。

一時間後、ようやくバス停へと辿り着く。

ベンチに腰を下ろし一息吐く。明典は完全に沈黙し、何を話しかけても喋らなくなってしまった。その代わり、鋭い眼をある物に向けている 智が手に持つ大きな水筒だ。この近くに自販機やコンビニと言った店は何処にもない、従って水分を補給しようにもすぐに購入できない。だが、その場で飲める水がたった一つだけあった。それが智が龍門の滝より持ち帰った水。

「智、ちよつとやれよ。このまま脱水症状を起こしてブツ倒れら

れたりでもしたら後が大変だぞ」

「仕方ないなあ……」

洪々と水筒のコップに龍門の滝の水を注ぐ。

……何度も思うが、衛生面の方は果たして大丈夫なものなのか。

自分が飲む訳ではないが、それを飲んで腹痛でも起きた場合その負担が掛かるのは言うまでもなく俺達。

可能性を考えて飲むのを抑制させるべきなのだろう。だが智がコップに水を注いだ途端、それを奪い取るようにコップを掴むと一気に口へと運ぶ。

コップを満たす水を大きく喉を鳴らしながら体内へと取り込む明典。

もうこうなってしまうては、結果が凶と出ないことを祈るばかりだ。

「どうだ？　少しは元気出たか？」

「……………」

水を飲み干し、明典は力なく手を横に振るう。

……どうやら龍の氣で満ちた水を飲んでもダメらしい。人によって効果が表れたり表れなかったりするのだろうか。

不意に遠くからエンジン音が聞こえてくると共に、バスがこのバス停に向かってくる姿が見える。

「あつ、バスが来たみたいだな」

「こっから更に一時時間以上も時間掛かるって思うと……憂鬱だな」

智と会話をしながら、もうすぐ到着するバスを見つめる。

……不意に、右ポケットに違和感が走る。

「……………あれ？」

ない。確かにさっきまであった筈の財布が何処にもない。

そんな馬鹿な、と辺りを見回すが何処にも落ちていなかった。

当然だ。財布にはチェーンが取り付けられている。そのチェーンをズボンのベルト通しに引っ掛けているのだ、通常ならばこのチェ

ーンが外れない限り落ちることはまずあり得ない。  
だが、あり得ないことだが現に財布はポケットより消え失せている。

いつたい何時、何処で。記憶を頼りに財布がなくなった原因がな  
いか思い出す。

……一つだけ心当たりがあつた。

あの時、彩華とぶつかった時。それしか思い当たる原因がない。  
それによく思い出せば、彩華は意味深なことを口にしていた。ま  
たすぐ逢うだろうけれども、と……。まさか彼女が？

信じたくはないが、可能性としては充分に考えられる。

また縁があれば何処かで出逢うだろう、と言つたのならわかる。  
だが彼女は明らかに今日中にまた、それも直ぐに逢うことになる  
と言つていた。普通ならこんな事は絶対に言わない。

やはり、彩華が俺の財布を盗んだのか……。

「どうしたんだ？ 久國」

「……先に帰つててくれ。財布を何処かに落としてきたみたいだ」  
「えっ？ だつたら俺達も一緒に」

「いや、俺一人でもいい。体力のない人材が来ても返つて足手纏い  
になるだけだ。それに……そんな満身創痍一步手前のヤツなんか連  
れて行つて、それこそブツ倒れられる方が大変だろ」

「……う……わ」

掠れた声で言葉を返してきた明典。恐らく、うつさいわ、と言  
ひたかつたのだろう。

早く旅館へと連れ戻して休ませた方がよさそうだ。「冗談抜いて倒  
れられたりでもしたら困る。

「……わかつた。じゃあ気を付けて。俺は明典と一緒に先に戻つ  
てるよ」

明典はグロッキー状態。だが智は……多分、俺の言葉を本質を理  
解した。ただ無くした財布を捜すだけじゃないな、と。此方の目  
を見つめる智の目がそう俺に尋ねていた。

俺はそれに答える。口ではなく、目で答える。

そうだ、と言う意味合いで送ったアイコンタクト。ただ目を少し細めただけが、それだけでも智には充分に伝わったらしい。

観光目的でこの龍門の滝を訪れた乗客者と入れ違うようにバスの乗り込む二人。

窓際の席に座った智が小さく頷き、その後ろでは明典がグツタリとした表情で背凭れにグツタリと凭れ掛かっている。本当に大丈夫かと心配になってきた。

そんな明典達にヒラヒラと手を振り、やがてドアが閉まりこの場より離れていくバスを見送った後一件のメールが届く。

智より。何かあれば直ぐに連絡しろ、と。

すぐに返信する。

夕食までに戻らなければ警察に電話して欲しい、その一言を打ち込み送信が完了したのを確認して、もう一度龍門の滝へと続く自然道へと足を踏み入れた。

二人が居ない方が俺にとっても助かる。財布を無くしたのは事実、だがこの先に待つのは財布探しだけではなく一悶着が一緒になって待ち受けている。それも、かなりハードな。

そうなった時、三人で探すという行為はあまりにも危険だ。

俺一人ならまだしも、戦力外の二人を護りながら対処するということは不可能に近い。そうなった時確実に俺達は全滅する。

小狐丸鈴國を持ってきておいた事は、どうやら吉と出たようだ。

いや、使う必要が出てきたことは凶として捉えるべきかもしれない。いずれにせよ、財布がないと非常に困る。中にはレンタルショップの会員カードや診察券などと言ったカードを沢山入っている、悪用される前に早く回収しなくては。

再び龍門の滝を目指して久國は走る。

彩華は何者なのか。外観は完全に人の形をしているが、やはり中身は妖怪なのだろうか。そんな事を考えながら、ただ自然道を駆け抜ける。

……可笑しい。

自然道を走ること数分、俺はある違和感に気付いた。静か過ぎるのだ、それも異常な程に。一度目智達とここを通った時は自分達以外の観光客の姿も見られた。だが、その観光客の姿が全くない。

何人が龍門の滝より戻ってきてても可笑しくはない筈だ。それなのに誰とも出会う事無く、ただ一人静寂が支配する中龍門の滝へと近付いていく。やはり、これは凶と見た方がよさそうだ。

彩華と出逢った場所へと辿り着く。

まずはそこで探索を行う。木の裏や草むらの中、落としたと思われる場所全てを人念に調べる。だが、財布は見つからない。

既に誰かに持ち逃げされてしまったか、それともやはり……彩華が持っているのだろうか。嫌な方向へと物事を考えてしまう。

ふと、人の気配を感じる。

龍門の滝へと続く道、その先へと走り去っていく何者かの後姿。

先程まで人の気配はなかった。それに今の感じ、まるで此方を監視し、俺が気付いたことに慌てて逃げていく様にも見えた。そしてあの後姿、一瞬しか目に映らなかったがチャイナドレスだった気がする……。

「彩華さんか!？」

久國はその後を追いかけて、龍門の滝を目指す。

やはり彼女が……、そんな思いを抱きながら逃げていく何者かの後を追って走る。

「ッ！」

龍門の滝へと辿り着く。

違和感はそこでも待ち受けていた。あれだけ沢山いた筈の観光客の姿が何処にも見当たらない。

来る途中誰かとすれ違うことはなかった。この滝の出入り口は今通ってきたこの道以外にない。そして彩華、と思わしき人物の姿も見当たらない。



彩華は……他の観光客達は何処に行ってしまったのか。そう考えていた、刹那　それは目の前に現れる。

歴史の教科書で見たことがある。

確か、記憶に違いがなければ秦の始皇帝陵とされる最高峰の世界遺産。

一年か二年ぐらい前、考古学をしている主人公が中国を訪れてそこで激しい戦いの渦に巻き込まれる、と言った映画もあった。

その映画にも登場したのが兵馬俑坑。そこには墓を護る為に造られた傭……陶製の人形がズラリと並べられている。その人形が今、水の中から次々と姿を現したのだ。

一体一体が槍や剣で武装し、ゆっくりと此方に向かってきている。傭は各々表情や服装が同じではないと記憶している、だが目の前にいる傭は皆武装し阿修羅の様な殺気の籠った表情を浮かべている。何ともわかりやすい。小さく口元を緩めて、肩に下げていた竹刀袋より木刀を取り出す。

抜刀。俺の声に応え木刀は真剣へ、小狐丸鈴國へと姿を変える。

向かってくる人形。数は三、この天儀町にて初めての一对多の戦闘となる。

久國にとって多人数相手に闘うというシチュエーションは初めてのことであった。

普段父との試合、一对一の戦いを主体として修練を積んできていたのだ。

多人数相手を想定しての戦いは全て想像上の相手。そんな修練を積んだところで実戦を行った時上手くはいかない。全て自分の想像によるものだ、本当の多人数相手の戦いなら敵はもつと複雑な攻撃を仕掛けてくる上に多数ならではのコンビネーションも繰り出してくる。

大事なのは周囲の状況を常に把握しておくこと。そして一体の相

手に多くの時間を費やさず、迅速を以ってして打ち倒すこと。

父の言っていた言葉をよく思い出し、頭の中で復唱し、中段の構えを取る。

……この天儀町に旅行目的で来ている筈なのに、これでは家で訓練しているのと同じだ。そんな愚痴を心の中で零しつつ、向かってくる人形達を見据える。

「まあいい機会でもあるか。いつかは多人数相手とも戦わないといけないかなあ、と思ってた所なんだ」

圧倒的不利な状況。

だが、久國は嗤っていた。不敵な笑みを浮かべて、抜き身の太刀の切先を兵士達に向ける。そして一言、

「来い」

一斉に向かつてくる人形。

落ち着け。まずは自分よりも近い敵を斃すことに集中する。

一撃離脱を考え、敵に囲まれたりするのを避けつつ戦う。

久國は地を駆ける。

正面の敵、距離は凡そ二メートル。得物は槍、長さ約六尺…二メートル前後。

槍の特性は広い範囲での斬る、突くことに特化していること。リイチの長さでは太刀よりも断然有利。だが間合いを詰めればそのリイチが仇となる。

斬撃か、それとも突きか。距離を詰めつつ久國は相手の出方を見据える。

相手が動く。手にした槍、その穂先は正面を向いている。繰り出されたのは、相手を一撃で仕留めんと心臓目掛け放たれた鋭い刺突。……相手を侮っていた。

人形である以上緩慢な動きしか出来ないと思い込んでいた。

だが実際は、その機能は人間よりも遥かに高く作られているらしい。繰り出された突きも達人並かそれ以上。

でも特に何の問題もない。久國は避けることをせず、更に一歩足

を前へと踏み出す。

穂先との距離はもう目前。瞬きをした時には、白銀に煌く鋭い穂先によって心臓は穿たれている。しかしそれを、久國は身体を捻ることで回避した。

紙一重の回避、心臓という標的を外した穂先は衣服を掠めるという結果に終わる。

同時、無防備な状態となっている傀儡の頭部に太刀を打ち落とすた。

小狐丸鈴國の刃は兵士の頭部、中心から下まで一気に切り裂き両断する。縦に分かれた人形の身体はそのまま左右に倒れ緑色の焰に包まれて消滅する。

二体目、左。距離凡そ三メートル。得物は直剣。

三体目、右。距離凡そ三メートル半。得物は双剣。左右より同時に向かってくる。

厄介なシチュエーションが久國の前に立ちはだかる。

敵は二体。そして双剣を得物としている兵士の速度は、直剣を持つ兵士よりも僅かに速い。その速さならば直剣の兵士が間合いへに入るかその直前、双剣の兵士もそれとほぼ同時に合流するだろう。つまりそうなった時、二人一斉による攻撃が繰り出される。

いや、一斉による攻撃とは限らない。一体が攻撃しそれを此方が反撃、或いは防御に出た所をもう一体が仕留めに入る。と言ったコンビネーションかもしれない。想定できる攻撃方法は様々だ。それをどう見切り、瞬時に攻撃へと切り替えられるかが今回の勝機を掴むポイント。

間合いが縮まっていく。

間合いへと入る直前、二体の人形は予想通り合流。二人同時による攻撃を仕掛けてくる。

直剣が動こうとしている。双剣の刃は空を切らず、上空で停止しているまま。

やはり此方が最初の一撃に対応したところを狙って迎撃しようと

するつもりらしい。

直剣がどう振り下ろされるのか、これを見切りどう対処するかによって生きられるか、それとも無様に死を晒すのかが決まる。

さてどうするか。刹那の間、久國は瞬時にその答えを導き出す。

防ぎ、回避してから反撃では双剣による迎撃を受ける。

“普通”の避け方ならば迎撃を受ける。ならば……。

間合いに入る。直剣は横一文字、胴を目掛けて中空を切る。敵の攻撃は目前まで迫っている。それでも久國は地を駆ける足を止めない。

地を駆けるその勢いを利用して下にしゃがみ込むと地面を滑った。サッカーで言うスライディング。砂利が多い地面は足と臀部に痛みを与えるが敵の攻撃を受けて致命傷を受けるよりは充分にマシだ。胴を狙って薙ぎ払われた剣は髪を撫でる。そして人形の足元を滑り抜けると同時に、足首を狙い手にした太刀を内に一気に薙ぎ払った。ざん、と言う音と共に両断される兵士の両足首。地に立ち身体を支える足が切り離されたことでバランスを崩しそのまま前へと地面に倒れる。流石にこう言った回避方法を取ると思っていなかったのか、双剣を手にした兵士の動きが鈍る。その隙を、久國は見逃さない。

刀を素早く左へと持ち替え、滑る勢いを殺さず利用し右手を軸にして素早く身体を起こすと、一気に間合いを詰める為に駆け抜ける。迎撃しようと双剣が動く。しかし遅い。

右足を大きく一步前へと踏み出し逆袈裟。右肩から左脇へ、傀儡の身体を止まる事無く走った一閃は容赦なく両断する。

緑色の焰に包まれて消滅する人形。それを見届けた後、立ち上がろうとしている直剣の兵士の延髄を狙って静かにその切先を落とす。延髄から喉仏を通って飛び出す刃。貫かれたまま燃え上がり跡形もなく消滅した。

「ふう……何とかなったな」

斃したことを確認してから一息吐く。

役目を終えた小狐丸鈴國は元の木刀へと姿を戻る。

初めて経験した多数との戦闘。

一体一体の戦闘能力は決して低くは無かった。ただ昨日手合わせをした烏天狗に比べれば、その動きはあまりにも遅いし腕も未熟。第三者からすれば人形達の動きはとてつもなく速く見えたかもしれない。だが、此方からすればあの程度の速さ見切ることなど容易い。

いずれにせよ、敵は斃した。今の人形達が何だったのか、そこまではわからない。

けれども今はそんな事よりも財布、彩華だ。

彩華を探しどうして逃げたのか、財布を見かけなかったか尋ねなければならぬ。

それに財布がなければ帰ることも出来ない。早く探さなければ。

龍門の滝の周囲を調べる。水の中、草むらの中、探せられる範囲全てを探す。

しかし、どこをどう探しても財布が出てくることはなかった。

彼女の名前を大声で呼んでみたりもする。その声に戻ってくる言葉はない。

「まいったなあ、マジでどうする……」

「……お見事です」

どうこの状況を打破すべきか考えていた時。彩華の声が何処から聞こえてきた。

辺りを見回す。

轟々と音を立てて流れ落ちる滝。その滝の裏側に人の形をしたシルエットが映っている。

それはここを訪れて、龍と思わしき何かと視線を合わせていた

あの時と同じ光景。

滝が独りでに縦に分かれる。その向こう、小さな洞穴とその入り口に立つ彩華の姿があった。

なんとも悲惨な世界だった。

滝の裏側、絶えず流れ落ちる水のカーテンによってその存在を隠されていた洞穴。

その奥、色々と問題はあるが平和なこの日本の中とは思えない程の世界がそこにあった。

まず最初に大きな湖が視界一杯に広がる。その湖の上を浮かぶ小さな島々。

島の上には建物が建っている。デザインは中国、それも随分と昔の。漫画やテレビで見た三国志に出てくるような感じ、質素で民が暮らしているような家が何件か建っている。木々は枯れて緑が全くと言っていい程ない。

その中で大きな建物      家の道場ぐらい程の建物の中に案内される。

「粗茶ですけど、どうぞ久國さん」

「あ、どうも……」

立派な屋敷の一室。客間と思わしき部屋で彩華と二人、向かい合う様にして座る。

そして周りには十数人以上の老若男女様々な人が取り囲んでいる。皆中国風の衣装に身を包んでいた。

八方から突き刺さる視線、見世物じゃないぞと言いたい気持ちを抑えながら彩華に差し出された緑茶を啜る。市販で販売されているペットボトルの緑茶よりも美味しい、と感じたのは錯覚か。

そんな緑茶を二口程啜って、本題へと切り出す。

「え」と、もう単刀直入に尋ねますけど……彩華さん、龍ですよ  
ね？」

「……はい。久國さんの言う通り、私達は古来よりこの滝に住まう龍神一族の者です」

やっぱりか、そう呟いた後湯飲みに注がれた緑茶に口を付ける。

「まあ何となくそんな気はしてたから、これと言って驚きませんけど。それで、その龍神一族である彩華さんは、どうしてあんな事をしたんですか？」

先程の一件。あの水の中より現れた人形達について、彩華に説明を求めた。どうして俺を試するような真似をしたのか……。

「まずは非礼をお詫びします、どうか許して下さい。ですが、どうしても貴方のお力が必要なのです」

そっと、机の上にある物が差し出される。

見覚えの……いや、見たことがあつて当然。財布だ、無くしたと探し続けていた俺の財布が目の前に置かれる。やはり財布を盗ったのは彩華、その目的は金銭目当てではなさそうだ。

念の為に中身を入念に調べたが、特に可笑しい部分は見つからない。盗られる前と同じ状態である。携帯電話のメールアドレスと思われる物が記された紙が入っていること以外は……。

最近では龍も現代科学の技術を使うようになっていいのか。龍が携帯電話を片手にメールを打ったり電話をする……想像出来ない。

「？ それはどう言う意味ですか？」

「それについては、我が説明しよう」

一人の中年の男が入り口より姿を現す。

男は中華風の衣装を身に今取っているが、他の龍達と比べてそのデザインは高貴さを現している。そしてそんな衣装を纏っている男の身体にはほぼ包帯が巻かれていた。腕や右目を覆うようにして巻かれた包帯。その姿は見ていだけで痛々しと思わせた。

その男が現れた途端、彩華とのやり取りを傍観していた者達はその場に跪く。それは彩華とて例外ではなかった。

皆の反応からすぐに理解する。皆が跪く程の高位に立つ、即ちこの男は龍神一族の長的な存在であるのだと。

椅子から立ち上がり、男に向かって小さく頭を下げる。それが礼儀というものだ。

「我は龍神一族の王、龍王である。まずは我からも非礼をお詫びよ

う。しかしお主を試したのには理由がある。その理由とは、お主の腕と勇気を見込んでどうか我等を救って欲しいのだ」

……話が随分とスケールアップした。

「今から三百年程前のことだ。突然一匹の妖怪がこの場所に姿を現した。その妖怪は次々と我等の同胞を喰らっていきおった。無論、我等とてただ指を啜えて見ていた訳ではない。しかしその妖怪はあまりにも強く、王である我とてヤツには歯が立たなかった。龍王である我もこの有様だ。奴を斃すことは不可能、ならばと我等は持てる力全てを費やし奴を封じ込めることに成功させた。我等の元住処と共に……」

「住処？」

「この湖の下です」

質問に答えたのは竜王ではなく彩華。

「本来私達の住処はこの湖の下にあります。しかしあの妖怪が攻めてきて、私達は住処もろとも妖怪を封じ込めました。この湖は妖怪が表へと出てこれないようにする為の蓋、その蓋が壊されないように私達は今も尚全てを力を使い結界を護ってきているのです」

「しかしこのままでは拉致があかぬ。それにいつこの封印が破られるかもわからん。奴を屠らぬ限り我等に明日はない。数多く居た同胞達も今ではこの数、このままでは我等は死に絶え、奴をこの世界へと解き放ってしまう。そこで……」

「俺にその妖怪を退治しろ……ってことですか？」

そうだ、と龍王が答える。

話のスケールが大きすぎる上に無理難題過ぎる。

どんな妖怪なのかは知らないが、相手は龍神一族の者は勿論のことと龍王ですら勝てない程の力を持っている妖怪。その妖怪を人間である俺が斃せるとは思えない。

それに、どうして妖怪退治を依頼する相手が俺なのかがわからない。

「一つ……聞いていいですか？ 依頼云々は兎も角、どうして俺



を？」

「貴方が龍門の滝を訪れて、そこで貴方の目を見た時普通の人間にはない強い力を感じました。そして私達が差し向けたあの傀儡達にも臆することなく立ち向かい斃した。」

「お願いです、私達は貴方を強い武士とお見受けして、どうか妖怪を退治し我等を救って下さいませんか？」

「我からも頼む、人間よ」

彩華、龍王に続き他の龍達も頭を下げる。

龍とは聖なる靈獣。その靈獣達から頭を下げられている。龍ですら敵わなかった妖怪を、俺が退治してくれると……本気でそう思っている。

お断りだ、とここでハッキリと断るのが普通だ。

あまりにも分が悪過ぎるからだ。龍ですら勝てない相手と闘えと言われて、その言葉通りに従って闘う人間がいたいこの世界の何処にいるのだと言う。

勝てる見込みがないのに挑むヤツはただの粹がり、バカのすることだ。

これは絵本やゲームの中ではない、雑魚敵を斃してレベルを上げたり強い武器や防具を購入して闘いを挑む仮想の出来事とは訳が違う。

しかし、ここまで頭を下げられて頼まれているのを無情にも断ることは出来ない。

別に正義の味方でもないし、悪者を斃して英雄にもなりたいとも俺は思わない。これから行うのはボランティアと同じ。それでも俺は……このまま彩華達龍神一族を見捨てて行く事は出来ない、何よりこのまま立ち去れば後味が悪過ぎる。

「このままバイバイって訳にはいかないからなあ。まあどこまで俺がやれるのかはわからないけど、全力を以って挑んでみます」

ただの人間である俺を彩華達は必ず斃してくれると信じている。なら俺は、それに応えてみせよう。

それに俺には最高の相棒とも言える小狐丸コイッがある。鈴姫よる渡されたこの太刀と魔を抜う蒼き狐火があれば、如何なる妖怪をも地に伏すことも可能である筈。

後は父より受け継いだ剣を、技を、そして己を信じるのみ。

烏天狗との戦いにも俺は勝ったのだ。

大丈夫、今回の敵も絶対に勝つ。負けはしない。

そう答えると、暗かった龍神一族達は皆明るい表情を浮かべる。

龍王も満足そうに頷き、彩華からは何度も有難うと感謝の言葉を述べられる。

そう言うのは全てが終わってからにしてほしい。まだ俺はその妖怪に勝つてもいなければ闘ってもいないのだ。果たして、龍すらも歯が立たないとされる妖怪とはいったいどんな妖怪なのか。

まずどんな相手かを知る為に、龍王に尋ねることにした。何事も情報収集は大切である。

「龍王、ところでその妖怪って言うのは？」

「うむ。我等龍神一族ですら太刀打ち出来ぬ大妖怪。ヤツの正体

は

「た、大変です！」

突然一人の男が慌しく入ってくる。

この男も龍神一族の者なんだろう。衣装は陰陽師の様な服装を身に纏っている。更に続いて同じ格好をした別の男が慌しくやってきた。

二人の様子からして只事ではなさそうだ。

「何事だ！？」

「ふ、封印が破られました！」

「現在、此方へと向かって来ております！　すぐに安全な場所へ！」

タイミングが良すぎると思うか、何と云うか……。

ゲームならここでセーブや武器やアイテムの購入が出来たりするが、残念なことにそんな寄り道はない。行動せずにジッとしていれ

ば即刻バットエンド行き、それが現実だ。依頼である討伐対象は此方に向かつてきているとのこと。もう後戻りは出来ない。

抜刀、と口にし木刀なげから小狐丸鈴國を払う。それを手に久國は外へと出た。

一面に広がる湖。水面を除けば透き通る青の中を蠢く黒い何かが視界に映る。

大きい……。清川神社で闘ったあの半人半牛の妖怪よりもずっとあの妖怪のサイズが可愛いと思えてしまいうぐらい、今回の相手は大きく……。そして長い。

得物を握る手が自然と強まる。

嫌な汗が額より流れ、辺りは静寂が不気味に流れている。

快晴だった空はいつの間にか暗雲が覆い始め、やがては激しい雨を地上へと降り注ぐ。雷鳴が轟き、稲光が煌く。静かな水面が大きく荒れ大きな渦がそこに生まれる。

渦の中より現れる、龍神一族を苦しめ長きに渡り結界により封印されてきた妖怪がその姿を現す。

意外と言えば意外。その妖怪は身近な所で目にするものだった。

地を多数の足で這い、鼠すらも餌として捕食する獰猛な生き物。

その不気味な見た目に加えて人間ですら天敵として認識する程の存在。噛まれた人間なら、その怖さは充分に理解出来よう。そんな存在が今、渦の中より姿を現した。

そのサイズは想像以上。通常のサイズで二十センチぐらい、外国には最大四十センチにを超えるものもいるという話をテレビで見た記憶がある。

これだけでも充分不気味だと言うのに目の前のソレはその何十、何百倍もの大きさを誇る。何百……いや何千メートルという巨大さ。特撮ヒーロー番組の定番として出てくる巨大ロボットですらその大きさはせいぜい十数メートル。怪獣やロボットが可愛く思えてしまう程。

光沢のある黒い皮膚、それはまるで如何なる刃も通さない頑丈な

鎧のようにも見える。最強の鎧と、最強の刃をソレは持っている。刃となる牙、全てを噛み砕く強靱な顎、そして獲物を確実に仕留める為の猛毒。三つの武器をソレは所持している。

噛まれた者はその患部に激しい痛みを憶えのた打ち回る、それが普通の場合。今回は普通ではない、妖怪だ。その妖怪である猛毒に犯された場合、普通通りにはいかないだろう。龍神達ですらも太刀打ちできない相手だ、ただの人間が噛まれれば即刻死ぬのはまず間違いない。

何千はあろう足を激しく動かして、黒く長い身体を天へと昇らせるその姿はまるで龍。もつとも、龍のように神々しい姿は一切していないが。

邪悪そのもの。神の力を持つ龍がどうして勝てないのかはわからないが、現れた以上は闘うだけ。

「来いよ化け物。頼まれた以上、俺はお前を斃さないといけないんだ」

小狐丸の切先を向ける。

妖怪が吼える。かち、かち、と牙を打ち合わせて、頭部に生えた長い触覚を忙しく動かして、妖怪 “大百足” は襲い掛かってくる。戦いの火蓋が切って落とされた。

久國は静かに大百足を見据える。その顔に焦りはない。

どんな妖怪が姿を現すのか、そんな不安を抱いていたが大百足…多足類の虫だ。虫ならば臆することなどない。幼少期に虫取りをして駆け回って遊んでいたぐらいだ。

問題は相手がどの様に攻めてくるか。

普通の百足ならば大した攻撃方法はしてこない。主な攻撃方法は素早い動きで獲物へと襲い掛かりその長い胴体を使って獲物を締め付け殺すこと。

しかし、一番の方法はやはり獲物に噛み付くことだろう。鋭い牙で獲物の肉を穿ち、その強靱な顎で獲物の骨ごと噛み砕き、そして逃げられるように猛毒を体内へと流し込む。これが百足という虫の

戦闘方法。

ただ今回の相手は百足は百足でも妖怪だ、それも龍すらも斃してしまう程の妖怪。

妖怪というぐらいだ。口から毒や火を吐いたりしても可笑しくはない。

どんな攻撃を仕掛けてくるかわからない。余計な手を出される前に討ち取る、これがベスト。

先手必勝。手にした太刀を手に向かってくる大百足を迎え撃つ。

正面からの迎撃は愚策。新幹線に正面から挑むのと同じこと。牙を打ち鳴らして襲い来る大百足の側面へと素早く回り込み、そして頭部目掛けて太刀を振り下ろす。

唐竹に打ち落とした小狐丸鈴國。その刃は大百足の頭部に直撃する。

確かに、白銀の刃は大百足を捉えた。しかし刃は通らず、その強固たる鎧の如き黒い皮膚によって受け止められていた。

攻撃が効かない。ならばと久國は強く念じる。

昨日、美風 楓との闘いで自身を助けてくれたように。今回もまたその助けが必要になった。鈴姫の力が宿る小狐丸鈴國、蒼き焰は魔を払う聖なる狐火。如何な相手であろうとも、この焰を受けて無事でいられる筈がない。

小狐丸鈴國から発せられる青い狐火。轟々と燃え上がり神秘的な輝きを放つソレを、久國は太刀を力強く振り払うことで大百足へと放った。狐火は宙を駆け、大百足の瞬きの間に包み込む。

激しく燃え上がる青い焰。全身を焰に包まれて、ましてや退魔の力が宿る焰だ。無事で要られる筈が無い。大百足も狐火に包まれ身動き一つ取ろうとしない。一瞬にして絶命してしまったか。いずれにせよ呆気なく百足退治は無事終わった。これで龍神一族も安心して暮らせるだろう。

だが、その考え通りに物事は進まなかった。

「なっ……」

狐火が消える。そこに居たのは黒く焼き焦げた姿は無く、対峙してから何一つ変わった様子がない姿の大百足がいた。

馬鹿な、と驚愕の表情を浮かべる久國。

驚くのも無理はない。あの焰に全身を焼かれていたというのに火傷一つ負わせられていないのだから。

驚きを隠せない久國に大百足の鋭い牙が襲い掛かる。

咄嗟に身を転がすことで、かろうじて大百足の牙を避けた。しかしそれだけで終わらない。茶番は終わりだと言いたげに、大百足は身を動かし立て続けに久國へと襲い掛かる。一撃でも喰らえば即死の攻撃、それをただただ必死に避け続ける。

「くっ……このっ!!」

スタミナが切れ始めた時、苦し紛れに太刀を振るう。

がきん、と金属音が鳴り響く。小狐丸と大百足の牙、中空で交わる二つの刃。

一方に輝が走る。音を立て、根元から切先に掛けて亀裂を走らせると、それは呆気なく砕け散った。

砕け散る“小狐丸鈴國”の刃。ただ呆然とした表情を浮かべる久國。

心の何処かで思っていた。この勝負、最初から勝てる見込みなどないということに。龍をも容易く斃してしまう程の大妖怪相手に妖狐の打った刀如きが敵うはずがない、……と。

唯一の得物は失われた。残された手段は徒手空拳……肉弾戦のみ。もつともこれも無意味に終わるだろう。俺の本来のスタイルは剣術、徒手空拳は言ってしまうばサブだ。メインのスタイルで勝てない相手にサブのスタイルで勝てる筈がない。ましてやこれは人間同士の喧嘩なんて甘い話じゃない。

万事休す……残された手は、もうない。あるとすれば……それは龍神一族を見捨てて自分だけ逃げるか、それともここで大百足の毒牙によって死ぬか。

大百足が向かってくる。この一撃で俺は

「冗談！」

逃げるなど最初から考えていない。

華御家に撤退の二文字はない。得物は失われてしまったが、闘う意思までも失われていない。

龍神一族の皆の交わした約束は決して破らない。見捨てて逃げることなど言語道断。

昨日の心眼に続いてのーか八かの賭け、それをせざるを得なくなつた。

妖怪相手に試したことはないが、それでも唯一残されている闘法は最早これしか残されていない。

「久國さん！！」

不意に彩華の声が背後から聞こえた。

同時に目の前に何かが上空より落ちてくる。

「それを使つて下さい！」

「これは……」

目の前に突き刺さるそれを見て、久國は戦いの最中であることも忘れてそれに見入っていた。

刀には色々な種類がある。一般的な長さである太刀または打刀、脇差に短刀、打刀と脇差の中間剣である小太刀。そして……これらの中で一番、打刀よりも長い刀は大太刀と呼ばれる。

今、目の前に突き刺さっているのはソレだ。

久國の身長は約五尺七寸、その身長よりも更に長い。

大方六尺六寸……大の大人の握り拳五つ分はあろう柄から先まで約二メートルはあろう。

更に長さだけでなく、その刀身の大きさも普通ではない。成人男性の腕と同じぐらにはある幅広と肉厚な刃。古代ローマで剣闘士達が振るっていたとされるグラディウスを日本刀化した、と表現すればわかりやすいだろう。そして刀身に彫られた樋の中に龍の彫刻があつた。

豪刀と呼ぶに相応しき大太刀。

久國は瞬時に理解した。この大太刀も小狐丸同様、ただの大太刀ではないと。

「助かったぜ彩華……ッ!!」

大百足が向かってきている。小狐丸と言う得物が失われた今、目の前にある得物を手にする以外他ない。久國は地面に突き刺さった大太刀を引き抜く。

二メートルはある大きさだ、その重量も本来の太刀に比べて重いものだと思像していた。しかし意外にもそれ程まで重さはなく……いや、まるで羽のように軽い。通常の太刀よりもこの大太刀は軽かった。

「行くぜ!」

向かってくる大百足。久國は大太刀を振るい迎え撃つ。

金属音が鳴り響く。

彩華より渡された大太刀の刃は小狐丸鈴國の時と同様、其の刃は大百足には通用しなかった。幸い折れなかったが、これでは大百足は仕留められない。

「……コイツだけじゃ駄目つか。なら、もうアレを使うしかないよな」

この大太刀にも何か小狐丸のような強い力を宿しているのではないか。そんな期待を抱き強く念じてみたもののそれは発現されず。それはただ単にこの大太刀自身にそういった特殊な力が備わっていないのか、それとも俺自身がこの大太刀に振るうに値する者として認められていないのか。

どちらにせよ、このままでは殺られる。この大太刀が力を貸してくれないと言うのなら、もう後は自分の力でこの場を乗り切る意外道はない。

この大太刀は小狐丸と違い耐久度もある。折れないということは非常に心強い。

久國は大太刀を構える。

左足を重心に大きく足を広げ、腰を捻り更に少し落とし、刀を担



ぐように 刃の側面が自身の後頭部と平行になるように刀を構える。

これから繰り出すは華御家に古来より伝わる剣、それも相手を一刀の元斬り伏せる一撃必殺の構え。

「お前に見せてやるよ、華御家に代々伝わる剣 “無双一刀流” をな」

相手を見据える。

牙を打ち鳴らしながら向かってくる大百足。その距離後八メートル前後。

七、六、五。

大百足との距離が縮まっていく。間合いが〇となるのももう後数秒。

それでも久國はその場から動こうとしない。ただ大太刀を構え、冷静に向かってくる大百足の姿をその瞳に映している。

四、三。

心の中に誓う。相手をこの一撃で斬ると。

揺ぎ無い信念と誓い、これが一番重要となる。少しでも己の剣に疑心を抱けば、そこでその剣は本来の力を失ってしまう。

だから疑うことを捨てた。この先、仮に失敗し己の命が散る運命が待っていたとしても。

必ず、俺の剣は敵を斬るのだと。魂に深く刻み込む。

二、一……

カツ、と久國の両目が見開かれる。

「無双一刀流『天斬剣』!!!」

それは何の変哲もない一撃。小狐丸のように狐火が発現されたり、美風 楓の持つ小烏丸のように風が発生したりしている訳でもない。必殺の構えから相手に目掛け一気に大太刀を振り下ろした、ただの袈裟斬り。

通常の斬撃では大百足の鎧のような皮膚には通用しない。

だが、繰り出された一撃は、大百足の鎧を砕きその身体を縦に切り裂いた。

古来より己の中にある生命エネルギーとも言える“氣”を用いる武術は数多く存在している。

久國の繰り出した無双一刀流『天斬剣』もその氣を用いての奥義。元より無流派だった華御家。ある時仕えていた戦国大名の下技比べが行われた。

その中で華御は大きさ二十メートルはあろう巨大な岩を一瞬の気合のもと両断したのだった。即ち、氣の力を応用して一刀を以って岩を切り裂いたのだ。いくら折れず、曲がらず、よく斬れるで有名な刀であれ巨大な岩を斬ることなど不可能。それは誰もが理解している。しかし華御はそれを見事実現させた。

更に戦場でその剣を振るい続け数多の敵を斃したことを称えられ、戦国大名より無双一刀流の名を貰い無名の流派から名を世間へと知らしめることが出来たのだった。

天斬剣もその内の一つ。お前の振るう剣は天をも斬り裂いてしまえいそうだ、と言われたのがこの技名の由来でもある。

その名に恥じぬ、正に一撃必殺の剣。それを、久國は見事成功させた。

何千メートルという巨体が、頭部から尾に掛けて一直線に切り裂いていく。そして尾まで辿り着き、完全に両断された大百足の身体は紅蓮の焰に包まれて跡形もなく消滅した。勝った、と理解した久國は大きな溜息を吐きその場に座り込む。

氣は生命エネルギー。氣とは無限に使える者ではなく、また使用した後に来るその疲労感も凄まじい。激しい運動をした後のように

全身から汗を流し、呼吸を乱れさせる。

だがそれよりも、久國は心の中で喜んでいた。

華御家に伝わる無双一刀流、そして天斬剣……成功するとは思わなかった。妖怪相手に、それも龍すらも斃してしまう相手に通じるとは思わなかった。

灯籠や岩なら成功していたが、実戦でこれを使うのは今回が初めて。その実戦で成功したことが嬉しくて仕方がなかった。

華御家に代々伝わる剣術、無双一刀流。その剣は大妖怪すらも一刀で斬り伏せられる、斬鉄など目じゃない。ただ、やはりそれもこの彩華が渡してくれた大太刀のお陰だろう。これに助けられたことも大きい。

手にした大太刀に視線を向ける。するとある変化が見られた。

それは刀身にある。樋に彫刻された龍、その大きさは約二センチ程度。しかし改めて見た大太刀の刀身、樋には根元から先まで掛けて……樋全てに龍の姿が彫られていた。

俺自身は何もしていない。ではこの怪奇現象は一体何を意味するのか、そう悩んでいた時今まで安全な場所に隠れていた彩華、龍神一族が駆け寄ってくる。

「久國さん！ ご無事ですか！？」

「ああ、何とか生きてる。約束通り、ちゃんと大百足の退治はしたぜ」

龍神一族から歓喜の声が挙がる。涙を流し抱きつきながら喜ぶ者や、何度もお礼を述べてくる者。彩華はいきなり抱きついてくると、顔を胸元に埋めて肩を震わせて泣き出す。

兎に角、皆大百足が退治されたことを心より喜んでいた。気が遠くなる程の長く続いた悪夢は今、ようやく龍神一族を解放した。

「まさか……アレを振るうに相応しい者が現れ、それを目にすることが出来るとは」

建物の一室、その窓から外の様子を見守っていた龍王は信じがた

いと言いだけな表情を浮かべて呟く。

彩華が持ち出したのは一振りの大太刀。

それは龍神一族に古来より伝わる宝刀、名を『小竜景光<sup>こりゅうかげみつ</sup>』。

いつの時代に、また誰の手によって打たれたのか。詳しいことは龍神一族はおろか龍王自身ですらもわかっていない。唯一知ると言え、先祖である龍王の位に就いた初代龍王ぐらいだろう。

ただ一つわかってしていることは、小竜景光は持ち手を選ぶということ。

自身を振るうに値する者ではないと判断すると、小竜景光はその柄を握らせることも許さない。龍王もその内の一人、柄に触れた瞬間鋭利な刃物で斬られたかのように柄を握ろうとした掌が裂けたのだった。

ただ不思議なことに女性が手にしても何も起こらない。あくまで対象となるのは男性のみ。何とも不思議な大太刀である。ある者は女好きな刀匠がこの刀を打ったからではないか、と発言したことに誰もがその説に納得していた。

しかし、遂にその小竜景光に認められた者が現れた。それも龍神一族の者ではなく、人間の少年である。

本当に信じがたい話だ。しかしアレに選ばれたのは事実。太刀を手に取り、強力な一撃の元あの大百足を両断したのだから。

「見事だ、よくあの大百足を退治してくれた」

歓喜の声を挙げる龍神一族達の中を進み、久國の元へと歩み寄る。

「龍王、何とか約束は果たせましたよ。この大太刀のお陰でもありますけどね」

「いや、確かにその小竜景光のお陰でもあるだろう。しかしあの一撃、凄まじい氣によって放たれたお主の一撃があの大百足を斃したのだ。その歳であれ程の一撃を繰り出すとは……相当な修練を積んだらしい」

龍王は小竜景光に視線を向ける。

先祖龍王より聞いていた話では、持ち手として相応しい者が現れ

た時樋に彫刻されてある龍は天へと昇るのだと、そう龍王は教えられていた。

少年の手に携えられた小竜景光。その刀身、小さな竜は樋全てにその姿を埋めるように彫られてあった。紛れもなく、華御 久國と言う人間の少年がこの宝刀に振るう者として認められた証だった。

「うむ、お主程の者ならば誰も文句は言わんだろう」

「えっ？」

龍王の言葉に不思議そうな表情を浮かべる久國。龍王は一人納得したようにウンウンと頷いていた。

「それじゃあ、コイツは有難く貰っておきます」

背中に背負った大きな布袋を親指で指し、久國は龍王に向かって言う。その言葉に龍王はうむ、と頷く。

大百足退治も終わり急いで宿へと戻ろうとした際、龍神一族の宝刀であるという大太刀小竜景光を龍王より渡された。大百足を退治した報酬として、小竜景光に認められた者として相応しいと判断してくれると言われた。

無論断った。

確かに、小狐丸鈴國が折れてしまった以上新しい得物が欲しい所だった。しかし一族が大切にしてきた宝刀を、幾ら大妖怪を斃したからと言って報酬として受け取るつもりなどない。

しかし龍王は引き下がらなかった。

どうしても、と彩華や他の龍神一族の面々から受け取って欲しいと言われた。

ここまで言われれば、逆に断る方が無礼と言うもの。だから有難く、心より龍王達の心遣いに感謝し小竜景光を受け取った。

小狐丸の件については、鈴姫に謝らなくてはいけない。

明日も多分……いや、確実に現れるであろうその時に謝るしかな

い。

着物の次は今度は刀。着物の時ですら大泣きされたから、明日は……気絶するかもしれない。兎に角折れてしまったことを隠しておくのはよくない。

ここは腹を括って正直に話し、新たに打ってもらおうよう頼む。折れた小狐丸は最早修復不可能。名刀ともなれば、折れるということは生命と一緒に死ぬということ。仮に打ち直したところでそれは生前のようにはいかない。あくまで形だけをした、魂の抜けた人形と同じ。

「それじゃ、お元気で」

「ああ、その前に……一つ話がある。お主、家の娘と結婚するつもりはないか？」

「……は？」

これから帰ろうとした刹那、龍王の口からとんでもない言葉が飛び出す。同時に嫌な予感がした。

「お主程の腕前、そして小竜景光に選ばれたこともある。そこでだ、我が娘と結婚し我の跡を……龍王の座に付くつもりはないか？」

「いえ、ありません。彩華さんのように綺麗な人と結婚出来るのは嬉しいですけど俺は人間、それにまだまだガキです。ですからそのお誘いは謹んで辞退させて頂きます」

はつきりと断る。

もう結婚など何だのと面倒な話はゴメンだ。俺はまだ誰とも結婚をするつもりはない。

ただ普通に断るのは失礼だから、相手も納得する理由を述べた。だが、この後に待っていたのは豆鉄砲を食らった様な表情を浮かべて、直ぐに大声で笑い出す龍神一族の面々の姿があった。彩華も同じくクスクスと笑っている。

「お主、何か勘違いをしておるようだが……彩華は我の妻だ」  
「ええっ!？」

嘘だ、と叫びたくなるのを何とか抑える。

あり得ない。二十歳前後の若さの彩華、そして龍王は四十過ぎの中年男性。幾らなんでも歳の差があり過ぎる。俺以外の人間も二人が夫婦だと言っても信じない、龍王の娘と思ってしまうだろう。では、龍王の言う娘とは何処にいるのか。辺りを見回すがそれらしき女性は見当たらない。

「既に呼んである。出てきなさい、静音」

まるで此方の考えを呼んでいたかのように、龍王はある建物に向かって声を掛ける。

二人の陰陽師のような資格好をした男に連れられてやってくる、一人の少女。

龍王の娘と言っただけあり、凜として美しい顔立ちをしている。

だが直ぐに踵を返しその場から立ち去ろうとした。

このままでは本当に俺がロリコン扱いされてしまう。龍王の娘も風雅の娘である鈴姫と同じく小学生高学年ぐらいの幼い少女だった。

「まあまあ待つてください久國さん」

龍王の妻彩華が肩を掴んで制してくる。

「いやいや俺結婚しませんから、娘さん可愛らしいですけど俺結婚する気ありませんから、つーかも勘弁してくれ！」

彩華の手を振り払い、出口に向かって走り出す。

追い掛ける、と龍王の合図に今まで何処に潜んでいたのか。試練として差し向けられた傀儡達が再び姿を現し襲い掛かってくる。

それを新たに手にした得物、小竜景光を手に斃しながら龍門の滝より飛び出した。

「どう？ 彼と結婚してみる気はある？」

「……うん」

「そう。今回は逃げられちゃったけど、次に逢った時は……何が何でも落とすのよ？」

狙った獲物は絶対に逃がしちゃ駄目。お母さんがそうやってお父さんを手に入れたように、ね」

母の言葉に娘は頷く。

久國が龍門の滝から逃げていく姿を見つめ、母の彩華とその娘である静音はそんなやり取りをしていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1532v/>

---

幻想物語 ～『夏』～

2011年10月8日11時02分発行